日本財団 THE NIPPON FOUNDATION 助成事業

「笹川杯作文コンクール 2012-感知日本-」

入 賞 作 品 集

2012「中日国民交流友好年」認定事業

公益財団法人日本科学協会

教育・研究図書有効活用プロジェクト

目　次

1．「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～　・・・・・・・・・・・・・・・　3
★日本語の訳文
（1）一等賞
河北省　楊超・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
北京市　付饒・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
浙江省　袁明崇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
広西省　凌莉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
天津市　劉暁秋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
江蘇省　付昱・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

（2）二等賞
河南省　周俊青・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
安徽省　江春・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
浙江省　祝鴻平・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
河南省　徐愛民・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
山東省　付暁利・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
吉林省　孫浩宇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
四川省　王暁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
天津市　石潔・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
広東省　戴麗雯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
湖北省　薛嬌嬌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
広西省　鄭天華・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
遼寧省　鐘守玉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

★中国語の原文
（1）一等賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
（2）二等賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

2．「笹川杯作文コンクール 2012」～日本語で応募～　・・・・・・・・・・・・・・45
（1）優勝
ハルピン工業大学　季佳琳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
天津外国語大学　李钰婧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
（2）二等賞
対外経済貿易大学　王子維・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
長安大学　叶微微・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
（3）三等賞
大連工業大学　李蓬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
西南大学　金立・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
長春理工大学　史可・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
合肥学院　王杰杰・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
（4）優秀賞
魯東大学　張姍・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
蘇州大学　姜演華　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

蘇州大学　王瑩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
大連海事大学　孫志祥・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
上海外国語大学　沈震乾・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
長春理工大学　李暁琳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
天津外国語大学　蘇霖坤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
華中科技大学　張玉玲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
済南外国語学校　杜雨萌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
西南民族大学　楊立萍・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～

※原文に忠実に和訳しました。
※個人名の掲載については、本人の了承を得ています。

★日本語の訳文

（1）一等賞

葉子さんとの約束

河北省　楊超

葉子さんと知り合った頃、私はまだ 16 歳だった。私は当時、毎週日曜日に少年宮の日本語クラスを受講していた。陽の光が輝きぽかぽかとしたある日、日本語クラスの小川先生から日本の友達が紹介された。

「楊さん、この子は葉子さんです。一緒に連れ帰ってもかまいませんよ。いいお友達になってくださいね。」小川先生はショートカットの少女を私に引き合わせた。「葉子さん、この人は楊平(注)さんです。」先生は葉子さんを振り返り、日本語で私の紹介をした。私を見る葉子さんの目は真っ黒できらきらと、宝石のように輝いていた。笑顔がとても愛らしく、えくぼが魅力的だった。

葉子さんと親しくなったのは、その夕方、真っ赤な太陽がもう西へ傾いた時のことである。私は彼女を部屋に連れ帰り、椅子に登って、本棚の高いところから箱を取りだしたのだが、その中身が全部ばらばらと床に落ちてしまい、足もとが日本のアニメ本と光ディスクでいっぱいになってしまったのだ。葉子さんは驚いた様子だった。中国の少女がこれほどたくさん日本のものを集められるとは、きっと思いもよらなかったのだろう。彼女の驚きはすぐさま興奮に変わり、膝をついてディスクを 1 枚ずつ手に取り始めた。

「あら、あなたもこの映画が好きだったの？」彼女は急に喜び勇んで顔を上げ、1 枚のディスクを手に日本語で呼びかけてきた。「え、何？分からないんだけど…」私は急に自分が恨めしくなった。葉子さんが言ったことさえ聞き取れないなんて、どうしてこんなに日本語ができないのだろう。私は赤面してしまった。

そうした私の様子を見て、葉子さんは「ぷっ」と吹き出した。彼女は鞄から電子辞書を取り出すと、俯いて何やら細かく操作してから私に見せてくれた。辞書から女声のぎこちない中国語で「あなたも『千と千尋の神隠し』が好きなのですね、私にとっても、一番好きな映画の一つです。」と聞こえてきた。私も電子辞書を通じて「私も。何度も見ましたよ。」と返事した。

私達は顔を見合わせて、急にあははと大笑いし、その夜は一緒にディスクを見た。電子辞書の助けを借りて、私達は意外にも雑談を楽しむことができた。こうして、アニメ映画を通じて、葉子さんと深い友情を築くことができたのだ。

一日は、私たちにとって短すぎた。早くも彼女が立ち去る時間となった。

少年宮の入り口には空港行きの大型バスが止まっていた。葉子さんが小さいかばんを背負うと、きらきら光っていたその目も少し暗くなった。私はしっかりと彼女の手をつかんで、書いておいたメモを握らせた。「私の住所。手紙を書いて。」私はどもりながら日本語の単語で彼女に声をかけた。葉子さんは丁重にうなずいた。

初めて葉子さんから手紙が来たのは、次の年の春だった。日本からの速達には、手紙の他に 3 枚のきれいに包装されたディスクが入っており、すべて宮崎駿のアニメ映画だった。手紙を開くと、葉子さんのすっきりと美しい筆跡で「私のお友達へ。宮崎駿の新作映画です。きっと喜んでもらえると思います。今は東京に住んでいますが、間もなくまた引っ越します。落ち着いたら、また住所をお知らせしますね。」と中国語で書いてあった。彼女が電子辞書を片手に一語ずつ訳して一字ずつ書き写す情景が目に浮かんだ。

それから３年間、葉子さんの手紙はいつも不意にやってきた。『となりのトトロ』、『風の谷のナウシカ』、『天空の城ラピュタ』…葉子さんのおかげで、私は宮崎アニメ映画のすべての完全版を集めることができた。

しかし、彼女の住居はいつも落ち着いていないようだった。毎回の手紙で一度も詳しい住所を教えてくれることはなかった。

2011 年の春が訪れ、彼女の手紙がまだ来ないうち、日本で大地震が発生したというニュースを耳にした。ラジオ、テレビ、新聞、雑誌のすべてが日本の地震のニュースにあふれていても、この異国の友達と連絡をとることはできなかった。その年の秋になっても、葉子さんからの手紙を目にすることはできなかったが、葉子さんが私の中で消えることはないと確信していた。

2012 年６月、葉子さんと知り合って６年後、大学３年生となった私は家に帰った。街頭のアオギリは前年の冬に火事に遭って幹が黒々としており、近所の人達は誰も木が枯れたと思っていた。しかし、今は隙間なく緑色の葉がたくさん生えている。間もなく取り壊されることになっている団地で、ご近所さんは多くがもう出て行った後だった。もう惜しむ名残もなさそうだ。我が家が最後の世帯だった。母が階下で片付けをして、午後に来る引っ越し会社の車を待っていた。

私は漫画の本とディスクをすべて出して、きれいに積み重ね直した。ここ数年で葉子さんからもらった手紙を改めて見ると、そのすっきりと美しい筆跡が、また私の脳裏にあの場面を思い起こさせた。葉子さんがうつむいて、電子辞書を片手に、とても真剣に訳して、書き写して…目にかかった前髪をそっと払って耳にかけて…

６月の風がアオギリの葉に吹いて、がさがさと音をたてた。顔を上げると、緑色の人影が裏通りのあの一端から我が家の門まで歩いてくるのが見えた。郵便屋さんは緑色の帆布鞄から包みをひとつ取り出して、母に手を上げている。「楊さんってお嬢さんのご家族ですか？彼女に日本から速達です。」私はたまらなくなって飛ぶように駆け下り、郵便屋さんからそれを奪い取った。分厚い封筒にははっきりと、「東京都港区青山　葉子より」と書かれていた。

(注)楊平は、楊超さんが当時使用していた幼名

中国の院士と日本の先生

北京市　付饒

風雨の 40 年が経ち、中日国交正常化も 40 周年の日を迎えた。二十数年前、中国海洋石油工業の対外協力が始まった頃、日本が私達の“先生”だったことを知る人は少ない。

1979 年、鄧小平が南シナ海辺に深センという“特区”を設定し、ほぼ同時に、党と国家指導部が大海原に海洋石油工業という“特殊産業”を囲い込んだ。1982 年１月 30 日、『中華人民共和国　対外協力海洋石油資源採掘条例』が公布され、海外の事業者が中国に進出し協力事業として海洋の石油を探査開発することに法的な保障が与えられた。

こうした経緯から、私たちは広大な渤海で外国からの客の第一陣を迎え入れたのである。1985 年、中日協力による埕北油田Ｂプラットフォームが竣工して生産を始めたのだが、日本側は“作業者”を担当し（石油契約規定により実質的な作業の実施を担い）、中国側はそれぞれの持ち場に人員を配備して作業補助と学習を行った。大和民族の厳格さと団結力は、当時の中国の技術者に深い印象を残した。

Ｂプラットフォームについては、新日本製鉄、三菱重工、日本鋼管、三井造船、石川島播磨重工などのメーカーが５つの地区に分かれて建設したのだが、当時では最先端の技術と設備が使われた。Ｂプラットフォームが中国の渤海で竣工された後、中国の従業員はこの非常に巨大な物に対して好奇心と物珍しさを覚えた。西南石油学院の 1982 期卒業生、周守為氏は、業務に参加してわずか２年で中国側の操作係長という責務を課せられた。埕北油田Ｂプラットフォームに上がった初日、彼は引き船の上で何時間も揺られ、その上一刻の休憩もなく焼却炉の故障処理にあたっており、この巨大な代物を細かく観察する余裕さえなかった。しかし、日本側の岩崎副鉱山長は、当日

の生産が終了した時、日本の管理理念により、彼に当日のプラットフォームの生産データを尋ねたのである。周守為氏が直ぐには答えられずにいると、岩崎氏は国内外の労働者の面前で彼を叱責したのである。「君は操作係長なんだから、このあたりの状況は掌握しているべきだ。」周守為は、一言も弁解しなかった。

彼が弁解しなかったのは、海洋石油システムに関する愛国主義についての討論に参加したことがあったからだ。日本などの国の先進的な採油設備について考察することにより、中国海洋石油の人々は“遅れているのを認めないことが、愛国主義ではない”と明確に理解していたのである。当時、“国際標準と統合”、“先進技術と現代的な管理を掌握して外国のパートナーに追いつき追い越せ”、“共に Win-Win”といった言葉が中国海洋石油の内部では流行していた。

それからというもの、この若者は昼間には黙々と日本の専門家の操作を観察し、夜になると深夜まで日本側が提供した資料にかじりついていた。日本側も重要な技術を隠すことなく、中国側の作業人員に設備を十分に熟知させ掌握させていった。約 2 年の時を経て、周守為氏を代表とする中国側作業人員は、日本側に提供された英文の図面資料 100 数枚を全て“飲み込み”、1 本のパイプがどのくらい曲がっていて、いくつのバルブがあるかというところまで、全てを明確に理解した。

1987 年のある日、周守為氏が飛行機のプラットフォームの上を散歩していた時、彼はプラットフォームの中国側の鉱山長に「こいつの事情は明確に飲み込めました」と話した。中国側の鉱山長は慎重に考慮し、中国側が単独で B プラットフォームを操作したいと日本側へ厳粛に願い出た。日本側の田中鉱山長はこの申し出に対して非常に慎重であり、中国側がプラットフォームの操作技能と管理理念をマスターしているか否かをテストしてから判断することにした。日本の試験官は厳密に出題、試験監督、評価を行い、中国の受験生達はそれ以上に厳密に回答した。結果は、ただ 1 人の労働者が化学の基礎知識不足で不合格になっただけで、残りは全て優秀な成績で、周守為氏は答案用紙に価値ある見解をいくつも出した。田中鉱山長はその時既に 60 歳近くになっていて、日本の石油界では非常に声望が高い鉱山長であったが、中国の学生達の成績に満足して頷いたのである。

1987 年 6 月 15 日は、中国海洋石油の人間には忘れられない日である。この日、中国側の鉱山長の“始動”の一声により、埕北油田の操作担当者の地位が日本側から中国側に移動したのである。このことは、中国の労働者が初めて単独で国際標準により近代的な海洋石油採掘設備を操作したことも意味するのである。

1998 年、当時の日本側鉱山長の田中氏と中国側操作係長の周守為氏が再会した。田中氏は多くの中国側の従業員と結んできた友情を心おきなく話し、「中国人は近代的な油田をきちんと管理できるだけでなく、安全と環境保護の面では更に見事である。」と語った。2000 年 10 月、埕北油田の中日協力開発契約が正式に終了し、油田は自営生産に移行した。2009 年、かつて操作係長を務めた周守為氏が中国工学院の院士に当選した。埕北油田という 27 歳の勲功ある油田は、今なお絶えず祖国に原油を送り込んでいる。そこに記された中日友好の情は、周囲の果てしない海のように、永久に存在し続けるだろう。

鋭利な刀を捨ててしまわずに

浙江省　袁明濙

鋭利な刀は便利な道具にもなれば、自身を傷つける災いの元にもなる。いずれにせよ、孤島に漂着した人間はその刀を手放すわけにはいかない。生存するため、その刀でイバラを割りトゲを切って食糧を採集し、あばら屋の一つも築かねばならないのだ。

宇宙全体から見れば、この活気あふれる地球も、果てしない海に浮かぶ小島に過ぎない。地球上の人類もまた、孤島の民でしかないのだ。

福島原子力発電所の事故により世界中で“原発の是非”議論が巻き起こり、まだまだ終息しそう

にない。しかし、原発を推進すべきか廃止すべきかといった問題は、先の尖った刀捨てるか残すかということと同様に簡単なものだと思う。

エネルギーは世界経済を発展させる基本的な動力であり、人類が依って生きる基礎である。世界の人口は 70 億人にも膨れあがり、エネルギー需要も日を追って増加している。現在の消費量から専門家が予測したところによると、石油と天然ガスについては、半世紀も採掘することができず、石炭の採掘も 100 年から 200 年がいいところだそうである。人類は深刻なエネルギー危機に直面しており、長期的に供給可能で環境を絶対に汚染しないエネルギーを探し出す必要がある。

太陽エネルギー、風力エネルギー、潮力エネルギー、バイオマスエネルギーなどの新型エネルギーは、エネルギー密度の大きさや持続性に問題があり、その土地に応じた方法でしか開発や利用ができないのである。それでは、誰が人類の発展を牽引する役割を果たすのだろうか。原子力が最も希望の持てる未来のエネルギーなのである。

地球には、核分裂のエネルギー源であるウラン、トリウムなどの資源がかなり大量に埋蔵されている。十分に利用できれば、向こう数千年のエネルギー需要が満たせる量だ。海中には 20 兆トン以上の核融合エネルギー源―水素の同位元素デューテリウムがある。核融合技術が掌握できれば、デューテリウムの融合エネルギーで恐らく 100 億年ものエネルギー需要が満たせるのだから、無尽蔵と言うことができる。

核分裂の連鎖反応のエネルギーを発電に利用すると、低コストで汚染も少ない。1954 年、旧ソ連がオブニンスクに原子力発電所を建造して以来、全世界で運用中の原子力発電所は 400 数基にもなる。今、全世界の電気エネルギーの 16%は原子力発電によるもので、40%以上のエネルギーを原子力に依存する国も９つある。

しかし、長らく、特にチェルノブイリ原発事故以降、原子力発電の安全性が心配され続けている。2011 年３月 11 日、宮城県の東方沖でマグニチュード 9.0 の地震が発生し、すぐさま津波が襲った。このため福島原子力発電所で一連の設備故障、メルトダウン、放射性物質漏出といった事故が発生し、短期間では解決できない影響がもたらされている。事故の発生後、日本の 50 基の原子力発電所が全て運転を停止して安全検査を受けた。暫くは、“脱原発”の声が絶えなかった。福島の放射能漏れ事故の影響により、世界各国は次々と原子力発電の推進戦略を見直している。

原子力発電はそれほど危険なのだろうか。

実際のところ、数十年来、全世界で数百基ある原子力発電所はほぼ安全で正常に運転されている。1979 年のスリーマイル島原子力発電所の事故、1986 年のチェルノブイリ原子力発電所の事故は深刻なものだったが、これらはいずれも人為的要素が原因である。前者の主な原因は操作ミスと機械故障であり、後者は主に沸騰水型原子炉の設計に欠陥があったことと、問題報告がスムーズに伝わらなかったことが主な原因だった。

改めて福島原発の事故を見てみよう。今年７月５日、国会の福島原子力発電所事故独立調査委員会は最終調査レポートを公表し、この注目が集まる放射能漏れ事故を天災ではなく人災であると特定した。報告によると、福島第一原発の問題は、東日本大震災が発生する前から存在していた。発電所には地震と津波による衝撃への耐性がなかったのだ。措置を取る機会があったにも関わらず、監督管機関と東京電力株式会社の管理者が対策を先送りにし続けたことにより、この災難が起きてしまった。事故の根源は「管理監督体系が不完全な方策と行動体制を採用していたこと」にある。

これらのことから、人為的要素が排除できれば、上記の ３ 事故はいずれも防げるものであったことが分かる。ほんの数件の事故で全面的に原子力を放棄するのは、食べ物がのどにつかえたことを理由に食事まで止めてしまうのと同じだ。

先史時代、人類の祖先は火を恐れていた。現代人の核に対する恐れに勝るとも劣らないものだったはずだ。考えてみれば、恐ろしいからといって火の利用を放棄していたら、人類は今でも原始生活を抜け出していなかっただろう。今の地球は大いに文明が発展している。原子力発電というエネルギーの利器は、科学的に、合理的に利用して幸福の元にすべきものであって、災いの元になどすべきものではない。

原子力発電の安全は、人にかかっている。十分に事故の教訓を吸収した上で、積極的に、確実に原子力発電所の建設を推進すべきなのだ。安全性を第一に、原子力の安全基準を全面的に引き上げ、発電所の安全監視を強化すること。そして、より先進的な原子力発電技術を採用し、安全リスクを最低限に抑えることである。

原子力発電を放棄して、よりよい暮らしを

広西省 凌莉

2011年3月11日、日本の東方沖でマグニチュード9.0の大地震が発生し、巨大な津波を誘発した。そして福島原子力発電所が損傷を受け、大量の放射性物質が漏れ出した。度重なる災害に、日本は未曾有の重傷を負った。

地震や津波より、放射性物質拡散の方が深刻なようである。より破壊力があり、長く影響し、広く拡散している。こうした災害を修復する人々の能力は限られている。環境の自浄にはとても長い時間がかかる。放射性物質の拡散による人類、そして全ての生物への災害は耐えがたいものであると認めざるを得ない。

しかし、この事故は人類が自ら招いたものである。先進技術、経済発展、そして「より強大な」国を追求した代償は非常に重い。後世や依って立つ土地、ひいては地球全体まで犠牲にしてしまった。

建物は倒壊しても再建できるし、洪水もいつかは引く。人々には、ぼろぼろになった郷土を前に、街を再建する信念も能力もある。しかし、放射能漏れはいったん事故が起きてしまったら、そう簡単には収拾がつかないのだ。放射能災害により、人々は（以後、何代かの人々も）かつて暮らしていた土地に近づくことはできない。そこに関わる仕事、記憶、夢、希望も全て、その時、そうして消えてしまうのである。

経済発展と「より強大な」国のために、これほど重い代償が必要なのだろうか。その価値があるのだろうか。

人類発展のためには、自然のルールを理解し遵守すべきであり、自然のルールに合わせて生活をするべきなのである。人の力や知恵が大自然をいくらか変えることはできるが、如何なる変更も自然のルールに背くべきではないのだ。人類は自然界における1つの種に過ぎない。より便利で快適な生活のために、自然の生態系を破壊して他の種の生物が生存する環境を奪ってはならないのだ。人類は既にそうした行為をし過ぎてしまった。例えば、より便利な生活のため自動車を作ったことで、大量の排気ガスにより炭素の排出量が上昇した。温室効果がもたらされて、氷河は解け、海面は上昇し、島が水没した。日を追って深刻になる地球温暖化問題も解決できていない時、依って立つ土地が減り続ける状況にありながら、放射性物質が漏れ出したことで、元々の街が生存不能な土地になってしまっている。これは人類が自ら招いた最大の悲しみであると言わざるを得ない。

福島の原発事故による結果が深刻でないなどとは言えない。原発周辺の住民が大量に避難し、今でも避難所で暮らす被災者は多い。放射能の影響で日本を訪れる観光客が激減しており、中国からの観光客に限っては70%も減少した。大量の放射性物質が海中に流出し、汚染度が確定できないことにより、食の安全が不安視されている。また、日本の農産物や水産物の輸出にも深刻な影響が出た。人体が放射能に汚染されると、DNA の改変を招くことすらあるという。放射性物質が食物に入るのを避けるため、日本政府は大量のヒトやモノを費やしているが、まだ植生、空気、土壌、水源が受けた放射能汚染の挽回までには至っていない。さらには反原発の声の高まりによって、日本の政局の流動化が加速した。

戦争中に使用された核弾頭であれ、平和な時期に利用される原子力発電であれ、人類の記憶として最も深く刻まれているのは災害だけだろう。

現在の人類の能力では、原子力を日常生活で使いこなすことがまだできてはいない。メリット・デメリットを考慮すると、私達は原子力発電を放棄するべきなのである。核の威力に屈したためで

はなく、自然のルールに順応するために。経済を発展させること自体は間違いではないが、原子力発電だけがクリーンエネルギーではない。人類はより良い方法を探して、郷里を大事にして災害から救うこと、つまり私達の後世を救うべきなのである。なぜなら、最終的な目標は、より良く人類が発展できる世界であり、後の世代を他の種の生物たちとともに素晴らしい環境で生活させることなのだから。

原子力発電を放棄しよう。原子力発電が無くなれば、きっと人類の生活は、もっと安定して幸福なものになる。

桜の下で微笑む日本の少女

天津市　劉暁秋

昨晩は桜の夢を見た。嬉しくなるような満開だった。しかし、目が覚めて、夢だったことに気づいた。千里を思い出し、しばらく寝付けなくなった。

荒川千里は、私が大分大学に留学していた時のチューターだった。大分大学は留学生一人一人にチューターをつけ、日本での生活や学習などの相談相手にしてくれていた。日本の学生と留学生との交流促進にもなっていた。私は初めて「荒川千里」という名前を見た時、荒涼とした名前なので男子学生だと思っていた。本人に会ってみると、やせ形で、細長くて優しい眉と目をしていて、長い髪を耳元で束ね、美人でこそないが繊細で、見ていて気分のよくなる少女だった。

彼女は、私を連れて行って、必要な手続きを全てやってくれた。彼女との交流がやや面倒だったことは認めざるを得ない。私は日本語があまりできず、千里の英語も特にうまくはない上、日本人独特の発音だった。幸い漢字が使えたので、当初は主に筆談で交流することになった。彼女はごくまじめに、少なくとも週に1回は一緒にご飯を食べ、2週間に1回は指導教官に会うのだと教えてくれた。生活や学習で困ったことがあったらいつでも呼んでよいということだった。キャンパス内に桜の木があるかと聞くと、彼女はちょっと笑って瞬きをして見せた。「桜の季節になったら分かるよ！」

こうして私は秋の学期を通して彼女と接していたが、基本的には彼女が私の宿題を手伝ってくれるというのが主旨だった。彼女には、指導教官に会いに行けとしょっちゅう言われたが、彼の名前の日本語読みを覚えていなかったので気が進まなかった。いつも千里が私を先生の部屋に連れて行き、入室前に先生の名前を教えてくれた。退室する時には「失礼しました」と言うように注意してくれていた。幸いなことに、先生方がとても親切で、味気ないものもイメージを膨らませて生き生きと表現してくれた。そして、熱心な先生方の影響で、日本での1年間に、教壇に立つのは崇高で楽しいことだと思うようになり、将来いい先生になろうと密かに決心した。これは、師範大学で勉強した2年間にはなかった決心である。

千里は何度か私の部屋で遊びたいと言ってきたが、私は毎回はぐらかしていた。日本人とはあまり親密に付き合いたくなかったのだ。むしろこれはある種の民族間の深い隔たりで、彼らを好きになるのが怖かったと言うべきかもしれない。それぞれ皆さんが良くしてくれても、結局のところ私の留学はたった1年で、彼らとの縁も1年しかない。私は、そういう浅い思いが幾千里を越えて着地点を探すようなことをしたくなかったのだ。彼女はきっと少し失望しただろうと思う。

元旦に千里から年賀状が届いた。新学期には私のチューターをしないかもしれないとのことだった。彼女は私と知り合うまで、チューターがちゃんと務まるか心配だったという。外国の友人は私が初めてで、私と遊びに行く計画をたくさん立てたが実現できなかったため、彼女は自分がだめだったと感じていたようだ。

私が参加したいと思わなかったことがこういう結果になるとは、私も思っていなかった。実際、人の生命も数十年しかない。永遠などどこで探せるものだろうか。1年もあれば十分だった。ある人と知り合い、理解して、受け入れ、共通の記憶を持って、そして一生の思い出にするのも生活の恵みなのだろうか。私は千里にチューターを続けてほしい、寮にも遊びにおいでとショートメール

を送った。
　日は飛ぶように速く過ぎ、千里は私の寮の常連になった。彼女は私の作る卵トマト炒めが好きで、何度も私の作り方を細かく観察して試したが、それほど美味しくできないのだと言っていた。私達はグランドキャニオンへ遊びに行き、街をぶらついて、プリクラ写真を撮った。瞬く間に桜の季節が訪れ、キャンパスで色々な桜を楽しんだ。千里が満開の桜の下で私に手を振った時、一見か弱いこの女子学生がこれほど感動させてくれるとは、と急に思った。
　帰国する時、思いがけず千里が福岡空港まで見送りに来てくれた。大分からの交通費は往復で6000円程かかる。千里は大分大学には珍しく、車を持っていない学生だった。車がないのであちこち遊びに連れて行ってあげられないね、と何度も後ろめたそうにしていたものだ。彼女は自分の生活費をアルバイトで賄っていたので大変だった。なので、彼女が送ってくれるとは意外だった。荷物は自分で何とかするから大丈夫だよと話したが、それでも送りたいと言うのだ。
　保安検査場にさしかかると、千里は気詰まったようにさよならと言いかけ、ついには勇気をふるって私に抱きついた。私は肩を叩いて、お金が貯まったらきっと日本に遊びに来るからと言った。飛行機に乗ってから見てほしい、と彼女が何か袋をよこした。私は振り返らず中へ進んだ。この1年のすばらしい時間はもう後ろにしかない。
　搭乗後、千里にもらった袋を開けると、和服を着た熊が入っていた。そしてアルバム。知り合ってから別れるまでほとんど毎回、遊びに行くたび撮っていた写真が詰まっていた。写真はどれもきらきらした星などの小さなステッカーで飾られていた。どの写真にも、その時々の彼女の気持ちが写っていた。こらえきれず、涙が流れた。
　それから毎年、桜の季節になると、あの満開の桜の下で微笑む少女がとても懐かしくなる。

菊埼先生

江蘇省　付昱

　秋風が起きて、プラタナスの葉が落ち、古都南京にも寒さが増してきた。釣魚島の紛争が原因で、中日両国の関係も、風に舞う葉のように、どこへ飛んでいくか分からない。
　私と菊埼先生とは、一昨年の初夏に知り合った。ちょうど大学に入って、ものの弾みで日本語学科を選んだ頃だった。私は毎日たそがれ時、山の競技場で夕日を浴びながらジョギングするのが習慣だった。いつも優しい顔つきのお年寄りが私の近くを一周また一周と疲れも見せず走っていた。ある日、彼が1人の学生と日本語で何か話しているのが聞こえた。私はしばらくためらってから、ぎこちない日本語で先生に声をかけた。ちょうど学校創立記念日が近かったので、その学生に学校創立記念プリントＴシャツを手に入れる方法を尋ねていたのだそうだ。ちょうどその時、私には1着余分にあったので、寮に戻って彼に渡した。当初はささやかなエピソードだと思っており、先生との友情がそこから始まろうとは予想もしていなかった。
　大学2年次、作文の授業は外国人教員が担当になった。授業開始の10分ぐらい前、書物を抱えてゆっくりと壇上に現れたのはなんと菊埼先生だった。彼は微笑みを浮かべて「皆さんこんにちは、菊埼威です。日本から来ました。」と挨拶した。最初の授業が終わると、先生は私の前にやって来て「君はＴシャツをくれた学生だね。覚えているよ。」と声をかけてくれた。半年も前のささやかなことをまだ覚えていたとは、少し驚いた。
　日本語を学ぶ前、私は日本と日本人に対して先入観を持っていた。菊埼先生に対する態度も、先生を尊重しようという気持ちだけだった。菊埼先生は私が付き合う初めての日本人だったので、どうしてもたくさん接触してたくさん調べようと思ってしまっていた。
　先生は日本で退職した後、南京に来て引き続き教壇に立っている。彼の中国の歴史や文化に対する関心がとても強いのか、もう5年になるという。先生の話によると、初め彼は杖をついてよろよろと中国に来たそうだが、今やたとえ紫金山頂に登ったとしても、彼は元気なままだろうということだ。先生は、中国の自然の景色が素晴らしいお陰だと笑った。

ある授業で、菊埼先生は厳粛な顔をして「今日は9月18日です。皆さん起立してください。いっしょに3分間の黙祷をします」と言った。黙祷が終わると、彼はまた厳粛に「ありがとうございます」と言った。それから、彼は日本が中国侵略戦争で犯した様々な罪を話し始めた。先生は戦後生まれの世代で、戦争を極度に嫌っている。彼は先人達の過ちのために謝り、そして両国が代々友好的に付き合っていけることを望むと話した。

それから私は、映画で見る好戦的な日本人、今の日本の右翼が、もしかすると日本人全部を代表するものではないのではないかと感じ始めた。

私は次第に先生と打ち解け、よく食事や酒を共にするようになった。酒好きな先生は酒に強く、文章を書くのも好きだった。一番の憧れは、中国古代の詩人、酒に酔ってから不朽の名作を詠んだ李白だという。菊埼先生はまた遊びも得意で、祝日や休みにはいつも何人か学生を連れて名所旧跡を遊覧した。数年間で彼の足跡は長江の南北にまで及んだ。先生の体には私たちのような若い魂が住み着いているのだと私はいつも感じていた。

今年の中秋節、私は帰省に先生をお連れして、ついでに故郷の古跡をいくつか遊覧した。9月に発生した釣魚島の紛争が原因で、国内の民衆には反日感情が高まっていた。先生の精神状態も今ひとつ冴えなくて、中日の友好関係が一瞬にして烏有に帰してしまいそうな様子を見て、彼は大層気をもんでいた。先生はもともとよく話す人だったが、今回は無口になった。彼は、人の群れの中で無口でいないと中国人のように見えることはないからと言っていた。

ある教え子が結婚した時、菊埼先生は喜んで婚礼に出席したが、思いがけず他人に指を差され、「日本の奴」だと言われているのが聞き取れたそうだ。就職した教え子と雑談している時、気を遣って「君の会社の日本人従業員は反日デモを理由に帰国したかい？」と尋ねたところ、答えは「うちの日本人の奴らはみんな帰ったよ」だったという。先生はその時寒気が土踏まずからみぞおちまで貫通するのを感じて、かすかに痛んだと言っていた。

その日の後から、先生はついに病気にかかってしまった。菊埼先生の心中はとても苦しいはずだ。彼は中国の文化が好きで中国にやって来て、中国の学生に代々の友好の望みを見ていた。しかし、朝な夕な付き合った学生も、社会に出ると、中日関係が冷え込むや、日本に対する友好的な感情を簡単に捨ててしまった。彼は注いだ心血が無駄になったと思ったことだろう。

私は、私達のように日本語を学ぶ学生がいて、先生のように中国を心から愛し、平和を心から愛する日本人さえいれば、中日両国は代々友好的に付き合っていけると先生に言った。先生はそれでようやくいくらか気が楽になったようだ。

ここまで書いて、私は、また先生の最近やつれた顔を思い出してしまった。中日関係も先生のお身体も早く好転して欲しいと思っている。

（2）二等賞

事故は人災　脱原発は理知的でない

河南省　周俊青

2011 年３月 11 日、宮城県東方沖で地震と津波が発生し、福島第一原子力発電所では一連の設備が壊れた。炉心溶融、放射能拡散といった災害事件は、1986 年のソ連チェルノブイリ原子力発電所の事故以来、最も深刻な核の事故である。福島の原発事故は、福島と近隣住民に健康被害をもたらしただけでなく、原子力の安全問題に対する世間の関心を改めて引きつけることとなり、原子力に対して否定的な意見を表明する人さえいた。

2012 年５月５日、日本の最後の原子炉となった北海道電力株式会社泊原子力発電所３号機の運行休止により、日本の原子力発電所は全て停止状態となった。42 年の時を隔て、日本は改めて“原発ゼロ”時代に入っており、原発依存度約 30%という原発大国から脱皮し、原発レス国家となったのである。

日本の“脱原発の風潮”は、他国が見習うようなものだろうか？原子力発電所の開発と安全性については、どのように評価すべきなのだろうか。思うに、まず福島の原発事故と原子力利用そのものに関する客観的な理解を得た後で。原子力の安全を見直さなければ、より科学的で適切な原子力に対する観念が打ち出せないのではないだろうか。

メディアが発表してきた災害の発生・進行の過程、そして東京電力と首相官邸の対応といった関連情報を見ると、福島の原発事故は天災というだけでなく人災でもある。何故そう言えるのか、まず、事故の初期状況を振り返ってみよう。3月11日13時46分、日本の東北地方の海底でマグニチュード9.0の巨大地震が発生した。地震発生後、福島第一原子力発電所の1～3号機と第二原子力発電所の4機全てが“原子炉停止”に成功し、第一原子力発電所の4～6号機は定期検査中だった。“原子炉停止”後も核燃料棒は大量の崩壊熱を放出し続けるため、“冷温停止”の安定した状態を実現するまで冷却し続ける必要がある。

このため、“原子炉停止”後の原子力発電所では応急措置としてディーゼル発電機を起動することで冷却水の循環を維持している。ただ不幸なことに、一時間後、津波による洪水でディーゼル発電機が冠水し、冷却水ポンプに電力供給ができなくなった。そして第一原子力発電所の1、2号機と第二原子力発電所の1、2、4号機が冷却機能を失ったのである。それから東京電力が単独で対応したが、海水による冷却を決断しきれず、また政府に全面的で正しい情報を速やかに提示することができなかったため、その後の深刻な核災害が起きたのである。

2011年4月9日、日本の原子力機関の責任者は、福島の核事故の発生には二つの原因があると認めた。一つは、原子力発電所の耐震設計がマグニチュード7にしか対応しておらず、津波に対する防災設計がされていなかったことであり、もう一つは、緊急発電設備に対する考慮が足りなかったため、地震後、速やかな電力補給ができず、冷却機能が失われ制御不能となったことである。そのため、客観的に見て、福島の原発事故には天災の要素もあるが、人災の要素もあるのだ。事故のきっかけは天災だが、制御不能になったのは人災が原因なのである。この判断は私たちに次のようなことを教えてくれる。原子力発電の安全を軽視することはできないが、一度の事故発生だけで原子力発電所の開発を完全に否定し“脱原発」とすることは決して理知的な態度ではないと。

原子力発電の作動原理を少し見ておこう。中国の原子力の専門家、中国工学院の院士である彭士禄氏が原子力発電の安全に言及した時、次のように話していた。「大亜湾原子力発電所にいた時、香港の人から原子力発電所の安全性の問題を聞かれたことがある。原子炉は原子爆弾のように爆発するのではないかと、私に質問する人さえいた。実際のところ、原子爆弾と原子炉は別々の概念であり、混同して語ることはできない。

両者には、いずれも原子核の核分裂の原理を利用しているという共通点がある。しかし、原子爆弾の核燃料濃度は90%以上にも達しており、原子炉の核燃料濃度の30～40倍である。また、原子爆弾はいったん連鎖反応が生じたら制御できるものではないが、原子炉の連鎖反応は制御可能なものである。私は、この問題を聞かれる度、原子力発電所はアルコールで言うと度数が3%～4%のビール相当だが、原子爆弾は濃度90%以上にもなるので高濃度アルコールに相当するというたとえ話をしている。アルコールは燃焼可能であるが、ビールは燃焼不可である。だから原子力発電所が爆発することはないのだと。したがって、原子炉はとても安全なものであり、大事故が起こることはそうそうないし、まして原子爆弾のように爆発することはない。特に、現在は全世界で、米国スリーマイル島原子力発電所と旧ソ連チェルノブイリ原子力発電所の痛ましい教訓を汲んで、原子力安全の監督と管理が強化されている。今なお世界には400箇所以上の原子力発電所、数百隻の原子力潜水艦があるが、いずれも安全に運行されている。だから皆さんには安心していただきたい。」

現在のようにエネルギーが逼迫している背景においては、原子力発電の開発は一種の必然的で理知的な選択だと思う。もちろん、原子力発電を開発する時は、原子力企業と政府のいずれもが安全に対する責任を負わねばならない。つまり、原子力企業については、必ず安全第一で、収益はその次という原則を厳守する必要がある。また、技術面で常に更新して、安全係数を最大限に引き上げ

ることである。さらに、安全意識の面では、油断、規則違反の操作、“病気を押しての運行”を絶対にしないことである。

政府関連部門については、監督責任を適切に担い、定期的な政府の巡視体制を構築し、外部から原子力企業に対して安全への影響力を及ぼすことである。より重要なことは、原子力企業と政府の関連部門が多重の応急計画により原子力発電の安全を保証し、突発事故への対応能力を強化する必要があるということである。まとめると、“天災”は避けられないとしても、我々ができることとは“人災”の排除である。そうしてこそ、“天災”の影響を最小限にできるのである。そうすることができれば、チェルノブイリや福島の核事故のような災難は避けられるはずである。

情義が引き寄せた木津祐子教授

安徽省　江春

今年は中日国交正常化 40 周年である。「新たな出会い、心の絆」をテーマとする「中日国民交流友好年」の訪れに、私は木津祐子教授のことを思い出した。先生には「先生の中国のペンフレンド、作家の江志偉の娘です。我が家は全員でずっと先生を気にしています。」と声をかけたい。

最近、父はまた 14 年前に頂いた手紙を持ち出して、先生の話をしてくれた。それは 1997 年 1 月 9 日のことでる。1 通の航空便が日本の京都から中国の黄山市に届いたのだった。手紙の宛先は、私の父である作家の江志偉である。父は当時「程大位記念館」の館長を兼任していた。父がその職位にあったのは、日本人に「計算の神」と称えられる中国の「珠算の師匠」程大位の伝記を書いたからである。差出人は、京都大学文学部中国語中国文学研究室の木津祐子教授である。その手紙の時点で、木津先生はちょうど中国の南京大学留学から帰国して、京都大学の中国語中国文学研究室に准教授として招聘されたところだった。

この日本からの航空便を遡ると、父と木津先生との間には、私たち一家が今でも感動するような物語があったのである。当時、木津先生は「古徽州」の黄山市に来て、徽州の方言と民間文学を調査研究しており、黄山学院中国文学部の紹介で父を捜し当てたのだった。二人の会談は、木津先生が宿泊する屯渓新安江賓館の客室で行われた。名刺を交換した後、簡単に挨拶をしただけで、父はかなり驚かされた―この日本の女性は何と流暢できれいな中国語を話すことかと。その後すぐ、木津先生はレコーダーの録音キーを押した。彼女は父から「屯渓老街の物語」を話してもらったのだ。先生が父に会いたがっていたのは、父が書いた徽州の民話に関するレポートを彼女が新聞で読み、その話が彼女自身も彼女の先生も収集していなかった資料だったので、是非とも補充しなければという理由からだった。

父が中国語標準で語り終わると、木津先生は屯溪方言でもう一度と頼んだ。その振る舞いはまたしても父を驚かせた。―彼女は謙虚な態度で父から教わった「屯溪方言版」から二箇所の翻訳問題について意見を持ち出したのである。この日本女性、標準中国語だけでなく、屯溪方言まで使えるとは！

またすぐに父を驚かせる第三の出来事があった。木津先生は 1 冊のノートを取り出して、無造作にページを開くと、とても標準的な休寧県（安徽黄山市が管轄）の方言を繰り出して、休寧民話を見事に朗読したのである。父はそのとき呆気にとられていた。目の前のこの日本女性が、標準中国語と屯溪方言のほかに休寧方言もしっかり話せるとは想像し難かったのである。

父は、彼女の休寧方言について一部の欠点にコメントしてから、彼女のノートをめくってみた。ノートにはびっしりと、流暢で、きれいな漢字で徽州の民話が記録されており、中国語一行ごとに、日本語といくつかの特殊な記号で方言の読み方と音の長さ、語調を明記してあった。

「三度の驚き」を経験した父は、その日、感動覚めやらぬ様子で帰宅した。父は「言葉の面での違いも含め、中日文化の間にはもちろん違いがある。どれも互いに交流し理解し合う上で障害になっているが、木津さんのような精力的な学者の前では、そうした違いも完全に縮めて塞いでしまうことができるものだ。まさに『世に難事はない、よじ登るのみ』だな」と話していた。

それから間もなく、父は木津先生が京都から送ってくれたこの航空便を受け取ったのである。手紙には、舞妓さんの図案が印刷された日本の年賀状が入っており、その中には木津先生から父へ改めて感謝が述べられていた。「この度の黄山訪問では、親切なご指導を賜り誠に恐縮です。」他にも、彼女は非常に「中国的に」私たち一家に対して「恭賀新禧（謹賀新年）」と綴っていた。父が彼女に日本の年号と西暦との換算について質問していたことに対し、彼女はわざわざ日本で出版された『東方年表』を送ってくれたのである。

その手紙が届いた時から、我が家全員は、木津祐子さんという徽州の方言と徽州の文化の研究に熱中する日本の友人の名前を覚えているのである。私たちは、よくネットサーフィンをして木津先生に関する細かな情報を調べています。例えば一彼女が招聘されて京都大学の中国文学研究室に入り、准教授になったこと。彼女が編纂に参与し、既に中日の文化交流の結晶となっている『徽州の方言研究』が日本で出版されたこと。彼女が、『中国語学』誌（256 号）編集委員会の編集主幹として『中国語の方言地図集』に見開き 2 ページの編者注を書いたこと。彼女がもと南京大学の大学院生として南京大学程千帆教授葬儀委員会に弔電を出したこと一など事の大小に関わらず、全てが私たちの心を京都に向かわせ、情義が木津祐子教授を引き寄せるのである。

思うに、父と木津祐子教授という中国と日本の文化人の間の「感動」と「感謝」のエピソードこそ、中日両国民の相互交流、相互理解の一コマであり、一つの縮図なのではないだろうか。

松井先生からの電話

浙江省 祝鴻平

十数年来、数ヶ月おきに松井先生から電話を頂いている。電話の呼び出し音が鳴って、番号が非通知なら、小学生の息子が私を呼んでくれる。「パパ、きっと松井のおじいちゃんからだよ！」

松井先生のフルネームは松井賢司さんと言い、中学校を定年退職した教師で、今年もう 78 歳の高齢になっているはずだ。松井先生とは、私が 2000 年に「浙江省・静岡県友好交流プロジェクト」で訪日研修に派遣されている時に知り合った。その年この交流プロジェクトを通じて日本へ行った浙江省の研修生は全部で十数人いたが、異なる業界から来たため、日本に到着後はそれぞれ異なる地方の受け入れ先の研修機関に派遣された。私は研修分野が教育だったため、掛川市郊外に位置する静岡県総合教育センターを訪れたのだ。たった一人で言葉でのコミュニケーションもままならず、当初は調子の悪さもひとしおだった。松井先生を始めとする日本の皆さんが私んに少なからぬ関心を持って助けてくれたお陰で、研修生活には割と早く馴染むことができ、一生役に立つような数々の悟りを得ることもできた。

2001 年に私が帰国してから、松井先生は 2～3 ヶ月おきに自宅へ電話をくれるようになった。指折り数えてみると、今年までで 10 年以上にもなる。松井先生の電話はまるで私の生活の一部のようになっている。

電話の内容は、初めの数年は多くが研修と生活でお世話になった静岡県、掛川市のちょっとした変化や、そこで知り合った人々の近況についてだった。教えてくれたのは、「あすなろ」（静岡県総合教育センターの別称）の前の木が伸びたこと、かつての所長が退職されたこと、静岡県空港が着工されたこと、省と県の友好 20 周年記念イベントが催されたこと等々…

先生から電話を頂くたび、研修生活の素晴らしい記憶が甦る。春の安倍川の岸で満開になった桜、夏の時の富士山頂の染みこむような涼しい風、秋の夜の掛川古城に昇る明月、冬の大浜海岸の海に面した温泉…記憶の中の画面は、人を引き付ける古い歌のように、近年事業がままならないため徐々に熱意を失いつつある私の心を潤してくれる。

松井先生の電話の内容には、日常的な挨拶の類も多かった。日本の男性は仕事を重んじる。松井先生は退職して長いにもかかわらず、仕事への関心がやはりとても重要な位置にあるのだ。松井先生が話を聞き終えると、決まって奥さんが「お子さんはお元気？奥さんは？」と尋ねてきた。日本の女性が家庭に関心を持つのも非常に理にかなっている。そうした話が終わると、彼女は決まって

私に言い含めるのだ。「祝さん、くれぐれも日本語を忘れないでちょうだいね。あなたが日本語できなかったら私たちとおしゃべりできないんだから！」帰国してからは言語環境がないため、日本語に疎くなり始めた私は赤面した。ご夫妻に電話を頂いたことで、また日本語の本を読む気が湧いてきた。

先生の電話の内容は、たまに少し変化する。当地の中日友好協会の会員として、松井先生は中国人に深い感情を持っているのだ。数年前、浙江省臨安市のある山村の小学生の成長について情況を尋ねられた。後に当地の教育部門を通じて知ったのだが、ご夫妻は中国の希望プロジェクトを通じて、数年間この貧しい児童たちに黙々と資金援助していたのだ。

「5.12」四川省ブン川で巨大地震が発生した翌日の夜、松井先生の電話の声はとても重かった。心を痛めていると繰り返し言っていた。また、その日の午後には募金もしたという。金額はわずか年金１ヶ月分だが、被災した中国の人々の助けになれれば、とのことだった。この電話には非常に感慨深いものがあった。この日本のお年寄りは、決して裕福な暮らしでもないのに、これほどの真心で、善意と気持ちを伝えてくれたのだ。彼らの行動に私も深く感動した。職場で被災地向けの募金には協力していたが、翌日には社区を通して僅かながら気持ちを表した。その電話以降、彼らの思想、行為をより深く理解できたように思う。

日本での研修期間中、松井先生の運転で、掛川市から数十キロメートルのとても辺鄙で静かな山村に連れて行ってもらったことがある。私は、魯迅の日本留学当時のある先生の故郷を見学して、野の花の生い茂っている中にそびえ立つ祖先の銅像を仰ぎ見、先人達の国を跨いだ誠実な情誼を追想した。

松井先生とのこうした交流を通じて、私は多くのことに前向きな感覚と認識を得ることができた。こうした面での収穫は、日本での業務研修の収穫に勝るとも劣らない。私はここ数年、研修期間に得られたこうした感覚や認識の実践に努めている。

私の家は浙江大学留学生センターからとても近いので、週末には息子を連れて行って、そこで日本からの留学生がどんな助けを必要としているか見に行くことが多い。

去年「3.11」東日本大震災の発生後、こちらから松井先生に慰問の電話をかけたが、私からの挨拶は、彼からの感謝の言葉に遠く及ばない感じだった。

最近では、今年２月に松井先生から電話を頂いている。簡単な挨拶のほか、先生はわざわざ、今年が中日国交正常化 40 周年で、浙江省と静岡県の友好交流 30 周年に当たると教えてくれた。彼は、生きている間、たくさん中日友好のために働くとのことだった。日本人は「大きな話」があまり得意ではないが、この「大きな話」は確かに松井先生の本音であると私には分かる。

覆った巣の下に無事な卵があるはずはない

河南省　徐愛民

2011 年３月、日本の大地震と大津波により福島原子力発電所に放射能漏出事故が起きた。死傷者や深刻な財産的損失があっただけでなく、放射能漏出の影響は世界の多くの地域にも波及した。そのため、原子力発電の安全問題も再び広く関心を集め、多くの有識者は、原子力発電の安全を人類の生存と発展に関わるレベルにまで引き上げた。

中国の古語に「城門での失火は、災いが池の魚にも及ぶ」と言うものがあるが、原子力発電の安全はその最もよい解釈となってしまった。1950 年代に世界のいくつかの国々が競って原子力発電を開発して以来、原発事故は原子力発電の発展と影のように足並みを揃えて来ており、「小さい事故は絶え間なく、大きい事故も起こっている」と言えるのだ。その中で最も深刻だったのが、1986 年の４月 26 日ソ連（当時）で発生したチェルノブイリ原子力発電所の事故で、事故で発生した大量の放射性物質を含む埃が、北欧と東欧、西欧の一部国家まで汚染した。専門家の分析によると、この事故による放射能漏れの後遺症を完全に取り除くには、800 年もの長い時間が必要だということである。

ああ！一世代の貪欲さが、数十世代に危害を残したのだ。原子力発電の安全を重視しなかった人々には後継者がいなかったのだろうか？

今日、CO_2の排出量が増大して地球は温暖化し、生態系の危機が顕著となり、多くの人々が人類共通の郷里を保護するために奔走し、声を上げている。しかし、人類が進んでリスクのある道を選んでいる理由が何であるのかを冷静に考える人は少ない。それは、人類がひたすら発展、繁栄、安逸を求めるという醜悪な本性を持っているからである。第一次産業革命では、蒸気機関の使用が普及し、人類が持つ物質と財産を質から量まで何もかも飛躍的に向上させた。第二次産業革命では、電力が広範に使用され、電力工業と電器製造業が急速に発展し、人類は電気の時代に入った。原子力、コンピュータ、宇宙技術とバイオロジカルエンジニアリングの発明と応用により、人類は第三次産業革命を迎えた。これらの産業革命の成果は、いずれも人類の生産力のレベルを大いに引き上げ、生活様式にも大変革をもたらした。しかし、こうした大きな発展が安定的で信頼できるものであると、一体どれだけの人が考えただろうか。

この問題に答えるため、やはり中国古代の著名な思想家である老子にお出ましいただこう。老子には「企（つまだ）つ者は立たず、跨（また）ぐ者は行かず」という言葉がある。つま先立ちは長続きせず、大股では遠くまで歩けないという意味である。今日、人類の歩んできた発展の道を振り返ると、あれ程「一刻を争」ってきた反面、どのように落ち着いて歩くのかについては、余り考えてこなかったのである。

福島原子力発電所の事故が発生したことにより、経済発展の速度の面でまた警鐘が鳴らされた。福島原子力発電は、日本国内のエネルギー不足を緩和し、日本の経済発展を促進し、日本の暮らしを改善するなど多くの面でプラスの影響をもたらしていた。しかし、原子力発電所の一時的な安全は、決して恒久的な安全ではない。普段の安全は、自然災害を受けた後にもなお安全であることと等しくはない。一旦事故が発生したら、福島の人々だけでなく、日本国民ひいては世界各地の人々にも災いし、最終的には子々孫々まで災いを残してしまうのだ。

私達はこの灯火の輝く年代を生きていることを喜んでいる時、私たちは、ろうそくを頼りにそぞろ歩く楽しみを失っている。エアコンの効いた室内で心地良い温度を楽しんでいる時、私たちは、囲炉裏を囲んで酒を飲むことや、うちわの風の雅さを失っている。自然を征服した成果に陶酔している時、自然界の報復が予期せず私たちにもたらされるのである。勿論、石器時代に戻って焼き畑農業をするという訳ではなく、経済発展の中で規則を尊重し、安全を重視することで、害を避けて利益に向かい、全人類ひいては後の世代に幸福をもたらすのである。

福島原子力発電所の事故が発生してから、世界で多くの国々が原子力発電の発展の歩調を緩め、原子力発電の安全管理に対して監視を強化している。しかし、覆った巣の下に無事な卵があるはずはない。原子力発電所はひとたび事故が発生したら、被害に遭うのは一地域の一時期だけではなく、人類全体であり、今後のかなり長い期間なのである。だから、私たちは原子力発電の安全管理を監督する国との協力を強化し、国際原子力機関などの世界的組織に力を発揮させ、原子力発電という全人類の頭上にある危険なダモクレスの剣が落ちてこないことを確実にしなければならない。

古い碑を前にして

山東省　付暁利

2012 年 3 月、北海道から硯鴻書道クラブの 40 数人が山東省を訪れて文化交流を行った。今回の交流は若手女流書道家に限られていたため、訪れたメンバーが若くてきれいな女性ばかりだったので、中国側としては非常に羨ましかった。北海道の総人口はわずか 400 数万人で、済南の半分にも及ばない。しかし、そのうちの 1 つの書道館からこれ程多くの人々が来るとは、日本の女性書道家人口の多さを感じた。

更に意外だったのは、かなり造詣の深いある日本の書道家が、あまりにも謙虚で中国の書道家に敬虔な眼差しさえ向けていたことである。中国の少女はこうした態度に馴染めず、ばつの悪ささえ

感じたのである。明らかに、こうした行為は遠慮の一言で片付くものではなく、３日後にようやく疑問が解けたのである。

交流の過程で、日本側から現場で１つリクエストがあった。済南一の石碑と讃えられる房彦謙碑を見学したいというのだ。

房彦謙碑は、書道界でこそ予てより名のあるものだが、観光地としての人気はない。中国人ガイドでさえ、多くは、そもそも碑の場所をはっきり言えなかった。10 数社の旅行社に当たって、7～8 人の大型バスの運転手に尋ね、最後に見つけた現地のカート運転手に案内してもらって、やっと、この済南市の東の郊外に位置する古墳を訪れることができた。古墳の墓碑は既に保護してあったが、周囲の賑やかさに比べると、その小屋はまったく相容れないものだった。

この時、驚くべき出来事が起こったのである。日本の女流書道家達は、それが房彦謙碑であることを確認すると、数日来ずっと上品で礼儀正しく、振る舞いも優雅であった乙女達が、急に自分を抑えることができない様子で、期せずして同時に跪いたのである。このぼろぼろになってしまった墓碑の前に這い寄る者、声も立てずに泣く者さえいた。この様子に主催者はどうしたらよいか分からなくなり、急いで歩み寄り助け起こしながら、その原因を当てずっぽうに推測してみた。

主催者側は後で知ったことなのだが、そもそも、この有名な書家である欧陽詢が自ら書いた房彦謙碑の日本における影響力は、中国におけるよりずっと大きいものであって、房彦謙碑は、日本の学童が書道を練習する重要な法帖の中にあり、日本の書家の心の中では最高の地位にあるのだ。どういうことかと言うと、よく知られている日本の有名なメディア―『朝日新聞』と『読売新聞』の題字は、欧陽詢が記した『房彦謙碑帖』と『宗聖観記』からの集字である。誇張ではなく、彼女たちは小さい頃から欧陽詢の字を見て育ってきたのである。『房彦謙碑帖』については、彼女たちが更にどれほど模写し、何年かみしめてきたか分からない。この書を書くために、一体どれだけの汗を流し、どれだけの墨や筆を費したことかも、分かるのは自分だけである。ただ惜しいことに、これほど重要な法帖で、彼女たちがこうして何年も見てきたものは、単なる拓本であり、影印本しかない作品もある。原本である石碑に拝謁することは彼女たちの抱いていた夢だったのだ。だから、神聖なもののように思っていた石碑の文字を眼前にして、これほど感動するのも不思議なことではないのである。道理で初対面の際、彼女たちがうやうやし過ぎたのも納得できる。そもそも日本の女性書道家の中では、中国は書道芸術の始祖というだけではなく、最も偉大に思っている書道の巨匠を育んだ土地なのである。だから、彼女たちは受け入れ側の人々に謙虚な眼差しを向けていたのだ。

その後、彼女たちは次第に落ち着いてきて、石碑に彫りつられけた文字をハンカチで拭う者あり、ひざまずいて石碑の下にある土を撫でる者あり、まるで千百年前に書家が奮起して一気に書く情景に陶酔するかのように…

この時、言葉は何も要らなかった。この古い石碑を前に、一同の交流を妨げるものはなく、言葉そのものも既に余計であった。私達は、粗末で荒涼でさえある墓碑を前に、とても温かく感動に満ちた午前のひと時を過ごしたのだ。今こうして思い出しても、心はこの上なく温かい。

10 日間の交流も終わり、彼女たちが帰国する前日は、ちょうど東日本大震災から１周年の日だった。空港で見送る時、更に人を感動させる一幕があった。搭乗前、日本の女流書道家たちは２列に並び、私達に向かってお辞儀をして謝意を表すと、突然、８尺ほどの全紙に書かれた書道の大作を広げて見せたのである。そこには雄大で力強い８つの大きな字で「一衣帯水、囷米之恩」と記されていた。後書きの所には小さな字で「日本国民に対する中国の助けに感謝します」という一行があった。

一同はこの情景に深く感じ入り、感動がやむことはなかった。囷米之恩の故事は『三国志演義』が出典である。ある年、田畑が凶作となり、江東の周瑜は家で蓄えていた食糧が足りなくなり、魯粛の家へ借りに行った。魯粛の家は裕福で、穀倉には２囷米（１囷は３千升）あったが、一族郎党の人数が多いため、食糧には決して余裕がなかった。それでも、魯粛はためらうことなく１囷を周瑜に与えた。周瑜はその恩を死ぬまで覚えていたという。この作品は、彼女たちがこの故事か

ら引用して、大震災後の日本に対する中国からの無私の援助に感謝したものであるということが分かる。

その後、彼女たちは空港に居合わせた人全員に小さなプレゼントを配り始めた。この小さなサプライズは中国の旅行者を大いに感動させた。まさか慌ただしい搭乗ロビーで、極めて温かい人情劇が繰り広げられるとは。しかも主役は、中日の最も普通の人たちだったのだから。

年の差を忘れる文化交流

吉林省　孫浩宇

私には大唐の夢と、日本への情がある。仕事と学術的関心が偶然一致したため、私と、日本の学者で、有名な漢文学者である岡村繁先生には、年の差を忘れる文化交流がある。

13 年前、私は大学を卒業して今の仕事に就き、唐詩と『昭明文選』の研究に着手した。驚くべきことに、この大学は、省属の普通の大学でありながら『文選』研究の優れた伝統を持っていた。小さな研究室に入ると、この研究室は国内外に影響力があるということを同僚から紹介された。それを聞いて、少し疑問に思い、ふと回りを見渡して、私は、ようやくこの小部屋が人を引きつける魅力を持っていることに気付いた。本棚には国内外の古典籍の貴重本が並んでおり、その中に日本の学者である斯波六郎の名作『文選索引』があった。向かいの壁には 1 メートル四方の書が飾られていて、更に目を引いた。かなり垢抜けた字体には円やかさと潤いがあり、逞しさも見え、一見してただ者の作品ではないと分かった。これこそ岡村先生の貴重な書―彼がこの研究室を訪問された時に残したものだったのである。しかし、当時の私は、彼が斯波六郎先生の教え子で、著名な「京都学派」の創始者、鈴木虎雄の孫弟子であることをまだ知らなかったのである。

「一衣帯水の扶桑の意、千載の文脈の九州の情。」この“文脈”は、当然、岡村先生の好まれる中国の文化と文学を指すものであり、“九州”は、一語で二つの意味を持っており、先生は九州大学の教授なのである。この連句には中国の伝統的な文人気質が非常にあって、岡村先生の中華文化に対する傾慕と深い情を具現している。

こうした部屋で働いていると、私は、伝統を継承する責任と光栄を感じ、また文章の中で岡村先生との「心の交流」を始め、彼の観点と方法から多くの啓発を受けた。そして想像も付かなかったことに、程なく先生とお目にかかることができたのだが、その時の出会いには心残りも多々あった。

2000 年の夏、１つの重要な学術会議（第４期「文選学」国際学術シンポジウム）が私の職場で開催され、私は連絡と接待を担当した。私は岡村先生を含む多くの学者に招待状を出したが、岡村先生からの返信は早く、そこには、美しくそろった楷書の小さな字で「ゆかりの地の再訪をとても待望しています」と書かれていた。岡村先生と私の職場には数年来の学術交流があり、先生には何度かご来訪いただいたことがある。先生の精致な手紙を頂いて、私はとても興奮し、会議の日をとても心待ちにしていた。

ついに、岡村先生が約束どおり書を残された部屋にお越しになり、私たちは会うことができたのである。清潔感あるシャツ、整った髪、お顔にはつやがあり、80 歳近いお年寄りのようには見えなかった。先生の手を握っていると、私は夢の中にいるようであり、敬慕して久しい異国の学者が目の前に現れたことで、私の感動は激しく沸き立った。私は岡村先生の学問、名声に感動し、また、共通項である中国文学に対する心からの愛にも感動した。しかし、私が、彼から何日か教えを請おうと思い付いた時、岡村先生はあまり中国語ができないということが分かり驚かされたのだが、このことで、逆に、自分が日本語を分からないことについて長らく悩むことにもなったのである。

残りの時間に私ができたことは、彼の身の回りの面倒を見て差し上げることしかなく、このことがあの時の出会いで最大の心残りであったと言わざるを得ない。岡村先生をお見送りして、自分の気持ちが落ち着いた頃、私は、日本の学者が中国文化を研究する精神は驚くべきものであるとふと思った。意外にも中国語を話せない人が有名な中国古典文学者になれるとは、実に不思議である。

日本では昔から多くの人が漢字を書けるが、中国語は話せないということを後に知り、私は、少しだけ納得した気持ちになった。

いずれにせよ、その時の出会いから、岡村先生との付き合いが始まったのである。翌年の元旦、郵便物をやりとりした時、岡村先生は会議の際のある細かいことにはっきりと言及し、更に謝意も述べておられたのだが、実は、それは全て私達の仕事だったのである。それから文字をやりとりする中で、私は岡村先生の学問の堅固さと人となりの謙虚さに気がついた。たとえ私のような若輩者に対してでも、先生は人の師になりたがらず、いつも探求する口ぶりでおられ、それは、先生が文章で思い切った新説を提示されるのとはまるで違うものであった。見たところ、同じように中国の文学を研究していても、両国の学風はやはり少し違うのである。

最も感動したのは 2008 年に起きた出来事だった。その年、私は『文選』に関する小書を編纂したのだが、岡村先生はこの分野の専門家であり、書道にも長けておられるので、書名の題箋をお願いしようと急に思い立ったのである。活字原稿を送ると、先生はまたとても早く返信して下さり、横と縦の２つ題箋を書いて下さった。私をひとしきり褒め称えた後で一言「元来うまく字を書けないもので、恐縮です。」と添えられており、それは、８年前、続けざまに「有難うございます」と口にされたお年寄りにまた会ったかのようだった。手を貸したのが彼ではなく私であったかのように。その題箋のおかげで、小書はかなり輝きを増したが、そのご恩は心に留めておくことしかできない。

先生の書の前に座ると、どうしても感慨を覚える。世の中は変転し、次から次へと混乱しているが、共通の文化の輪は重視する価値がある。公務か個人的な交際かを問わず、先生には本当に頭が下がる。彼の中国の文化に対する感情、研究する精神は、いずれも私達若者の模範であり励みである

福島原発事故をめぐる“つぶやき”

四川省 王暁

@王暁：

2011 年３月 11 日 14 時頃、日本でマグニチュード 9.0 の巨大地震が発生したことにより、福島第一原子力発電所で爆発が起き、大量の核燃料漏れが誘発された。日本や隣国の人々巨大なパニックをもたらし、全世界で原子力発電の安全問題に対する関心を呼び起こしている。福島の原発事故からもう１年以上になる今、皆さんは原子力発電をどう評価していますか？

中日政府チーム：

@胡錦涛主席：

中国は原子力安全対策を強め、本国の核燃料と核施設の安全を確保する。全体の原子力安全レベルを高めて、共に当地区の原子力安全レベル向上に力を尽くす。

@野田佳彦首相：国民の生活を守るため、福井県の関西電力大飯原子力発電所３号機と４号機を再起動すべきだ。

@全国政協　陸啓洲委員：

我が国のエネルギー需要量は絶えず上昇傾向を示している。原子力発電は安定的、高効率且つ大規模に利用可能なクリーンエネルギーとして、我が国のエネルギーの対外依存度を下げる重要な戦略であると同時に、国家のエネルギーの安定供給を保障し、経済社会の持続可能な発展を実現するために必然の選択である。

@共同通信社：

福島の原発事故は“天災ではなく明らかな人災”である。根本的な原因は日本の管理監督当局と東京電力との関係に“逆転”が発生したことにより、“監視、監督体制の崩壊”を招いたためであり、「放射能漏れ事故を予防する最善のタイミングを失った」のはそのせいだ。

@環境保護部（国家核安全局）：
日本の福島原子力発電所とは立地条件が異なるため、中国の原子力施設で福島原発と似た事故が発生する可能性は極めて低い。国家は既に短期、中期、長期的な計画を策定しており、民間の各原子力施設に期日どおり相応の改善を完了し、全ての発生可能性がある事故に対応するように求めている。

@国務院研究室総合司　範必副司長：
原子力発電の発展においては、安全を最上位に置くべきであり、安全問題は絶対に疎かにできない。去年３月、日本の福島原発事故の後、国務院は中国の原子力発電の発展に対して要求を出し、既に準備段階の作業が展開されているプロジェクトを含め、『原子力安全計画』の承認まで、原子力発電プロジェクトの審査許可を一時停止している。

中日有識者チーム：

@中国工学院 杜祥琬院士：
人類がその巨大な潜在力と価値を知ったからには、原子力を引き出しや籠に封じ込めておくことなどあり得ない。必ず努力して開発し、掌握して、人類の従順なツールにするだろう。原子力の制御不能こそ、真の危険である。

@経済産業省原子力安全保安院：
福島第一原子力発電所の事故で漏れた放射性物質の総量はチェルノブイリ原発事故の 10%程度であり、しかも放射性物質の漏れは既に管理下にある。輻射の程度は非常に軽微で、原子力発電所の近隣住民に短期的な危害をもたらすことはなく、まして周辺国に影響を及ぼすことはあり得ない。

@中国科学院理論物理所研究員、中国科学院　何祚庥院士：
福島の事故がくれた教訓は、原子力発電所の設計と運行に関する安全の標準を大幅に向上させなければならないということであり、つまりあのような“千年に一度”の偶然の事故をも含めて考慮しなければ、福島のような事故が再び発生しないことを“確保”することはできない。しかも“確保”は“絶対”でなければならず、“相対的に”確保することではないのである。

@中国原子力研究設計院　楊岐名誉院長：
原子力発電の発展では、安全第一の原則を堅持しなければならない。リスク意識、危機意識、責任意識を強化しなければならず、設計、製造、建設、運行、廃炉、安全の管理・監督と応急の各プロセスで全て責任を明確にして、共に安全防御線を構築しなければならないのである。

@中国原子力研究設計院　陳炳徳副院長兼シニアエンジニア　：
『原子力法』公布の準備を加速して、相応の原子力関連法律法規の体系を改善して健全にすることで、原子力発電所建設の大いなる発展と安全管理監督の情勢を要件に適応させることだ。

中日学生チーム：

@中国の小学生“小さな科学者”：
日本のみんなが前と同じように教室で楽しく過ごし、私のように科学の知識を学べたらいいな。私たちが大きくなったら、日本のみんなと原発っていう虎をキティちゃんに変えるんだ！

@福島県の小学生：

放射線は“とても恐い”、それで死んでしまうかもしれないけれど、私は四川省ブン川のみんなのように勇敢であることを選ぶ。

@中国の中学生“生命は確かに貴い”：
もう悲劇を再演させないで。原子力を引き続き発展させる前提は人類の生命が安全なことを保障すること。もしもある日、原子力の発展が本当に人類の壊滅を代価に求めるとしたら、より安全なエネルギーをどうしても求めなければならなくなるの？

@日本の中学生“原発事故には理性的に対応”：
飛び交うデマや、無数のおびえた眼差しに立ち向かうため、強さと自助努力を身につけなければならない。政府が満足な答えを出してくれるはずだと信じている。

@中国の大学生“未然に防止”：
どうしていつも事故が起きるまでミスを理解しないのだろう？国家は公共の問題を非常に重視するべきであり、二度と“おから”工事があってはならない。責任意識はとても重要だが、未然に防ぐことは更に重要であり、老子の言葉に「禍や福のよる所、福や禍の伏す所なり」とあるように、事故から経験と教訓をまとめることができれば、未来の長期的な安定が保証され、「災い転じて福となす」と言えるだろう。

@日本の大学生“To Be or Not to Be”：
中国の魯迅は「沈黙の中で爆発せず、沈黙の中で滅ぶ」という言葉を残している。私たちが直面しているのは生存と死亡の問題なのか、生存と発展の問題なのか、深く考える価値がある。

@王暁：
古語に「前車の覆るは後車の鑑」というものがある。福島の原発事故から人類が得た教訓は痛ましいものではあるが、私達に残された再考により、生まれ変わることができる。屈原は「路は漫々として其れ修遠なり、吾 将に上下して求索せんとす」という言葉を残した。原子力を引き続き発展させるべきか否かという問題に関しては、時間だけが良い試金石なのかもしれない。しかし、この問題と勇敢に向き合うことも必要なのである。世界の各国は次々と“持続可能な発展”にための戦略を出してきた。持続的発展が可能な道を歩くしかないと、私達ははっきり理解するべきである。更に、客観的且つ全面的に自然とその法則を知り、真剣に人類社会の発展史を熟視しなければ、自身と後代の生存と発展を満足させる生命の道を求めることはできないということも同様に理解すべきである。生命は継続されなければならず、むざむざ止めてしまってはならない。一時の貪欲さのために全人類を葬り去らないで！

原子力はグラスのようなもの

天津市 石潔

福島の放射能漏れ事故からかなり長い時間が経過したが、昨日のことのように思い出しては、心穏やかでない人やこの件が話題にのぼると顔色を変える人は多い。実のところ、“原子力”は空のグラスのようなものであり、注がれたものが美酒であればいい酒であり、味わいを堪能できる。それが毒液であれば人の命を脅かす毒酒となり、恐怖に満ちたものとなるのだ。

2011 年３月に福島原発事故が発生してからこれまでに、日本国民の生活はすでに正常に戻ったようである。しかし、放射能漏れの影響は引き続き存在している。その危害は今なおはっきりと現れており、今後も現れ続けるだろう。最近、日本政府は事故の被害者に対する賠償基準を制定した。被災地域を“居住制限区域“、“避難指示区域”、“帰宅困難区域”の３等級に細かく分けていることから、日本政府が事故の賠償業務に真剣で入念であることが窺える。よくある４人家

庭を例として、賠償金額には一般に 500 万～670 万円（人民元で約 62 万元～83 万元）の幅がある。少なからぬ金額ではあるが、ひどく心に傷を受けた被害者にとって、身内と郷里を失った痛みはそうそう修復できるものではない。

本当に巨大な影響は、今の経済と資源の面だけではない。人々の示す“不安”が最も恐ろしいのだ。少し前に日本で行われたある調査では、80%の人が“脱原子力発電”であるべきと回答している。原子力発電所について、88%の人が“不安”と回答した。地震前に制定された「2030 年に原子力発電所を 14 基増設する」計画について、「当初計画どおりにすべき」と回答した人は 6%だけだった。この一連の調査データから、“原子力”が今度の事故で誘発した問題は十分に大きいということが分かる。

そこで、原子力発電所を“毒酒”とみなし、遠く離れ、断絶して、拒絶しようという人が出てきた。思うに、“原子力”に対する心配が少し誇張され過ぎなのではないだろうか。私達は“原子力”の二面性を見るべきなのである。確かに原子力には一定の危険が存在するが、原子力は避けるべきではなく、確かに巨大な価値を創造することができるという側面があることを否定できない。現段階では、エネルギー面のボトルネックが経済の発展を制約している。

したがって、私達は弁証法的に“原子力”の問題を評価し、原子力問題を正視すべきなのである。まず、私達は“原子力”の危険性と、もたらされる可能性がある巨大な危害について調べ、未然に防ぐ措置を万全にする必要がある。次に、科学技術レベルを高めて、より安全で効率の高い原子力発電所を建設し、原子力の応用をより広範で安全なものにすることである。そして、既存の他の資源とエネルギーの使用を節約して、再生できない資源が人類の最も貴重な財産であることを認識することである。加えて、より清潔で安全なエネルギーを探すこと、完全に原子力を代替できるエネルギーの発見に努力することである。

これらのことは全て先進技術のサポートが必要であり、一国の力だけでは実現し難いものである。グローバル化の進んだ今日、国家間の協力により、私達はより安全で信頼できる原子力技術を追求することができる。中国と日本はアジアの非常に重要な国家で、両国の歴史は付き合いが長く、文化は源の非常に深いところで交わっている。日本の文化は中国の文化の影響を深く受けており、中国も近代化の過程で日本の影響を受けてきた。中日の国交が正常化してから 40 年になるが、中日両国の政治、経済、文化関係のいずれにおいても著しい発展が見られる。中国のごく普通の青年である私も、自分の生活に対する日本という国の影響を感じることができる。だから、期待できるのは、原子力を含む様々な課題に向き合って解決して、よりよいエネルギーの問題の解決につなげていくよう、中日両国は完全に協力することであり、またそれは可能なことである。

原子力は本当に美しい“グラス”である。もし、中日両国が率直に誠意を持って付き合い、協力して、原子力発電の安全問題を解決すれば、そこに注ぎ込まれるのは、甘く芳醇な“女児紅”、すっきりした“清酒”となる。

国の関係を越える友情

広東省 戴麗雯

机には2枚の写真が飾ってある。1枚は両親との記念写真、もう1枚は莱拉が1人で写ったものだ。白いマキシスカートの彼女はすっきりと上品で、笑顔が輝いている。その写真の右下には「みはらしの丘にて」の文字がある。

莱拉のフルネームは「織田莱拉(注)」。北京を旅行している時に知り合った。彼女は全くの日本人で、慶応大学に合格した年、中国に遊びに来ていたのだ。初めて会った時、私は頑張って下手な日本語で話しかけたが、驚くことに彼女の口からは流暢な標準中国語が出て来た。10歳から中国語を学んでいるので、簡単な交流は問題ないとのことだった。別れる時、電話番号とメールアドレスを交換して、また連絡を取り合おうと約束した。

率直に言うと、旅行から帰って以降、私はそのことをあまり気に留めず、大事な3年次の準備に

集中していた。月次試験の前の週、彼女から電話が来て驚いた。やわらかな声が聞こえたが、ぴんと来るものがなく、2ヶ月前の記憶を辿るのに暫く時間がかかってしまった。

莱拉は、中国に来て初めて知り合ったのが私なので、この友情をとても大事にしているという。私は、そんなことを全く気に掛けていなかった自分が恥ずかしく思えた。それ以来、毎週土曜日には、忙しい時でも彼女と話すことにしている。

莱拉とのおしゃべりはとても楽しい。大学生活のあれこれを聞くといつも夢中になって時間を忘れてしまっていた。

私たちの間にあまり摩擦がないのは、だいたい彼女がいつでも譲歩してくれるからである。3年次は今迄で最悪の時期だった。いつも点数のランキングが気になって、神経が常に張り詰めており、いつ切れるか分からない程だった。ある模擬試験では、成績が良くなかったので、先生と親に絞られる破目になってしまった。そのストレスで、彼女と話している時、私はつい失態を見せてしまった。彼女がある話題について言いかけた時、内心で押さえていた不満がついに爆発して、話の続きも聞かずにがしゃっと受話器を投げつけてしまったのだ。傍らで新聞を読んでいた父に聞こえるほどの音だったと思う。

それ以来、彼女のほうから電話をくれることはなくなった。ほとぼりが冷めると、私は後悔した。ー明らかに自分の間違いなのに、他人に怒りをぶつけてしまったのだ。謝りたいと思ったが、私はどう話せば良いのか暫く分からなかった。高校受験前、彼女がメールをくれた。行間の端々から謝ろうとしているのが伝わってきた。彼女は、私にとってのその時間の重要性を理解していなかった、受験のストレスが重くのしかかっていることが分かっていなかったという。あれから電話をよこさなくなったのも、私に影響するのを恐れてのことだという。しかし、それが原因で友情が薄れてしまうのも嫌だったので、しばらくは我慢したがメールで説明することにしたのだという。文末に、「緊張しないで。試験が終わったら日本においで、みはらしの丘はきれいだよ」と添えられていた。

このメールに感動しなかったと言えば嘘になる。それをプリントアウトして引き出しにしまった。そして、毎週の電話は再開した。

今年の夏、日本政府が釣魚島の購入を発表し、同島の「国有化」手続きを開始した。このニュースは刺激的なものだった。率直に言えば、私は愛国者で、祖国の主権と領土保全に関心を持っている。それで莱拉にわざと冷たく接するようになった。それまでどおり電話は毎週していたが、態度をがらりと変えていたことには彼女も気づいていたはずだ。2人の会話はどんどん短くなり、週に1度の形式的な挨拶にまで変わり果ててしまった。「最近どう？」「まあまあ」「話がないなら、切るね」…うなってしまったことにも私は傷ついた。確かに知り合ってからわずか1年で、海も挟んでいれば、年も趣味も違う。それでもお互いを親友だと思って深い付き合いをしてきたのだ。それが今や、間に立ちこめる霧で相手が見えないのも同然。

高校に入って最初の週末に帰宅すると、母が小包を渡してくれた。東京からの荷物で、中身は大好きなテディベアだった。ベアの頭には中国語で「ごめんなさい」と書かれたラベルがあった。

もちろん莱拉がくれたものだとは分かっていたが、「ごめんなさい」の意味がすぐには分からなかった。実際、その溝を越えられずにいるのは私自身の問題であって、彼女に非はない。何を謝っているのだろう。疑問を抱えたまま電話してみた。政府が勝手に下した決定について、日本国民として申し訳ないのだと彼女は言った。中国の肩を持つつもりもないし、自国を責める気もないが、話し合いもせず実行してしまうのは確かに間違いだと。

形だけの挨拶のようにも聞こえたが、彼女の誠意は感じ取れた。返す言葉が見つからず、しばらく受話器を手で覆っていた。だいぶ経ってから、彼女の声がした。まだ友達でいられるかな、と。

私は深く息を吸い込んで、ずっと友達だよと答えた。話しながら私は「ごめんなさい」と書かれたラベルを折りたたみ、彼女の写真の裏にしまった。

(注) 個人情報保護の観点から、作者と作品に描かれている本人が協議して決めた仮名。

平凡な友情―エストニアワークキャンプの思い出―

湖北省 薛嬌嬌

郵便受けを開けると、日本からの手紙が目に入った。エストニアでの日々が思い起こされる。今年9月の初め、釣魚島の騒ぎが過熱し、中国国内は至る所で反日デモが行われていたが、私は西村緒紗里、岩田香文という日本の女の子と一緒に、エストニアの大森林で木の枝を運ぶボランティア活動をした。

私と緒紗里との縁は1袋のキャンディから始まった。集合の当日、タリンはどんよりとした曇天。バスターミナルできょろきょろしていた私は、集合地点を探すのにてんてこ舞いだった。ぼうっとしていると、1袋のキャンディが目の前に差し出された。「キャンディ要らない？」私はひとつかみ取り出すと、目の前の女の子をじろじろと見た。一重まぶたの大きな目でよく笑い、歯列矯正のマウスピースなど気にかけていない様子だった。彼女は関西外国語大学の学生で、少し中国語ができ、名札を指さして中国語で名乗ってくれた。

バスと連絡船を乗り継いで合計4時間を要し、途中で明らかに温度の低下が感じられ、雨粒がぱちぱちとガラスに打ち付けた。ぼんやりしていると、近くにいた彼女が腕を抱えて震えているのが目に入った。現地の乗客はみんなセーターを着ていたが、彼女は靴下、ショートパンツ、薄いTシャツしか身につけていなかったのだ。私は厚い上着を脱いで彼女に渡した。「どうぞ、私はたくさん着ているから」「どうもありがとう」彼女は受け取って体にかけた。

活発で明るい緒紗里と違い、岩田香文は内気な子だった。英語名はKaye。ある日の夜、シャワーをして部屋に戻ると、Kayeが窓際の椅子の前にうずくまって日記を書いているところだった。窓の外は藍色の空と真っ白い雲。差し込む光が彼女の輪郭を照らし出して柔らかな美しさだった。私がカメラを取り出したのに気づくと、彼女はブタを真似たように口を尖らせ、落ち着いてくれず「淑女ショット」を撮ることはできなかった。

Kayeの日記は日本語だったので、私は繁体の漢字しか分からなかった。彼女は書きながら、自分の知っている単語を持ち出しては話しかける私の相手をした。それから、彼女が日記を書くたびに私が近寄るようになり、その時間がちょっとした楽しいゲームになった。繁体字が出てくると、中国でどう読むか私が説明し、勉強好きなKayeは全てピンインで書き取った。富士山の麓の桜に話が及んだ時、私は、中国の武漢にある武漢大学にも桜が多いと教えた。日本か中国で桜が満開の時にまた会おうかという話もした。

Kayeはまだ18歳で小さな妹のようだったが、気配りのできる子だった。乗馬を終えて森に戻ったはいいが、手袋を忘れてしまった時のこと。その日は枝を運ぶ仕事で、手袋をしていないと怪我をしやすい作業だった。Kayeは私が手袋をしていないのを目にして、断ったにも関わらず、自分の右手から外してよこした。「これでみんな手袋ができるね」

森の中だけでなく、台所にも楽しみが色々とあった。緒紗里と昼食を作っていた時、ほとんど2人だけでたらい一杯の魚と向かい合った記憶がある。私が頭や皮を取ってさばき、塩を振って彼女に渡すと、彼女が鍋に油を注ぎ、魚を揚げていった。魚が黄金色に揚がると、香りが充満し始めた。昼食時、彼女は最初に揚げた魚を取ると、「台所に立ったのは初めてなの。これは私たちの魚ね」と耳打ちした。

「中国の夜」、このために私は、醤油もネギもない小島で、千切りジャガイモの甘酢あんかけ、ニンジンと卵のチャーハンなど中国料理の5品を用意したが、2人は進んで手伝いに来てくれた。食べ始める時、彼女たちは「チャーハン、チャーハン」と喜び私をほめてくれた。

解散前夜のパーティーで、私は「中国結び」をワークキャンプの友達にプレゼントした。日本の男の子、勇作は中国結びを耳に結んで踊り、緒紗里は私の手を引いて跳んだりはねたり。Kayeは「恥ずかしがり」路線のまま、ソファで楽しそうにみんなを見ていた。深夜、片付けに戻ってみると彼女たちはもう寝ていた。偶然、枕元を触ると紙が出て来た。緒紗里が書いてくれたものだ。「嬌嬌、あなたにリュックを置いていきます。中国料理がとても美味しかった、ありがとう。また会い

たいね」
　驚き、感動、喜びが一度にわき起こった。この子達とワークキャンプで出会えたこと、2週間の生活で誤解を解き、理解を深められたことはとても嬉しいことだった。違う国、違う文化、環境から来ていても、共通点はたくさんあった。一緒に国際的スターを占ってみたり、農場のかっこいいスタッフに熱を上げたり、中国料理に舌鼓を打ったり……中国と日本という国について言い始めれば、私は型どおりな印象を持ってしまうだろうと思う。しかし、日本人と触れてみて、付き合うのも交流するのも決してそれほど難しいことではないということに気付いた。ある友人のお母さんから聞いた話を思い出す。「多くの国に行ってみれば分かる。世界の人はみんな同じであるということが。誰にでも身内や友情はあるし、悲しみや喜びを共有できるものだよ」
　私も彼女たちの枕元にメモを残した。中国語で、桜の頃にまた会おうと。

野獣と鎖

広西省　鄭天華

　猟師が小さい虎を拾ってペットとして育て上げたという話がある。虎はとても利口で、確かに一時期は飼い主に寄り添い楽しく過ごしていた。しかし、ある日、飼い主が手に付いた血の跡を舐めさせると、虎の野生が呼び起こされ、彼はその餌食となったという。
　家畜を飼い慣らすことには少なくとも千年の歴史があるだろう。虎を囲い込んで飼育する例も少なくはないが、ついに普及はしなかった。費用も重要な要因ではあろうが、より重要な原因は恐らく別にある―災いを残す心配だ。千年以上も昔から、気を遣ってかわいがる者もあり、鞭や鎖で服従を強いる者もあった。飴と鞭を使い分ける方法もある。どういった手法を採るかに関わらず、ほぼ虎を手なずけ、大きな猫のように従順にすることさえできる。しかし、難しい所は、虎のような「大きい猫」の破壊力があまりにも強大なことで、逆襲はもとより、飼い主にじゃれついて揺さぶるだけでも、恐らく人間は生きた心地がしないだろう。もしも発狂しだしたら、虎が自然と羊の群れに入るように―虎は依然として虎であるが、飼い主やその隣近所の人間は子羊になってしまうのだ。
　しかし、結局それでも、虎をペットにする人はいる。比べてみると、鞭や鎖でしつけた方が放し飼いよりはずっと安全だ。鎖が鉄製で、監視している人間もいれば、鎖を引きちぎらない限り虎が暴れる機会はない。こうした状況でなら、虎が恐ろしいと言っても、どこも恐ろしくはない。怖いのは鎖のもろさと見張りの不注意だ。
　話をしたいのは、原子力についてである。事実上、原子力は虎よりはるかに極端な例であり、私たち人類はそれをどうしても手なずけようとしている。しかし、十分に丈夫な鎖の備えはあるのだろうか。いつでも万全の注意を払って監視できるだろうか。
　こんな話がある。ある夜、エジソンは夢を見た。夢の中で、彼の家の木製ドアノブが銅製に替えられていた。目覚めてみると、ノブが本当に銅製になっており、彼は正夢だったかと驚嘆した。家族によると、ノブは数日前に交換してあったのだという。発明家エジソンは優れた洞察力の持ち主だったが、自宅のドアノブに対しては「見ているようで見ていない」ことが実証されてしまったのだ。福島原子力発電所の設計者、建築者、管理者、保守担当者達は皆、長らく同じようなものを相手にしてきた。私は、決して彼らの責任感を疑う気はない。彼らには専門知識や洞察力もきっとあるのだろうと思うが、あまりにも見慣れすぎて「見ているようで見ていない」状態になる危険性はないだろうか。
　日本という地震の多い国で、ある人が最高耐震度マグニチュード7.9という原子力発電所を建設した。原子力発電所の建設水準がここまでで限界だとしたら、あるいは地球上でマグニチュード7.9以上の地震が発生したことがなく、マグニチュード7.9以上の地震は世界最後の日を招くというのであれば、何も問題ではない。しかし残念なことに、実際、マグニチュード9の地震が発生した。地震災害の後、原子力発電所の漏出事故という災害がより深刻な事態をもたらしたのだ。

私が言いたいのは、虎につける鎖がどれほど重く丈夫であっても、ゆるむ可能性はあるということである。

パンドラの箱を開けた責任を追及するとすれば、それは誰になるのだろう。アインシュタインか、オッペンハイマーか、それとも彼らを支えた巨人達か。しかし、いずれにせよ、67年前に、きのこ雲は昇った。

広島と長崎の惨事は人々に痛みの記憶を残したが、「ビッグイワン」の炎上で世界を覆っていた恐怖は次第に忘れられていった。人はいつでも都合のいい言い訳を探している。原子力を利用したい時は、今度の技術は第三世代でもっと安全だ、今度の原発はもっと堅固だと言うだろう。原子力を放棄したくなったら、頭上にダモクレスの剣があるのだと繰り返し強調するだろう。

原子力は核兵器とは違うと言う人もいるが、残念なことに両者には共通点がある。比較してみると、法律、道徳、技術の鎖を設けてはいるが、原子力の巨大な威力の前には、その全ての鎖がこれだけ脆弱だということだ。映画の中の決まりきった展開と同じで、原子力を利用し得る全員に自身の本分を守らせ、心の歪んだ人を全て発射ボタンから遠ざけるようなことを永遠に保証する訳にはいかないし、誰もが原子力技術の専門家ではない。一人の情緒が極度に制御できなくなった時、社会が深刻に揺らいでいる時、原子力発電所が巨大な自然災害に直面した時、一国が存亡の危機に立たされた時、それでも全ての鎖が万全であると保証することはできない。

もしかすると、核分裂時代はもう古い話で杞憂なのかもしれず、原子力の次の段階は「制御可能な核融合反応」で、核融合の主な燃料である重水が地球の全部の水資源に含まれる量は1/3200にも達している。ネットで検索すると、重水は数十元、あるいは数百円で売られていることが簡単に分かる。この技術が成熟したら、人類はより丈夫な鎖を使って、この更に狂暴な野獣或いは家畜に向き合うはずだ。発電所を大気圏外に建設することすらできるかもしれない。しかし、その原料の獲得を阻止する方法はあるのだろうか。考えてみると、一人で地球人全員の運命を握るような人が数十、数百、数千、数万、さらに数十億となった時、その鎖を締めるにはどうしたらいいのだろうか。

これを無用な心配だと言う人は、欠点を隠し改めようとしない人だとも言える。

問題はすぐそこにある。実は誰でも知っているが、エネルギーの選択肢は何種類もある。ただ効率がまだ明らかになっていないだけだ。省エネルギーを選ぶこともできる。ただこれまでのように浪費ができなくなるだけだ。

経験してから考えた原子力発電のこと

遼寧省　鐘守玉

人の一生には、深く心に刻み後々まで偲ばれる運命の日というものがある。ある瞬間に見た画面やシーンは往々にして脳内で過ぎた日の追憶と分類され、深い霧の中に放り込まれてしまう。

その時、私は引き出しを片付けているところだった。引き出しの底から航空券の控えが見えた。そっと手に取ると、印刷された情報がはっきりと読み取れる。2011年03月11日、大連発仙台行き。あの尋常でない日々に引き戻されたような気がした。

航空便は早くに予約してあったもので、彼女と出発日の相談をした時からずっと、その日を待ち焦がれていた。ついにその日が訪れ、早々に片付けてタクシーで空港に向かった。渋滞のせいで、空港に着いたのは離陸のわずか二十数分前。搭乗したのは私が最後だった。着席してやっと落ち着き、深く安心して、彼女との対面に思いを馳せた。

12時30分、飛行機は定刻どおり着陸。ロビーに出ると、彼女をすぐ見つけることができた。1年あまり見ないうち、彼女は少しやつれていた。深く見つめ合ってから、彼女は恥ずかしそうに私の手を引き「行きましょう」と言った。それまでに想定していた場面はどれも現れることはなかった。

彼女に続いて電車へ。発車して間もなく、激しい揺れが始まった。「日本の電車はどうして海賊

船みたいに揺れるの？」と聞くと、彼女は「違う、おかしいよ」と言う。彼女は焦りを浮かべながら四方を見回しだした。車内の人が大声を上げ始め、彼女もあたふたとして、地震だ地震だと私に言った。安定して立っていられないまま彼女を抱きしめ、内心これは「幸運」だろうかと思った。来たばかりで地震に遭遇するとは。しかし私が出会ったこの「幸運」は百年に一度もない規模の大地震だったのだ。

本当に幸運だったのは、二人とも無事だったことだ。「不幸中の幸い」という言葉は、自分のためにあるようなものだった。

その後、私は中国大使館の助けで安全に帰国できたが、彼女は福島に留まった。私は帰国後ずっと福島の動態、彼女の周囲の生存環境に関心を向けていた。もし原子力発電所がなかったら、福島は今のようにはなっていなかったと思う。福島県双葉町は第一原子力発電所から19.3キロしか離れていない。放射能漏れ事故の発生後、全町民が避難した。

そこには今でも災害発生時の情景が残されている。誰もいない児童遊園地、何もない大通りを歩く孤独な犬、投げ捨てられた靴などの個人の品々…双葉町はチェルノブイリ原子力発電所に最も近い「ゴーストタウン」プリピャチそっくりに変わってしまった。まるで時間が静止したように、ただ孤独な哀悼の空気だけが残って今なおゆっくりと流れている。

人々は核の話をすると顔色を変える。

原発事故にこれほどの破壊力があるというのに、どうして放棄できないのだろうか。多くの人がこうした疑いを持っている。原子力事故に関係する資料を探してみたところ、原子力発電が使われだして以来、これまでに起きた大型の放射能漏れ事故は3回。米国スリーマイル島原子力発電所、旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所、そして今度の日本の福島原子力発電所の事故である。原子力利用の歴史50年のうち、メルトダウンの深刻な事故はこの3回だけで、全体的に見ると事故の確率はまだ低い。

他に重要な点が2つある。1つは原子力発電が高効率で、省資源であること。例えば、百万kW級の石炭発電所は1基で毎年約300万トンの原炭を消費する。しかし同等出力の原子力発電所で補充を要する核燃料は毎年わずか30トン。前者のたった十万分の一である。もう1つは、原子力がクリーンエネルギーであり、環境汚染が少ないこと。現在の環境汚染問題の大部分は化石燃料を使うことにより引き起されている。化石燃料を燃やすと大量の二酸化炭素、二酸化硫黄、窒素酸化物、埃が排出され、地球全体の気温が上昇し、酸性雨やオゾン層破壊が生じる。環境にとって極めて大きな脅威と損害をもたらすのだ。しかし原子力発電所では化石燃料を使わないため、こうした環境汚染を起こさない。

日本の地震と津波による原子力発電所の事故の後、多くの国が、日本の事故の教訓は吸収に値するものの、本国の原子力発電推進計画に今回の事故は影響しないと表明している。イタリア、スペインなどは原子力依存が減ることはないとしており、「食べ物がのどにつかえただけで食事までやめてしまうこと」はできないと強調している。

そう、飛行機の墜落事故があったからといって飛行機に乗らない訳にはいかないだろう。世界はエネルギーの構造的な不足とエネルギー供給の不確定性に直面している。つまり従来の鉱物エネルギーの市場では需給バランスが失われており、高効率、クリーン、安価なエネルギーの供給が不足しているのだ。経済が急激に発展している今の世界では、原子力発電への依存度がますます高くなっている。

原子力発電はパンドラの箱のようなもので、いったん開くと閉じられるものではない。私達のするべきことは、原子力をよりしっかりと掌握し制御して、明日の世界により多くの恵みをもたらすことである。

★中国語の原文

（1）一等奖

我和叶子有个约定

河北 杨超

和叶子认识的时候，我还只有 16 岁。那时的每个周日，我都会到少年宫的日语班听课。在一个阳光灿烂、暖意绵绵的上午，日语班的小川老师领进来一群日本朋友。

“杨同学，这是叶子。你可以带她回家，希望你们可以成为好朋友。”小川老师把一个梳着短发的日本姑娘引到我面前。“叶子，这是杨平。”她又转向叶子，用日语把我介绍给她。叶子看着我，乌黑的瞳孔亮亮的，像宝石一样。她笑起来很甜，一对酒窝很迷人。

和叶子熟络起来，是在这一天的傍晚，红彤彤的太阳已经偏西的时候。我把叶子带到我的房间里，我站在椅子上，从高高的书架上取出一个盒子，哗啦啦把里面的东西全部倒在地上，日本动漫书和亮闪闪的碟片铺了一地。叶子显然很吃惊，她一定没有想到，一个中国女孩子也能积攒这么多日本的东西。她的吃惊很快转为兴奋，她跪下来，拿着一张张碟片翻看起来。

“啊，原来你也喜欢这部电影？”叶子忽然兴冲冲地抬起头来，举着一张亮闪闪的碟片用日语向我喊道。“你说什么？我，听不懂……”我突然开始痛恨自己，我的日语怎么这么差，现在连叶子说什么也听不懂。我的脸羞得一片通红。

看到我这个样子，叶子“扑哧”一声笑了。她从书包里掏出一个电子词典，低头仔仔细细地操作了起来，然后把电子词典递到我面前。字典里传出一个女声的生硬汉语：“你也喜欢《千与千寻》啊，这也是我最喜欢的一部电影呢。”我也通过电子词典告诉叶子：“我也是哦，我都看了好多遍。”

我和叶子对视着，忽然都“哈哈”大笑起来。那个晚上，我们在一起看碟片。通过电子词典的帮助，我们居然可以你一言我一语聊得不亦乐乎。就这样，通过动漫电影，我和叶子建立了深厚的友谊。

一天的时间，对于我们来说太短暂了。很快，叶子就要离开了。

少年宫门口停着开往机场的大巴车，叶子背着自己的小包，原本亮闪闪的眼睛也变得有些黯淡了。我紧紧抓住她的手，把一张早已写好的纸条塞到她手里。“我的，地址，写信。”我结结巴巴地用日语单词对她说道。叶子郑重地点了点头。

第一次收到叶子的来信，是第二年的春天。那是一封来自日本的快件，除了信之外，里面还有 3 张精装的碟片，都是宫崎骏的动漫电影。展开信，我看到了叶子娟秀的笔迹：“我的朋友，这是宫崎骏新出的电影，我知道你一定很喜欢。我现在住在东京，但是过不了几天可能又要搬家了。等到我们安定下来的时候，我再把我的地址给你。”这封信是用中文写的，我仿佛看到一个情景：叶子正拿着电子词典，一句句翻译，一字字誊抄。

在随后的 3 年里，叶子的信总是不期而至。《龙猫》、《风之谷》、《天空之城》……在叶子的帮助下，我集齐了宫崎骏所有的原装动漫电影。

可是，叶子的家似乎总是没能安顿下来。每一次来信，她都没能告诉我她的详细地址。

到了 2011 年的春天，我没有等到叶子的来信，却听到了日本发生大地震的消息。当广播、电视、报刊上都充斥着日本地震消息的时候，我却无法去联系这位异国朋友。这一年，春去秋来，我始终没能盼到叶子的来信。但我坚信，叶子不会就这样消失在我的生命里。

2012 年 6 月，在认识叶子 6 年之后，已经上大学三年级的我又回到了家中。街上的梧桐树在去年冬天的时候着过一次火，当时树干黑黢黢的，邻居们都以为树死了。可是现在，它们却长满了密密的绿色的叶子。这是个马上就要拆迁的小区，邻居们多已搬走了，好像不再让人们留恋。我家是最后搬走的一户，妈妈在楼下整理杂物，就等下午搬家公司的车来了。

我把漫画书和碟片都拿出来，重新码好。我再次翻看叶子这几年给我的来信，那娟秀的笔迹，让我的脑海里再次闪现出一幅画面：叶子低着头，对着电子词典，认认真真地在翻译、誊抄；她的头发垂到眼前，偶尔轻轻地用手把它们拢到耳后……

6 月的风，吹过梧桐树的叶子，发出“哗哗”的响动。我抬起头，恰好看到一个绿色的身影，从小街的那一头走到我家的木门前。邮递员从绿色的帆布包里掏出一包东西，对我妈妈扬扬手，喊道：“你家小杨姑娘呢？有她的日本快件。”我什么也顾不得了，飞奔下楼，从邮递员手中抢过邮件。厚厚的信封上分明写着：“东京都港区青山 叶子寄”。

中国院士 日本老师

海南 付饶

风风雨雨四十载，中日邦交正常化也迎来了 40 周年的日子。很少有人知道，二十多年前，中国海洋石油工业对外合作刚刚起步时，日本是我们的“老师”。

1979 年，邓小平在南海边圈出了深圳这个“特区”；几乎与此同时，党和国家领导人在大海上圈出了海洋石油工业这个“特行”。1982 年 1 月 30 日，一部《中华人民共和国对外合作开采海洋石油资源条例》出台，为外商进入中国合作勘探开发海洋石油提供了法律保障。

于是，在浩瀚的渤海，我们迎来了第一批外国客人。1985 年，中日合作的埕北油田 B 平台建成投产，由日方担任“作业者”——按照石油合同规定负责实施作业的实体，中方则在各个岗位配备人员进行辅助和学习。大和民族的严谨和凝聚力，给当时的中国技术人员留下了深刻印象。

B 平台组块分别由新日铁、三菱重工、日本钢管、三井造船、石川岛播磨重工等厂家在 5 个地方建造，使用了当时最先进的工艺和设备。B 平台在中国的渤海安装完成后，中国员工对这个庞然大物感到好奇而陌生。周守为，1982 届西南石油学院毕业生，参加工作刚两年就被压上了中方操作系长的担子。他第一天登上埕北油田 B 平台时，经过在拖轮上几个小时的颠簸，又马不停蹄排除了焚烧炉的故障，一时还没有来得及细细地打量这座庞然大物。可是，日方的副矿长岩崎用日本的管理理念，在这天生产结束时向他询问当天平台生产的数据，周守为一时答不上来，被岩崎当着中外工人的面训斥：“你作为操作系长，这些情况是应该掌握的。”周守为一句也没有辩解。

之所以没有辩解，周守为想到的是自己曾参与的海洋石油系统关于爱国主义的讨论。通过对日本等国家先进采油设备的考察，中国海洋石油人清醒地认识到，“不承认落后，不是爱国主义”。当时，“与国际标准接轨”、“追赶和超越掌握先进技术和现代管理的外国合作伙伴”、“共创双赢”等，是海洋石油人的流行语。

在后来的日子里，这个年轻人白天默默地观察日本专家的操作，晚上啃着日方提供的资料直到深夜。日方也没有隐瞒关键技术，而是让中方作业人员充分熟悉和掌握设备。经过约两年时间，以周守为为代表的中方作业人员，把 100 多张日方提供的英文图纸资料都“啃”了下来，连每一根管道拐了多少个弯、有多少个阀门，他们都一清二楚。

1987 年的一天，在飞机平台上散步的时候，周守为对平台的中方矿长说：“这套东西我心里有数了。”中方矿长经过慎重考虑，向日方郑重提出了由中方独立操作 B 平台的请求。日方矿长田中对这一请求非常谨慎，他决定用考试来判断中方是否学会了平台操作技能和管理理念。日本考官严谨细致地命题、监考、评阅，中国考生们更加严谨细致地回答着。结果，只有一个工人因化学基础不好而不及格，其余都是优良，周守为在试卷上还提出了许多有价值的见解。田中，这位当时已经接近 60 岁、在日本石油界享有很高声望的矿长，对中国学生们的成绩满意地点了头。

1987 年 6 月 15 日，是一个中国海洋石油人忘不了的日子。这一天，随着中方矿长一声“启动”令下，埕北油田操作者地位由日方转移到中方。这也是中国工人第一次按国际标准独立操作现代化的海洋石油开采设备。

1998 年，当年的日本矿长田中与中方操作系长周守为再度相聚。田中畅谈了他与许多中方员工结下的友谊，他说：“中国人不仅能够管理好现代化油田，在安全和环保方面也可以做得更好。”2000 年 10 月，埕北油田中日合作开发合同正式结束，油田转入自营生产。2009 年，昔日的操作系长周守为当选为中国工程院院士。直到今天，埕北油田这座 27 岁的功勋油田，仍在源源不断地向祖国输送着原油，而她所记载的中日友谊，如同四周的汪洋大海，永存世间。

拿好利刃，而不是扔掉它

浙江 袁明滢

一把锋利的刀，可能是帮助你的得力工具，也可能是误伤你的罪魁祸首。无论如何，一个漂流到荒岛上的人，不能扔掉手中的这把刀，而应该用它去劈荆斩棘、筑庐逐食，以求得生存。

从宇宙的角度来衡量，看似欣欣向荣的地球，不过是汪洋大海中的一座小岛。地球上的人类，也不过是一群与世隔绝的岛民。

日本福岛核泄漏事故在全球引发的“核电兴废”的争论，还远不到平息的时候。在我看来，核电是兴是废的问题，就像尖刀是扔是留一样简单。

能源是世界经济发展的最基本驱动力，是人类赖以生存的基础。全球人口数量已达七十亿之巨，人类对能源的需求与日俱增。按目前的消耗量，专家预测，石油、天然气开采只能维持不到半个世纪，煤炭开采也只能维持一两个世纪。人类正面临严重的能源危机，必须寻找到既能保证长期足量供应、又不会造成环境污染的能源。

太阳能、风能、潮汐能、生物能等新型能源，或能量密度较小，或缺乏持续性，只能因地制宜地开发和利用。那么，谁来驱动人类发展的车轮？核能是最具希望的未来能源。

地球上蕴藏着数量可观的铀、钍等裂变资源，如果把它们的裂变加以充分利用，可以满足人类上千年的能源需求。在大海里，还蕴藏着不少于 20 万亿吨核聚变资源——氢的同位元素氘，如果掌握可控核聚变技术，这些氘的聚变能，将可能满足人类百亿年的能源需求，可以说是取之不尽。

利用链式核裂变反应所释放的能量发电，成本低、污染少。自 1954 年前苏联建成第一座核电站——奥布灵斯克核电站以来，全世界投入运行的核电站已有 400 多座。当今，全球 16%的电能是由这些核电站生产的，更有 9 个国家的 40%以上的能源生产来自核能。

然而，长期以来，特别是前苏联切尔诺贝利核事故以后，核能发电的安全性一直为人们所担忧。2011 年 3 月 11 日，日本宫城县以东外海发生里氏 9.0 级地震，紧接着引起的海啸，在福岛核电站造成一系列设备损坏、堆芯熔毁、放射性物质泄漏的事故，其影响短期内难以消除。事故发生后，日本 50 座核电站全部停止运营，接受安检。一时间，“去核”之声不绝于耳。受福岛核泄漏事故的影响，世界各国纷纷重新审视核电发展战略。

核电真的那么不安全吗？

其实，几十年来，全世界数百座核电站的运行基本上是安全正常的。1979 年的美国三里岛核电站事故、1986 年的前苏联切尔诺贝利核电站事故，是两起比较严重的核事故，但这两起事故都是人为因素造成的。前者主要是因为操作失误和机械故障，后者主要是因为沸水反应堆的设计有缺陷、问题报告传达不畅。

再看日本福岛核事故。今年 7 月 5 日，日本国会福岛核电站事故独立调查委员会公布最终调查报告，将这起牵动世人神经的核泄漏事故定性为“人祸”，而非天灾。报告称，福岛第一核电站的问题，在东日本大地震发生之前就已经存在，核电站无法确保能够承受地震和海啸的冲击。尽管有机会采取措施，监管机构和东京电力公司管理层却蓄意拖延决策，没有及时行动，从而导致了这场灾难。事故的根源是“监管体系支持不完善的决策和行动机制”。

可见，如果排除人为因素，上述三起核事故都可以避免。仅仅因为发生过几起核事故就全面弃核，无异于因噎废食。

史前时代，人类祖先对火的恐惧，应该比现代人对核的恐惧有过之而无不及。试想，如果因为害怕而放弃了对火的利用，人类可能至今仍未走出茹毛饮血的状态。如今，地球熙熙攘攘，对核电这一能源利器，我们应该科学、合理地加以利用，让它造福人类，而不是避之如洪水猛兽。

核电安全，事在人为。我们应当在充分吸取事故教训的基础上，积极、稳妥地推进核电站建设。必须将安全性放在首位，全面提升核安全标准，强化核电站运营的安全监管；同时采用更为先进的核电技术，将安全隐患降到最低。

放弃核电，生活会更美好

广西　凌莉

2011年3月11日在日本东海岸发生的9.0级大地震，引发了特大海啸，进而导致福岛核电站受损，大量的强放射性物质泄露。灾难的叠加，使日本受到前所未有的重创。

相比于地震和海啸，核泄漏给人类带来的破坏性似乎更大、持续时间更久、扩散范围更广。人类对这种灾难的修复能力很有限，环境的自我修复周期也非常漫长。人类不得不承认：核泄漏给人类乃至地球上所有生物带来的灾难，是难以承受的。

而这，却是人类自找的！为了追求高科技，为了追求经济发展，为了国家“更强大”，付出或可能将付出的代价非常沉重：牺牲后代，牺牲人类赖以生存的土地，甚至牺牲整个地球。

房子倒了可以重建，洪水也总会退去。在满目疮痍的故土面前，人类有信心也有能力重建家园。但核泄漏事故一旦发生，事情就远没有那么简单了。核灾难使人们（甚至此后的几代人）几乎不能靠近这片曾经的家园，与家园有关的事业、回忆、梦想和希望，都随之消亡。

为了经济发展、为了国家“更强大”，却要付出这样沉重的代价，值得吗？有必要吗？

人类的发展应该了解和遵循自然规律，顺应规律性的变化来生活。虽说人的力量和智慧能对大自然做些改变，但是，任何改变也都不应违背自然法则。人类不过是自然界物种中的一种，不应为了享受便捷、舒适的生活就去破坏自然生态，剥夺其他物种的生存的环境。人类已经做过太多这样的事情。比如，为了生活更快捷，有了汽车，大量的汽车尾气，使碳排放量上升，温室效应来了，冰川融化了，海平面上升了，岛屿消失了。在还没有解决好日渐严重的全球变暖问题的时候，在日趋减少的人类赖以生存的土地上，却又因核泄漏等灾祸，使原本的家园变得不可生存。不能不说，这是人类给自己造成的最大悲哀。

福岛核灾难带来的后果，不可谓不严重。核电站周边大量居民疏散，至今还有不少灾民居住在避难所；受核辐射影响，日本当年的旅游人次急剧下滑，仅中国游客就减少了70%；大量放射性废液流入大海，水源不可确定的污染程度，使人们在饮食方面感到恐慌和担忧，并严重影响了日本农产品和海产品的出口；核污染进入人体之后，甚至可以改变人体 DNA；为避免辐射源进入食物链，日本政府耗费了大量的人力、物力，但依旧不能挽回植被、空气、土壤、水源遭受的辐射。甚至，日本政局的不稳，也有民众反核电呼声高涨的助力。

不论是战争时期使用的核弹，还是和平年代的核电，给人类留下的最深刻记忆，似乎只有灾祸。

以人类目前的能力，还不能在日常生活中完全熟练使用和掌控核能。权衡利弊，我们应该放弃核电。不是因为屈服于核的威力，而是为了顺应自然的规律。发展经济本没有错，但核电不是唯一的清洁能源。人类应该寻找更好的办法，珍爱和挽救我们的家园，也就是拯救我们的后代。因为，我们的最终目标，是让世界因人类的发展变得更美，让我们的子孙后代与其他物种共同生活在一个美好的环境之中。

放弃核电吧。如果没有核电，相信人类会生活将更安定、更幸福。

樱花下浅笑的日本女子

天津 刘晓秋

昨晚梦到了樱花，盛开的样子，看着让人心生欢喜。可是，突然就醒了，醒来方知是梦。想起了千里，很长时间不能入睡。

荒川千里，是我在日本大分大学留学时的导生。大分大学给每个留学生配了一个导生，以便给留学生提供在日生活和学习等各方面的咨询，同时也可以促进日本学生和留学生之间的交流。我初次看到“荒川千里”这个名字，以为是个男生呢，这么“荒凉”的一个名字。等见到本人才发现荒川千里瘦瘦的，有细长温顺的眉眼，长发随意地在耳边挽了一个髻，虽不漂亮却让人感觉很细腻，是个看着很舒服的女孩。

千里带我办了所有需要办的手续。我得承认，我们的交流有点麻烦，我的日语不怎么样，千里的

英语也比较一般，而且日本人的英语发音很是独特。幸好有汉字，所以一开始我们的交流方式主要是笔谈。千里非常认真地告诉我，我们一个星期至少应该一起吃一顿饭，两周见一次导师；若我生活和学习有什么问题，随时可以找她。我问她校园里有没有樱花树，千里笑笑向我眨眨眼："到樱花盛开的季节你就知道了！"

这样，在整个秋季学期里，我和千里之间的会面，基本上是以她帮助我做作业为主要内容。她经常催促我去见导师，而我却不太喜欢见我的导师，因为我记不住他名字的日语发音。每次都是千里和我一起去他办公室，进门前告诉我导师的名字，然后出来时提醒我给老师说"失礼了"。所幸，老师们都非常亲切，枯燥的东西能让他们形象生动地表现出来。并且，老师们工作的热情，让我在日本的整整一年里都觉得，教书是件崇高而快乐的事情，以至于让我暗下决心：将来做个好老师！而这个决心，是已经读了两年师范大学的我以前未曾有过的。

千里几次说想去我的房间玩，我每次都顾左右而言他。我不想和任何日本人有过多、过密的交往。与其说这是一种深层的民族间的隔膜，倒不如说，是我害怕过多的交往会让我喜欢上他们。每一个人对我都很好，但毕竟，我的留学期限只有一年，我与他们可能都只有一年之缘，我不想让一种哪怕是很浅很浅的思念要翻越千山万水去找寻一个着陆点。她一定是有些失望了。

元旦时，我收到来自千里的一张贺年卡。千里说，新学期她可能不做我的导生了。她说她在认识我之前很忐忑，不知能否做好这个工作。我是她的第一个外国朋友，虽然计划了很多和我一块出去玩的事情，但都没有实现，她觉得自己做得很不好。

我没想到会是这样。其实，人的生命也不过几十年的时间，我们能从何处寻找永久呢？一年的时间已经足够了。去认识一个人、了解一个人、接受一个人，拥有一段共同的记忆，并用一生来回忆温习，这也是一种生活的恩赐吧？我发短信给千里，告诉她，我希望她继续作我的导生，并且请她到我的宿舍来玩。

日子过得飞快，千里成了我宿舍的常客。她很喜欢我做的西红柿炒鸡蛋，说尽管很仔细观察了我做的过程，她自己也试着做了几次，但就是觉得不如我做的好吃。我们还一起去大峡谷玩，一起逛街，一起照大头贴。转眼间到了樱花盛开的季节，我们在校园里寻找和欣赏不同的樱花。当千里在满开的樱花下向我招手的时候，我突然觉得，这个看似孱弱的女生，竟然如此动人。

回国时，我没想到千里会去福冈机场送我。毕竟，从大分到福冈，来回路费要花五六千日元。千里是大分大学极少的没有个人小汽车的学生之一，因为没有车不能带我去很多地方玩，她曾不止一次地向我表示歉疚。实际上，千里的生活费都是自己打工挣的，很不容易。所以听她说要送我我很意外，我很真诚告诉她不用担心，我的行李自己应付得过来。可她执意要送。

要过安检口了，千里很局促地和我说再见，终于还是鼓足勇气拥抱了我。我拍拍她的肩膀告诉她，等我有钱了，我一定会来日本找她玩。她递给我一个小袋子，让我上了飞机再看。我向机场里面走，不敢再回头，这一年的美好时光从此只能在身后。

上了飞机之后，我打开千里给的的袋子，里面是一个穿和服的小熊。还有一个相册，相册里是我和千里从认识到分别期间几乎每次一起游玩时拍摄的照片。每张照片都用闪亮的星星等其他小粘贴装饰着；每张照片旁边都写着千里当时的心情。我的眼泪禁不住流下来。

从那之后，每年樱花盛开的季节，我便深深怀念那个曾在盛开的樱花下浅笑的女子。

菊埼先生

江苏 付昱

秋风渐起，梧桐叶落，为南京这座古城平添了一丝凉意。因钓鱼岛争端的缘故，中日两国之间的关系，也如这纷飞的叶，不知飘向何方。

我与菊埼先生相识于两年前的初夏。那时我刚入大学，阴差阳错地选择了日语系。我习惯于每天黄昏在临山的运动场上，沐浴着夕阳的余晖，和时间一起慢跑。而那时候，总有一个面相和蔼的老头儿从我身边一圈一圈地跑过，似乎永远不知疲倦。一天，听见他正和一位学生用日语说些什么，犹豫了一会儿，我还是走向先生，用生涩的日语向他问好。原来时值校庆，他正向那位学生打听怎样才能

得到校庆文化衫。刚好那时我多出一件，就回宿舍拿了给他。我本以为这只是一个小小的插曲，未曾料到这却成为我和先生友谊的开端。

大二时，我们的写作课由外教来教。离上课还有十来分钟的时候，我意外地看见，夹着书本缓缓走上讲台的正是菊埼先生，他微笑着说："大家好，我叫菊埼威，来自日本。"第一节课下课后，他走到跟前对我说："你是送我文化衫的那个学生。我记得你。"我有些惊讶，没想到时隔半年他还记得这件小事。

学日语之前，我对日本和日本人是有成见的。对待菊埼先生，也只是出于对老师的尊重。菊埼先生是我打交道的第一个日本人，我不免有和他多些接触、多些了解的想法。

菊埼先生是在日本退休后来到南京继续教书的。可能是因为他对中国的历史文化兴趣很浓，这一待，便是五年。据先生描述，当初他是拄着拐杖颤颤巍巍地来到中国的，但现在就算爬上紫金山顶，他依然会神采奕奕。他笑着说，这是托中国好山好水好风光的福。

有一次上课时，菊埼先生一脸严肃地对大家说："今天是'9·18'，请大家起立，我们一起默哀三分钟。"默哀完毕后，他还郑重地对大家说"谢谢"。然后，他开始说到日本在侵华战争中犯下的种种罪行。先生是战后出生的一代，对于战争是极度的厌恶。他为先辈们的过错道歉，并希望两国能够世代友好下去。

从那次起我开始感觉到，电影中那些好战的日本人、现在的日本右翼，或许并不能代表日本人的全部。

渐渐地，我和先生变得熟络了起来，时常在一起吃饭喝酒。先生爱喝酒、能喝酒，也爱写文章。他最羡慕中国古代能在醉酒后写下不巧诗篇的李白。菊埼先生还特别能玩，每逢节假日就会带上几个学生，一起游览名胜古迹，几年下来他的足迹已遍布大江南北。我常有种感觉，在先生的身体里，居住着一个和我们一样年轻的灵魂。

今年中秋节，我带着先生回到我的家乡，顺便带他游览一下故乡的古迹。因为九月发生的中日钓鱼岛纷争的缘故，国内民众反日情绪高涨。先生的精神状态也不是很好，看到中日友好关系即将毁于一旦，他很是焦虑。先生本来是一个爱说话的人，但这一次，他却变得沉默起来。他说，只有在人群中沉默，才能让他看起来像个中国人。

一位过去的学生结婚，菊埼先生高兴地去参加婚礼，不料却被别人指指点点，他依稀听出他们在说自己是"小日本"。在和已经工作的学生聊天时，他关切地问："你们公司的日本籍员工因为反日游行都回国了吗？"得到的回答却是："我们公司的小日本都回去了。"先生说，那时他觉得一股寒气从脚心串到胸口，隐隐作痛。

从那天后，先生终究是病了。菊埼先生心里肯定非常难过，他因为喜欢中国文化来到中国，在中国学生身上看到了中日世代友好的希望；可是，曾与他朝夕相处的学生，在进入社会后，在中日关系遇冷时，却轻易地抛却了心中对日本存有的友好感情。他觉得，他的心血可能白费了。

我对先生说，只要有我们这些学习日语的学生在，只要有先生这样热爱中国、热爱和平的日本人在，中日两国就能够世代友好下去。先生这才好像舒心了一些。

写到这里，我不由得又想起先生最近憔悴的面容。希望中日关系和先生的身体，都快些转好吧。

（2）二等奖

事故是人祸 弃核不理智

河南 周俊青

2011 年 3 月 11 日，日本宫城县东部外海发生的地震和海啸，给福岛第一核电厂造成了一系列设备损毁、堆芯熔毁、辐射释放等灾害事件，是 1986 年苏联切尔诺贝利核电站事故以来最严重的核事故。福岛核事故，不但给福岛及周边民众带来健康损害，也再次引发了世人对核电安全问题的关注，人们甚至对发展核电提出了否定意见。

2012 年 5 月 5 日，随着日本最后一个核反应堆——北海道电力公司的泊核电站 3 号机组停止运行，日本所有的核电站都进入停机状态。时隔 42 年之后，日本再次步入“零核电”时代，从一个对核电依赖程度达到约 30%的核电大国蜕变成一个无核电国家。

日本的“弃核风波”，会不会引起其他国家效仿？怎样看待核电的开发与安全？我认为，应先对福岛核事故和核电应用本身进行一番客观了解，再对核电安全进行审视，才可能提出比较科学、适当的核电观。

从媒体公布的灾害发生、发展过程，以及东电公司、首相官邸的应对措施等相关信息来看，福岛核事故既是天灾，也是人祸。为什么这么说呢？让我们回顾一下事故开始时的片段：3 月 11 日 13 时 46 分，日本东北部海底发生里氏 9.0 级特大地震。地震发生后，福岛第一核电站的 1、2、3 号机组和第二核电站的全部 4 个机组均成功实现“停堆”，而第一核电站的 4、5、6 号机组则处于定期检修状态。在“停堆”后，核燃料棒仍然放出大量自衰变热量，需要继续进行冷却，直至实现“冷温停止”的稳定状态，所以在“停堆”后核电站的应急柴油发电机启动，以维持冷却水循环。但不幸的是，在一个小时后，海啸带来的洪水淹没了柴油发电机，导致水泵缺乏电力供应，第一核电站的 1、2 号机组和第二核电站的 1、2、4 号机组丧失冷却功能。之后东电公司独自应对，在是否用海水冷却方面犹豫不决，也未能及时向政府提供全面准确的信息，这才引发了后来更严重的核灾害。

2011 年 4 月 9 日，日本原子能机构负责人承认，福岛核事故的发生有两方面原因：一方面，核电站的防震设计是针对 7 级地震设防，而没有防海啸的设计；另一方面，应急发电设备考虑不周，致使震后没能进行及时的电力补给，使冷却功能丧失，造成失控。因此，客观地看，福岛核事故既有天灾成分，也有人祸因素。事故的引发是因为天灾，控制不力却在于人祸。这一判断告诉我们：不能对核电安全问题掉以轻心，但也不能因一次核事故的发生而完全否定核电开发，“弃核”并不理智。

我们可以了解一下核电的工作原理。中国核动力专家、中国工程院院士彭士禄在谈到核电安全时曾说：“我在大亚湾核电站时，有香港人就曾问过核电站的安全性问题，有人还提到反应堆会不会像原子弹一样爆炸，让我去答辩。其实原子弹和反应堆是两个概念，不能混为一谈。它们有共同点，都是利用原子核的裂变原理。但原子弹的核燃料浓度达到 90%以上，是反应堆核燃料浓度的三四十倍。另外，原子弹一经发生链式反应，就是不可控制的；而反应堆的链式反应是可控的。每当有人问我这个问题时，我都会打个比方：核电站相当于啤酒，酒精浓度只有 3%到 4%；而原子弹相当于高浓度酒精，浓度高达 90%以上。酒精可以燃烧，而啤酒不会。所以核电站不会爆炸。所以说，核反应堆是很安全的，轻易不会发生大的事故，更不会像原子弹那样爆炸。特别是，现在全世界都吸取了美国三哩岛核电站和苏联切尔诺贝利核电站的惨痛教训，加强了核安全的监督和管理，至今世界上有 400 多座核电站、几百艘核潜艇，都在安全运行着，所以大家尽管放心。”

我认为，在目前能源紧张的背景下，发展核电是一种必然，是一种理智选择。当然，在发展核电的时候，核电企业和政府都要负起安全责任。从核电企业方面说，一定要坚持安全第一、效益第二的原则；在技术上要时时更新，最大限度提高安全系数；在安全意识上，则要绝对避免掉以轻心、违规操作、“带病运转”。从政府相关部门方面来说，则要切实承担起监督责任，建立常态化的政府巡查机制，从外部向核电企业施加安全影响力。还有很重要的一点是，核电企业和政府相关职能部门要有多套应急预案来保障核电安全，增强应对突发事故的能力。总之，如果说“天灾”难以避免，我们所能做的就是要杜绝“人祸”，这样才能把“天灾”的影响减到最小。如果能做到这些，切尔诺贝利和福岛核事故这样的灾难，应该是可以避免的。

情牵木津祐子教授

安徽 江春

今年是中日邦交正常化 40 周年。当以“新的相遇，心的纽带”为主题的“中日国民交流友好年”到来的时候，我又一次想起了木津祐子教授。我想对她说：“我是您的中国文友、作家江志伟的女儿，我们全家一直牵挂着您。”

最近，我的父亲又一次拿出 14 年前您寄给他的那封信，再次向我讲述了那些与您有关的故事。那是发生在 1997 年 1 月 9 日的事儿，一封航空信从日本京都寄到了中国的黄山市。信的收件人，就是我的作家爸爸江志伟，当时他是“程大位纪念馆”的挂职馆长。我父亲有此职位，是因他写作了被日本人誉作“算神”的中国“珠算宗师”程大位的传记。寄信人则是现为日本京都大学文学部中文研究室的木津祐子教授。寄那封信的时候，木津祐子教授刚从中国的南京大学结束留学返回日本，被京都大学的中国文学研究室聘为副教授。

由那封来自日本的航空信回溯，是一段发生在我爸爸和木津祐子之间、让我们全家感动并牵挂到现在的故事。当时，木津祐子又一次来到“古徽州”的黄山市，调研徽州方言、民间文学，经黄山学院中文系的介绍，找到了我爸爸。他们的会晤，是在木津祐子下榻的屯溪新安江宾馆客房中进行的。互换名片之后，只一番简单寒暄，就让我爸爸吃惊不小——这位日本女士的汉语竟然说得如此流利、标准。紧接着，木津祐子摁下录音机的录音键，我爸爸为她讲述了“屯溪老街的故事”。木津祐子之所以要会晤我爸爸，是因为她从报刊上读到过我爸爸采写的这篇徽州民间故事，而这是她和她的老师此前所未能收集到的资料，因此必须补上。

我爸爸用汉语普通话讲完之后，木津祐子又请他再用屯溪方言讲一遍。木津祐子的一个举动，再次让我爸爸吃惊——她以谦虚的态度，请教我爸爸刚才的“屯溪方言版”讲述中的两处翻译问题，并当场提出商榷意见。原来，这位日本女士不但会说会听汉语普通话，居然还会屯溪方言！

紧接着，又发生了让我爸爸第三次吃惊的事。木津祐子取出一个笔记本，随手翻开一页，就操起非常标准的休宁县（安徽黄山市辖）方言，娓娓动听地朗诵起一则休宁民间故事来。我爸爸当时几乎惊呆，他难以想象，面前这位日本女士，除了汉语普通话和屯溪方言之外，休宁方言也讲得如此地道。

我爸爸就她刚才的休宁方言中的一些瑕疵说了些意见之后，要过她手中的笔记本翻看了一下。笔记本上面，密密麻麻、洋洋洒洒，全都是漂亮的汉字记录着的徽州民间故事；而在每一行汉字的底下，都用日语以及一些特殊符号注明了方言的读音与音长、语调。

经历了“三次吃惊”的爸爸当天回到家中的时候，激动的心情依然未能平复。他对我们说：“中日文化之间当然有差异，包括语言上的差异，都是互相交流和理解的障碍；但在木津祐子这样有心而下功夫的学者面前，这种差异完全可以缩小和弥合。正所谓‘世上无难事，只要肯登攀’。”

此后不久，我爸爸就收到了木津祐子从日本京都寄来的这封航空信。信封里，有一张印有日本艺伎图案的日本产贺岁卡，贺卡内页，木津祐子对我爸爸再次表示了感谢：“这次访问黄山，承蒙了您的热情指教，使我深感不安。”此外，她还非常“中国”地给我们全家“恭贺新禧”。针对我爸爸曾向她咨询的日本年份与公历的换算问题，她还特地寄赠了一本日本出版的《东方年表》。

从收到那封信开始，我们全家人都记住了木津祐子这位热衷于徽州方言和徽州文化研究的日本朋友的名字。我们会经常上网，去了解有关木津祐子的点滴信息。比如说，她应聘加盟京都大学文学部的中国文学研究室，当上副教授了；她参与编撰、已成为中日文化交流结晶的《徽州方言研究》在日本出版；她以《中国语学》杂志（256 期）的编辑委员会主编的名义，为《汉语方言地图集》撰写了两页篇幅的按语；她以原南京大学研究生的名义，给南京大学程千帆教授治丧委员会发来唁电；等等，事无巨细，都让我们情系日本京都，情牵木津祐子教授。

我想，发生在我爸爸和木津祐子这两位中国和日本的文化人之间的“感动”和“感谢”的故事，不就是中日两国人民之间相互交流、相互理解的一个细节、一个缩影吗？

松井先生的来电

浙江 祝鸿平

十多年来，每隔几个月，我都会接到松井先生的电话。如果听到电话铃声响起而看不到来电号码显示，我上小学的儿子就会喊起来：“爸爸，肯定是松井老爷爷的电话！”

松井先生的全名叫松井贤司，是退休中学教师，今年应该已是 78 岁高龄了。

松井先生是我在 2000 年受“浙江·静冈政府友好交流项目”派遣赴日研修期间认识的。当年通过这个交流项目赴日本的浙江研修生共有十多人，因为来自不同行业，到日本后分别被派遣到了不同

地方的对口研修部门。我的研修方向是教育，因此来到了位于掛川市远郊的静冈县综合教育中心。只身一人，语言交流又不畅，初到时我备感不适。松井先生等日本友人给了我不少关心和帮助，使我较快适应了研修生活，并领悟到了不少让我终身受益的东西。

2001 年回国后，松井先生的来电每隔两三个月就会在我家响起。屈指算来，到今年已经十年有余，松井先生的电话俨然成为我生活的一部分。

松井先生来电的内容，初始几年多是告知我所研修和生活过的静冈县、掛川市的一些变化，以及我在那儿认识的一些人的近况。他会告诉我，“阿斯那娄”（静冈县综合教育中心日语别称发音）门前的树长高了，老所长退职了，静冈县的空港动工了，举办过友好省县 20 周年纪念活动了……

松井先生的来电，每次都唤起我对研修生活的美好回忆。春天里安倍川旁盛开的樱花，夏季时富士山顶沁人的凉风，秋夜里掛川古城高悬的明月，冬季时大崩海岸面对大海的温泉……记忆中的画面，如同一首动听的老歌，滋润着我近年因事业不顺而热情渐失的心灵。

松井先生来电的内容，更多的是一些日常的问候。日本男人以工作为重，尽管松井先生已退休多年，但对工作的关心还是放在很重要的位置上。松井先生问完，他的夫人一定会接着问：孩子好吗？夫人好吗？日本女人关心家庭也是十分顺理成章的事儿。交流完这些，松井夫人一定会叮嘱我：“祝桑，千万不要忘记日语哦，如果你不会说日语了，我们就没法交流啦！”让我汗颜的是，回国之后，因为没有语言环境，我的日语开始逐渐变得生疏。他们的来电，促使我又捧起了日文书。

松井先生的来电内容，有时也会有些变化。作为当地中日友好协会的会员，松井先生对中国人怀着深厚的感情。前些年，松井先生来电，要我打听浙江临安一个山村小学一名学生的成长情况。后来我通过当地教育部门得知，松井夫妇已通过我国的希望工程，默默资助这个贫困学生数年。

“5·12”中国汶川特大地震发生的第二天晚上，松井先生打来电话，语气很沉重。他们反复对我说很痛心，并告诉我，当天下午他们已捐过款了，钱不多，只有一个月的退休金，他希望对受灾的中国民众有所帮助。这个电话，让我感触良多。这样一位日本老人，生活并不富裕，却以这样一种爱心，表达了他们的善意和情感。他们的行动，也深深感动了我，尽管我在单位已为灾区捐过款，第二天我又通过社区表达了一份微薄的爱心。那次通话之后，我觉得对他们的思想、行为的理解更加深入了。

在日研修期间，松井先生曾经亲自开车几十公里，带我到掛川市外一个相当僻静的小山村，参观了鲁迅当年在日本留学时一位老师的故乡，瞻仰了矗立在繁茂野花丛中的先人铜像，缅怀了先辈们之间真挚的跨国情谊。

通过和松井先生的这些交往，我对不少事情有了更积极的感悟和认识。我在这方面的收获，可能并不亚于赴日进行业务研修的收获。这些年来，我一直努力践行着研修期间的这种感悟和认识。

我家离浙江大学留学生中心很近，许多个周末，我会带儿子到留学生中心，主动去看看那里的日本留学生，看看他们有什么需要我帮助的。

去年“3·11”东日本大地震发生后，我给松井先生打去了慰问电话，但我总觉得，我问候他的话语，甚至还不如他表示感谢的话多。

松井先生最近一次给我打电话，是今年 2 月的一天。简单的问候之外，松井先生特意对我说，今年是中日邦交正常化 40 周年，也是中国浙江与日本静冈缔结友好省县 30 周年。他说，他要在他的有生之年，多为中日友好做点事儿。日本人不太善于讲“大话”，但我知道，这句“大话”，确确实实是松井先生的心里话。

覆巢之下岂有完卵

河南 徐爱民

2011 年 3 月，日本大地震、大海啸引发福岛核电站泄漏事故，不仅造成了人员伤亡和重大财产损失，核泄漏的影响还波及世界的许多地方。核电安全问题也因此再一次受到人们的普遍关注，很多有识之士把核电安全提升到关乎人类生存和发展的高度。

“城门失火，殃及池鱼”，核电安全就是对这句中国古语的最好诠释。自从上世纪 50 年代世界上一些国家争相开发核电以来，核电事故就与核电发展的步伐如影随形，可谓是“小事故不断、大事故也有”。其中最严重的，是 1986 年 4 月 26 日发生在苏联的切尔诺贝利核电站事故，事故产生的大量放射尘埃污染到北欧和东西欧的部分国家。据专家分析，要完全消除这次事故带来的核泄漏后遗症，需要 800 年之久！

呜呼！一代之贪心，遗数十代之危害。不注重核电安全者，其无后乎？

今天，碳排放量增大，地球变暖，生态危机凸显，很多人在为保护人类共同的家园而奔走呼号。但很少有人冷静思索：是什么让人类心甘情愿地饮鸩止渴呢？正是人类一味地图发展、图繁华、图安逸的劣根性。第一次工业革命，蒸汽机的普遍使用让人类的物质财富从质到量都有了新的飞跃。第二次工业革命，电力的广泛应用让电力工业和电器制造业迅速发展起来，人类跨入了电气时代。原子能、电子计算机、空间技术和生物工程的发明和应用，让人类迎来了第三次工业革命。这些工业革命的成果，都是人类生产力水平的大提升、生活方式的大变革。但又有多少人想过，这样的大踏步发展是否安稳可靠？

要回答这个问题，还是请出中国古代著名思想家老子吧。老子说过：“企者不立，跨者不行。”意思是说，踮着脚是站不久的，大步快跑是跑不远的。今天，反观人类走过的发展道路，我们是那么地“只争朝夕”，但对于如何走稳却很少顾及。

日本福岛核电站事故的发生，在经济发展速度方面又一次给我们敲响了警钟。福岛核电站在缓解日本国内能源短缺、促进日本经济发展、改善日本人民生活等诸多方面都曾经发挥过积极作用；但核电站的暂时安全并不等于永远安全，平时的安全也不等于遭受自然灾害后仍然安全。一旦发生了事故，祸害的不仅仅是福岛人民，还会祸害日本人民甚至世界各国人民，最终还要遗害子孙后代。

当我们庆幸自己活在这个灯火辉煌的年代时，我们却失去了秉烛夜游的乐趣；当我们在空调房间里享受着舒适的温度时，我们却失去了拥炉饮酒、蒲扇送风的雅致；当我们为自己征服自然的成果而陶醉的时候，自然界的报复将不期而至。当然，我们并不是要返回到石器时代去刀耕火种，而是要在经济发展中尊重规律、注重安全、趋利避害，以造福全人类乃至子孙后代。

福岛核电站事故发生后，世界上很多国家都放慢了核电发展的步伐，加强了对核电的安全监管。但覆巢之下岂有完卵，核电站一旦发生事故，受害的将不仅仅是一地一时，而是整个人类和今后相当长的一个时期。为此，我们要加强核电安全监管的国家合作，发挥国际原子能机构等世界性组织的作用，确保核电这个悬在全人类头上的达摩克利斯剑不会斩落下来。

古碑前的感动

山东 付晓利

2012 年 3 月，日本北海道砚鸿书道俱乐部成员一行 40 余人来山东进行文化交流，由于此次交流仅限于青年女书法家，所以来的都是年轻漂亮的女性，这让中方十分羡慕，要知道北海道总人口仅 400 余万，不及济南人口的二分之一。但其中一个小书道馆就能来这么多人，可见日本女性书法人口之多。

更令人没有想到的是，尽管有的日本女书法家造诣很高，却仍然用极其谦虚甚至虔诚的目光来看待中国同行，这让中国姑娘很不适应，甚至有些尴尬。显然，这种行为仅用客气一词是解释不通的，直到 3 天后，疑问才得以揭晓。

交流过程中，日本方面提出一个临时要求——参观有着济南第一碑刻之称的房彦谦碑。

房彦谦碑虽在书法界久负盛名，但作为旅游景点却非常冷僻，即使许多中国导游也说不清原碑位置。找了十几家旅游公司，问了七八位大巴车司机，最后还是在当地一位小蹦蹦车司机的带领下，才来到这座位于济南市东郊的古墓。古墓墓碑虽然已被保护起来，但与周围的繁华相比，那所低矮的小屋简直有些格格不入。

就在此时，令人惊讶的事情发生了。当日本女书法家确定这就是房彦谦碑后，几天来一直彬彬有礼、举止优雅的青年女子们，竟然一下子不能自已，不约而同跪了下来，甚至匍匐在这座已经有些破

旧的墓碑前，有的人已经泪流满面、泣不成声。这让主办方有些不知所措，赶忙上前搀扶，并胡乱猜测个中原因。

后来他们才明白：原来，这座由著名书法家欧阳询亲自书写的房彦谦碑在日本的影响远大于中国，是日本学童练习书法的重要法帖之一，在日本书法家心中的地位更是至高无上。这么说吧，大家熟知的日本知名媒体《朝日新闻》和《读卖新闻》的报头便是取自欧阳询撰写的两块碑帖《房彦谦碑帖》和《宗圣观记》的集字。不夸张地说，这些日本年轻女性是从小欣赏着欧阳询的字长大的，《房彦谦碑帖》她们更是不知临摹了多少遍、揣摩了多少年。为了写好这幅帖，究竟付出了多少汗水，耗费了多少笔墨，也只有自己才清楚。只可惜，这么重要的法帖，这么多年来她们看到的只是拓片，甚至仅仅是影印本。拜谒原碑一直是她们心中的梦想。所以，当这座在她们心中如神圣之物的碑刻展现在面前时，表现得如此激动也就不足为奇了。怪不得刚见面时感觉她们太多礼了，原来在日本女书法家的心中，中国不但是书法艺术的鼻祖，更孕育了她们心中最伟大的书法巨匠，所以她们才会用及其谦虚的目光看待接待方人员。

后来，日本女书法家情绪逐渐安稳下来，她们有的用手绢轻轻去擦拭碑刻，有的跪在地上用手去摸碑下的泥土，仿佛陶醉在千百年前书法家奋笔疾书的情景中……

此时，任何语言都不需要了，在这方古老的碑刻前，大家没有了任何交流的障碍，语言本身也许已经是多余的了。我们一起在那个简陋甚至有些荒凉的墓碑前，度过了一个十分温馨和令人感动的上午，即使现在回想起来，心中依然无比温暖。

十天的交流就要结束了。她们临走的前一天，恰逢东日本大地震灾难一周年。在机场送行时，出现了更感人的一幕：登机前，日本女书法家自动站成两排，向我们鞠躬致谢后，突然展开了一幅八尺整张的巨幅书法作品，上面是苍劲有力的 8 个大字：“一衣带水，困米之恩”。题跋处是一行小字：“感谢中国对日本民众的帮助。”

大家被这一情景深深感染，激动不已。困米之恩的故事出自《三国演义》，说的是某年因田地歉收，江东周瑜家中缺粮，便到鲁肃家中去借。鲁肃家虽然富裕，粮仓存有两困米（一困为三千斛），但上上下下人口众多，所以粮食也并不算充裕，但鲁肃依然毫不犹豫地送给周瑜一困米，让周瑜至死铭记在心。我们明白，这是日本女书法家借用困米之交的故事来感谢中国在日本大地震灾难之后对日本的无私援助。

随后，她们开始在机场向所有的人赠送小礼物。这份小惊喜让在场的中国旅客大为感动。在忙碌的候机厅里，竟然上演了一幕极为温馨的情感剧，而主人公就是中日两国最普通的民众。

忘年的文化之谊

吉林 孙浩宇

我有一个大唐梦，也有一段日本情。因为工作和学术兴趣的巧合，我与日本学者、著名的汉学家冈村繁先生有过一段忘年的文化之谊。

１３年前，我大学毕业到现在的单位，开始着手唐诗和《昭明文选》的研究。令人惊讶的是，这所普通的省属高校居然有着不错的《文选》研究传统。走进小小的研究室，同事介绍说，这个研究室在国内外都有影响，乍听还未觉其然，四顾时才发觉这小屋足够 hold 住人。书柜里摆放着国内外的古籍珍本，其中就有日本学者斯波六郎的名作《文选索引》。对面墙上的一幅字更扎眼，一米见方，字体规矩又不乏飘洒，圆润中透着一种遒劲，一看就知绝非出自凡手，这字便是冈村先生的墨宝——他访问时在本研究室留下的，而当时我还不知道他就是斯波六郎的学生，是著名的“京都学派“开创者铃木虎雄的再传弟子。

“一衣带水扶桑意，千载文脉九州情。”那“文脉”自是指冈村先生所钟情的中国文化和文学，“九州”则一语双关，冈村是日本九州大学教授。这联句颇有中国传统文人的气质，体现了冈村先生对中华文化的倾慕和深情。

在这样的小屋里工作，我感到继承传统的责任和光荣，也在文章中开始与冈村先生“神交”，他的观点和方法给我很多启发。而让我不敢想的是，不久之后我居然见到了他，但这次相见却也留有许多遗憾。

２０００年暑期，一个重要的学术会议（第四届“文选学”国际学术研讨会）在我的单位召开，我负责联络接待。我给包括冈村先生在内的许多学者都发了邀请，冈村先生很快回了函，清一色隽秀的小楷：“故地重游，至盼。”冈村与我们单位有着经年的学术之谊，曾数度光临。拿到他精致的手笺，我很兴奋，对开会的日子很期待。

终于，冈村先生如约而至，就在他留字的小屋，我们想见了。他素洁的衬衣，整齐的头发，神采奕奕，有点不像年近八旬的老人。握着先生的手，我恍如梦中，仰慕已久的异国学者忽然就在眼前，那激动来得有点汹涌。我感动于冈村的学问、名声，也感动于彼此共通的对中国文学的热爱。可是，当我想到要在接下来的数天中好好与他讨教时，我却惊奇地发现，冈村居然不怎么会汉语，这反倒让我对自己不懂日语懊恼了很久。

余下的时间，我能做的也只是好好照应他的生活了，这不能不说是这次相逢的最大遗憾。送走冈村先生，当自己平静下来，忽然觉得日本学者对研究中国文化的精神很让人惊叹，一个不会讲汉语的人居然能成为著名的中国古典文学家，真是不可思议。后来我才知道，日本自古就有很多人能写汉字却不会说汉语，于是稍稍释惑。

不管怎样，有了这次相见，我和冈村先生开始有了交往。当年元旦，我们互通信件时，冈村先生还清楚地提到会议时的一个细节，并致谢意，其实那都是我们的分内之事。在以后的文字交往中，我发现冈村先生学问的扎实和为人的谦虚，即使对我这样的年轻人，先生也从不好为人师，总是探讨的口气，这与他在文章中敢于独出新见迥然不同。看来，同样研究中国文学，两国的学风还是有点区别。

最让我感动的事发生在２００８年。那年，我编了一本关于《文选》的小书，因为冈村先生是这方面的专家，又擅长书法，我忽然想到要请他给书名题签。寄去样稿，先生又是很快回信，横竖各题两笺。对我一通褒扬之后还附上一句：“小子自来写字不好，诚惶诚恐。”这让我仿佛又看到了 8 年前连声说“谢谢”的老人，似乎给人提供帮助的是我，而不是他。那题签为小书增色不少，而一份感谢也只能恩存于心了。

坐在先生的字幅前，不免感慨。世事沧桑，纷纷扰扰，但共通的的文化圈子却值得珍视。无论公事还是私交，这位日本老人都是值得感佩的，他对中国文化的感情，他的治学精神，都是我们年轻人的榜样和砥砺。

关于福岛核事故的“微博”讨论

四川 王晓

@王晓：2011 年 3 月 11 日 14 时左右，日本发生了 9.0 级特大地震，造成了福岛第一核电厂爆炸，并引发大量核燃料泄漏，给日本乃至邻国人民造成巨大的恐慌，引起全世界对核电安全问题的关注。如今，福岛核事故已经过去 1 年有余，大家是如何看待核电的？

中日政府组：

@胡锦涛主席：中国将进一步采取核安全措施，确保本国核材料和核设施安全，提高整体核安全水平，共同致力于提升本地区核安全水平。

@野田佳彦首相：为了保卫国民的生活，应该重启位于福井县的关西电力大饭核电站 3 号和 4 号机组。

@全国政协委员陆启洲：我国能源需求量呈不断上升的趋势。核电作为稳定、高效且可大规模利用的清洁能源，是我国降低对外能源依赖的重要战略，同时也是保障国家能源安全，实现经济社会可持续发展的必然选择。

@日本共同社：福岛核事故“并非自然灾害，明显是人祸”。根本原因是由于日本监管当局和东京电力公司之间的关系“发生逆转”，导致“监视、监督机制崩溃”，因此“失去了预防核泄漏事故的最好时机”。

@环境保护部（国家核安全局）：由于与日本福岛核电厂所处厂址条件不同，中国核设施发生类似福岛核事故的可能性极低。国家已制订了短、中、长期计划，要求和督促各民用核设施按期完成相应改进工作来应对一切可能发生的事故。

@国务院研究室综合司副司长范必：核电发展中应当把安全放在第一位，安全问题绝不能有任何松懈。去年 3 月，日本福岛核事故后，国务院针对中国核电发展提出要求，在《核安全规划》批准之前，暂停审批核电项目，包括已经开展前期工作的项目。

中日专家组：

@中国工程院院士杜祥琬：人类既然认识到核能的巨大潜力和价值，就不可能把它锁在抽屉里，关在笼子里，必然会努力去开发它、掌握它，使之成为人类的驯服工具，不驾驭核能才是真正的危险。

@日本经济产业省原子能安全保安院：福岛第一核电站事故泄漏的放射性物质总量为切尔诺贝利核电站事故的 10%左右，且核泄漏已受到控制，辐射程度非常轻微，不会对核电站附近人群造成短期危害，更不会影响到周边国家。

@中国科学院理论物理所研究员、中国科学院院士何祚庥：福岛事故给我们的教训是：必须大幅度提高核电站的设计和运转的安全标准，也就是需要把那种“千年一遇”的偶然事故也考虑在内，否则就不能“确保”福岛事故不再发生。而且这种“确保”，必须“绝对”确保，而不是“相对”确保。

@中国核动力研究设计院名誉院长杨岐：发展核电必须坚持安全第一的原则。必须要强化风险意识、忧患意识、责任意识，在设计、制造、建设、运行、退役、安全监管和应急各个环节都要明确责任，共同构筑安全防线。

@中国核动力研究设计院副院长兼总工程师陈炳德：加快《原子能法》出台的步伐，健全与完善相应的核法律法规体系，使之与核电建设蓬勃发展和安全监管的形势与要求相适应。

中日学生组：

@中国小学生“小小科学家”：希望日本小朋友依旧能开心地坐在课堂里，像我一样学习科学知识。等我们长大了，我要和日本小朋友一起把核电这只大老虎变成 hello kitty!

@日本福岛县小学生：放射线“很可怕”，有可能会让我死掉，但是我还是选择像四川汶川的小朋友一样勇敢。

@中国中学生“生命诚可贵”：不要再让悲剧重演，继续发展核能的前提是保障人类的生命安全。如果有一天，核能的发展如果真的要以毁灭人类为代价，那么就不得不寻求更安全的能源了？

@日本中学生“理性对待核事故”：面对流言蜚语和无数恐慌的眼神，我们必须学会坚强、学会自救。我坚信政府会给我们一个满意的答案。

@中国大学生“防患于未然”：为何总是出了事故后才认识到失误？国家应当高度重视公共问题，不要再出现“豆腐渣”工程，责任意识很重要，防患于未然更重要，老子有云：“祸兮，福之所倚；福兮，锅之所伏。”如果能从事故中总结经验教训，保证未来的长治久安，那就算是“塞翁失马焉知非福”了。

@日本大学生“To Be or Not to Be”：中国的鲁迅先生说过：“不在沉默中爆发，就在沉默中灭亡。”我们现在面临的是生存与死亡问题，还是生存与发展问题？值得深思。

@王晓：古语有云：“前车之覆，后车之鉴”。福岛核事故带给人类的教训是惨痛的，留给我们的反思却可以让我们新生。屈原说过：“路漫漫其修远兮，吾将上下而求索。”关于核能是否该继续发展的问题，也许只有时间是最好的试金石。不过，勇敢地直面这个问题也是必须的。世界各国已经相继提出“可持续发展”的战略，我们应该清醒地认识到，只有走合乎可持续发展的道路，在客观全面地认识自然及其规律，在认真审视人类社会发展史后，才能寻求到一条更好地满足自身及后代的生存与发展的生命之路。生命需要延续，生生不息，切不可为了一时的贪婪而葬送了整个人类！

核能就像一只酒杯

天津 石洁

日本福岛的核泄漏事故，已经过去很长一段时间了，但很多人如今回想起来，依然会心有余悸、谈核色变。其实，“核”就像是一只空着的酒杯，你若是装入了美酒，它就是一杯佳酿，让人享受美味；若是注入了毒液，它就会是残害人性命的毒酒，让人充满恐惧。

从 2011 年 3 月发生福岛核事故至今，日本百姓的生活似已回归正常；但核泄漏的影响还继续存在，它的危害仍在显现，并将继续显现。最近，日本政府制定出了对事故受害者的赔偿标准，很细致地将受灾区域分为“居住限制区”、“疏散指示解除区”、“难以返还区”3 个等级，可见日本政府对于事故赔偿工作的认真和细致。以一个常见的 4 口之家为例，赔偿金额一般在 500 万至 670 万日元（约合人民币 62 万元至 83 万元）不等。这虽然是一笔不小的数目，但对于饱受心灵创伤的受害者来说，失去亲人和家园的创痛毕竟难以修复。

真正巨大的影响，不单单体现在经济和资源方面，民众表现出的“不安”才是最可怕的。日本不久前的一项调查表明，80%的人认为应当“去核电”；对于核电站，88%的人表示“不安”；对于地震之前制定的“2030 年增设 14 座核电机组”的计划，只有 6%的人表示“应按原计划”执行。这一系列的调查数据让我们看到，“核”这次惹出的麻烦足够大。

于是，有人开始把核电站看成一杯“毒酒”，要远离它，要关闭它，要拒绝它。我觉得，我们对“核”的担心可能有些过于夸大了，我们应该看到“核”的两面性。它确实存在一定的危险，但是不应回避且不可否认的是，它确实可以创造出巨大价值。特别是在现阶段，能源方面的瓶颈，将会制约经济的发展。所以，我们应该辩证地去看待“核”问题，正视核问题。首先，我们要了解“核”的危险性和它可能造成的巨大危害，做到防微杜渐、居安思危。第二，要提高我们的科学技术水平，建设出更加安全高效的核电站，使核的应用更广泛也更安全。第三，要节约使用现有的其他资源和能源，认识到不可再生的资源是人类最为宝贵的财富。第四，寻找更加洁净和安全的能源，争取发现一种可以完全替代核能的能源。

而这一切，都需要高新技术的支持，仅凭一个国家的力量是难以实现的。在全球化的今天，我们可以通过国家间的合作来寻求更为安全可靠的核能技术。中国和日本是亚洲的两个非常重要的国家，两国的历史交往源远流长，文化渊源十分深厚，日本文化深受中国文化的影响，中国的现代化进程也受到日本的影响。在中日邦交正常化 40 年来，中日两国的政治、经济和文化关系都有了长足发展。作为一名普通的中国青年，我也可以感受到日本这个国家对我生活的影响。所以，可以期待的是，中日两国完全应该、也完全可能携手合作，面对和解决包括核能在内的各种挑战，进而较好地解决能源问题。

超越国家关系的友情

广东　戴丽雯

在我的书桌上，摆放着两张照片，一张是我和爸妈的全家福，另一张则是莱拉的单人照。照片上的莱拉一袭白色及踝长裙，素雅淡然，笑容灿烂。照片的右下角写着几个字：于地肤山。

莱拉全名“织田莱拉”，和我是在北京旅游时认识的。她是个土生土长的日本人，那年刚考上庆应大学，来中国散心。初见时，我很费力地想用自己蹩脚的日语和她聊上几句，随后又惊奇于她一口流利的普通话。她说她从十岁开始自学中文，简单交流不成问题。分手时我们互留了电话和邮箱地址，约定再联系。

坦率地说，旅游回来后我并没有对这件事太上心，而是集中精力准备应付最关键的初三课程。月考前一周，我意外地接到了她的电话。听到她柔柔的声音，我一时有点恍惚，许久才从脑海里搜索到两个月以前的记忆。

莱拉说，我是她来中国后认识的第一个人，因此格外珍惜我们间的情谊。对比之下我有点羞愧，为自己的漫不经心。自那以后，即使再忙，每个星期六我都会跟她通一次话。

和莱拉聊天是件非常轻松的事。她所说的那些丰富多彩的大学生活，总让我为之着迷，常使我忘记了时间。

我们之间很少有摩擦，主要是因为她总迁就我。初三那年是我迄今为止最黑暗的时期，时时刻刻要关注分数排名，神经每时每刻都像紧绷的弦，不知道下一秒会不会断掉。一次模拟考试我的成绩很不理想，免不了招致老师和家长的一些责备。压力之下，在和莱拉通话时，我不免有点失态，当她在电话那头说起某个话题时，我内心压抑许久的怨气终于暴发，没等对方继续说下去，我“啪”地摔下听筒，声音之大甚至吓到了在一旁看报纸的爸爸。

那次之后，莱拉没有主动打电话给我。冲动过后冷静下来，我开始后悔了——明明是自己的过失，却迁怒到别人身上。我想道歉，但一时又拉不下脸面。一直到中考前，莱拉给我发了一封邮件，字里行间流露出对我的歉意。她说，她当时并不理解那段时间对于我的重要性，不知道我要备考的沉重压力。后来她一直不敢打电话来，也是怕影响到我。可是，她又怕这份友谊会因此越来越淡化，在忍了很久后，终于写了一封邮件向我解释。末了，她还加了一句：不要紧张，考完之后来日本玩吧，地肤山很漂亮。

看完这封邮件，如果我说我不感动，那肯定是假的。我把邮件打印出来，放在抽屉里。我们的每周通话又恢复了。

今年夏天，日本政府提出购买钓鱼岛，并启动钓鱼岛“国有化”的程序。这让我深受刺激。老实说，我是个爱国的人，祖国的主权和领土完整是我所关心的。我开始有意冷淡莱拉，虽然依旧每周通话，我的态度转变却是显而易见的，她应该也能感受得到。我们之间的联系时间越来越短，直至变成了每周一次的冷冰冰客套对话：“最近好吗？”“还不错。”“没事我先挂了。”

我对这种结果也感到伤心。虽然我们认识只有短短一年，两人之间隔了一片海，年龄爱好也不尽相同；可是，我们都把彼此当做了亲密朋友，建立了深厚的友谊。如今，我们之间更像是隔了一层穿不透的雾。

升上高中的第一个周末，回到家以后，妈妈交给我一个包裹。包裹寄自东京，里面是一只我最喜欢的泰迪熊，它的头上贴了个汉字纸条：对不起。

我当然知道包裹是莱拉寄来的，但我对“对不起”这三个汉字一时又不解。其实，从头到尾都是我自己跨不过那道坎，莱拉并没有错，她为何要道歉？带着疑问，我拨通了她的电话。她在电话里说，对于政府的擅自决定，身为日本国民的我感到很抱歉。我不是偏袒中国，也不想指责我的国家，我只是觉得，未经商议就实施的行为确实不对。

这番话，听起来好像只是客套，但却让我感受到了莱拉的真诚。我捂着话筒，不知该说什么好。许久，才听到对方问，我们还能做朋友吗？

深吸一口气，我回答：我们一直是朋友！一边说着，我一边把那张“对不起”的纸条折起来，放到桌上莱拉单人照镜框的背面。

平凡的友谊
——在爱沙尼亚工作营中的记忆

湖北　薛娇娇

打开邮箱，一封来自日本的邮件映入眼帘，记忆被带回在爱沙尼亚的日子。

今年九月初，钓鱼岛风波正热，国内到处都是反日游行，我却和西村织纱里、岩田香文两个日本女孩一起，在爱沙尼亚的大森林中做搬运树枝的义工工作。

我和西村织纱里的缘分，始于一包糖果。集合当天，塔林的天阴沉沉的，我在汽车站东张西望，手忙脚乱地找到集合点。愣神时，一袋糖果递到了我面前用英语说：“你要不要糖果？”我伸手拿了一块儿，打量着眼前姑娘。大眼睛单眼皮，喜欢笑，毫不顾忌牙齿上还带着矫正器。她是关西外国语大学的学生，会一些中文，拿出名片指着她的名字用中文读：西村织纱里。

巴士加轮渡共需要四个小时，半路上就明显感到温度下降了，雨点噼里啪啦地打在玻璃上。迷迷

糊糊中，我看到身边的织纱里抱着臂有些发抖。当地乘客都穿着毛衣，而织纱里却只穿着袜子、短裤和单薄的T恤。我把厚外套脱下来递给她："给你吧，我穿的很多。""谢谢，谢谢。"她接过来披到了身上。

与活泼开朗的织纱里不同，岩田香文内向羞涩，英文名Kaye。一天傍晚，我洗完澡回到房间，Kaye正蜷着腿坐在靠窗的椅子上写日记。窗外是蔚蓝的天空和洁白的云朵，光沿着她的面部轮廓晕染开来，柔和美好。当她发现我拿出相机时，却嘟起嘴巴扮成小猪的样子，没一刻安静，最终我也没拍到一张"淑女照"。

Kaye的日记是用日语写的，我只能看懂里面众多的繁体汉字。她一边写，我一边站在旁边挑出自己认识的词语，跟她聊天儿。此后每到她写日记我便凑过去，这也成了我俩之间充满乐趣的小游戏。遇到繁体字，我就会跟她讲，这个字在中国怎么读，好学的Kaye都会用拼音记下来。当我们聊到富士山下的美丽樱花，我告诉她，在中国武汉的武汉大学也有很多樱花，也许，在日本或者在中国，以后我们能够在樱花烂漫时再见。

Kaye只有十八岁，像个小妹妹，但也会照顾人。一次我骑完马继续去森林里做工，却忘记带手套。当天要搬运树枝，不带手套很容易划伤。Kaye见我没戴手套，不顾我的拒绝，直接把自己右手的手套给了我，说："这样我们就都有手套了。"

除了森林里，厨房也是个很有乐趣的地方。记得我和织纱里结伴做午餐时，极少下厨的我俩望着一盆鱼"大眼瞪小眼"。我硬着头皮把鱼清理干净，撒上盐腌好递给她，她把锅烧热，倒上油，接过鱼放进锅里。当鱼炸到金黄时，香味弥漫开来。午饭时，她拿出她炸的第一条鱼，悄悄跟我说："这是我第一次下厨，这条是咱们的。"

"中国之夜"，我在这个没有酱油、没有葱的小岛上，为醋熘土豆丝、胡萝卜鸡蛋炒饭等五个中国菜忙碌着，Kaye和织纱里都主动过来帮忙。开饭时，她们用"炒饭、炒饭"的欢呼声为我捧场。

分别前夜的聚会上，我把"中国结"送给工作营里的朋友们。日本男孩子勇作将中国结系在耳朵上跳舞，织纱里拉着我蹦蹦跳跳扭来扭去，而Kaye继续走"羞涩路线"，窝在沙发里笑嘻嘻地看着大家。深夜我回到房间收拾东西时，她们已经睡下了。偶然间摸到枕边有张小纸条，是织纱里留给我的："姣姣，我给你留了一个背包。非常谢谢你，中国菜非常美味。希望再见到你！"

惊喜、感动、快乐，一下子涌上心头。我很庆幸我们在工作营中相遇，在两周的生活中，我们消除了误会，加深了了解。尽管来自不同的国家和文化环境，我们仍有很多共同点，我们一起"八卦"国际影星，一起为农场里帅气的工人"花痴"一下，一起为中国菜欢呼……如果说起中国和日本这两个国家，我可能难免有刻板印象；但当我接触到日本人时却发现，我们相处和交流起来并不那么困难。此时我想起一位朋友的母亲跟我说的话："当你走过很多国家后就会发现，世界上的人都是一样的，都有亲人和友情，共享悲伤和欢乐。"

我也在她们的枕边留下一个纸条，上面用中文写着：再约樱花烂漫时。

野兽及其锁链

广西 郑天华

曾经有个猎人捡到了一只小老虎，就把它当宠物养大了。老虎很乖，确实陪主人度过了一段很快乐的日子。但是有一天，主人让老虎舔干净手上的血迹，老虎的野性被唤醒了，把主人当成了食物。

人们驯养家畜起码已经有上千年历史吧，虽然不少见被圈养的老虎，却始终没能普及。成本固然是重要原因之一，但更重要的原因可能出于另外一个顾虑——养虎贻患。千百年来，或是小心善待、潜移默化，或是皮鞭锁链、逼其就范；或是软硬兼施、恩威并举，似乎不管用哪种做法，都能让老虎放下身段，甘心充当走狗，甚至温顺得像一只大猫。可难就难在，老虎这种"大猫"的破坏力实在过于强大，别说反噬，就是哪天心情不错抱着主人摇上一摇，那三魂七魄恐怕也要飞掉一半；要是发起狂来，自然就像虎入羊群一样——老虎依旧是老虎，可我们这些养虎的人或是他们的邻居，就成了羔羊。

但毕竟还是有人拿老虎当宠物了。相比之下，皮鞭锁链伺候自然比放养要安全得多。倘若这锁链

是精铁所制，又有专人看管，除非锁链损毁老虎才有机会发飙。在这种情况下，老虎再厉害也厉害不到哪里去。可怕就怕这锁链不够结实，而看守又百密一疏。

我要说的是核能。事实上，核能的为例远甚于猛虎，而我们人类偏偏雄心勃勃地想把它驯服。但是，我们真的备下了足够结实的皮鞭锁链，又能时时刻刻都打起十二分精神看管它么？

有一个故事。一天晚上，爱迪生做了一个梦，在梦里，他家的木头门把手换成了铜的。当他醒来后，发现门把手真的变成了铜的，他不禁惊诧于自己的梦想成真。他的家人却告诉他，其实几天前就已经换过了。作为发明家，爱迪生自然有着过人的洞察力，但是面对自家大门上的门把手，终于还是验证了“熟视无睹”这个词。福岛核电站的设计者、建造者、管理者和维护者们，都曾常年累月地对着同样的东西，我并不怀疑他们的责任心，也相信他们的专业知识和洞察力，但看得多了，是否也会有“熟视无睹”的隐患呢？

在日本这个地震多发的国家，有人建了一个最高抗震等级7.9级的核电站。如果说人们只能把核电站建成这种水平，或者地球上没有出现过7.9级以上的地震，再或者7.9级以上的地震就导致世界末日的到来，那么，一切就不是什么问题了。但很可惜，9级地震发生了，先是地震给人们带来了灾难，然后核电站的泄漏让这场灾难变得更加严重。

我只是想说，不管老虎身上的锁链有多么沉重、多么结实，却依旧有松动的可能。

无从追究到底谁该为这个潘多拉魔盒负责，是爱因斯坦？是奥本海默？还是支撑他们的那些巨人？但是无论如何，67年前，蘑菇云升起来了。

广岛和长崎的惨剧让人们铭记，是因为伤痛，但是人们却渐渐遗忘了“大伊万”曾经燃起过的那笼罩世界的恐惧。人们总是给自己找一些借口：当我们想要利用核能时，我们会说，接下来的第三代技术会更安全，接下来的核电站会更坚固；当我们想放弃核能的时候，我们又会反复强调头上的达摩克利斯之剑。

有人可能会说，核能开发并不等同于核武，但遗憾的是，它们彼此相通；而相比之下，尽管我们设下了法律的锁链、道德的锁链、技术的锁链，但是在核能的巨大威力面前，所有的锁链都显得如此脆弱。正如电影里的老套情节一样，我们永远不能确保每个有能力利用核能的人都安分守己，每个心灵扭曲的人都远离发射按钮，或者都是这项技术的门外汉。当一个人情绪极度失控的时候，当社会出现严重动荡的时候，当核电站面对巨大的自然灾害的时候，或者当一个国家面临生死存亡关头的时候，我们无法保证所有的锁链都依然完好。

也许，在裂变时代这一切听起来依旧有些杞人忧天，但是核能发展的下一步是“可控核聚变”，而作为核聚变主要燃料的重水在地球的全部水资源中的含量高达1/3200。在网上搜索一不难发现，现在每克重水的售价不过几十元人民币，或者说几百日元。当这项技术成熟起来之后，我们一定已经设计出了更牢固的锁链，来对付这头更凶猛的野兽或家畜，甚至会把那些电厂建在地球之外；但是，我们有什么办法来阻止人们获取它的原料呢？试想有一天，当一个人就可以决定所有地球人的命运，而这样的人又有几十、几百、几千、几万、十几亿甚至几十亿的时候，我们怎样才能栓紧我们的锁链？

你当然可以说我杞人忧天，我也可以说你讳疾忌医。

题目就在我们面前。其实大家都知道，我们还有很多种能源可以选择，只是功效没有那么明显罢了；我们还可以选择节能，只是日子不能再那么大手大脚罢了。

亲历之后说核电

辽宁 钟守玉

人的一生中，有些日子是注定要被铭记和怀念的。每每在某个瞬间看到一些画面和场景，脑海中都会勾起对那些已逝日子的追忆，会让你陷入深深的发呆中。

此时的我正翻开抽屉整理物品，在抽屉的底部看到了一张机票的票根。轻轻地拿在手里，我清楚地看到了机票上面的日期等信息：2011年03月11日，大连出发至仙台。我仿佛又回到了那个非同寻常的日子。

机票是早就订好了的，自从和她商量好出发日期开始，我就一直期盼着这一天。终于熬到了这一

天，早早收拾完毕，出门拦了辆出租车往机场驶去。由于堵车，离起飞只有二十多分钟的时候我才到达机场。我是最后一个登机的乘客，入座的那一刻，心里才一块石头落了地，深深的吐了口气，开始憧憬着和她见面的情形。

12时30分飞机准时落地，走出大厅我一眼就看到了等在那里的她。一年多没见到她了，此时的她面容略显消瘦。彼此深深凝望之后，她羞涩地拉起我的手说“我们走吧”，我之前所设想的场景都没出现。

跟她上了电车。车开出去没多久，就开始了剧烈的摇晃。我对她说:“日本的车怎么跟海盗船似的，还晃来晃去？”她说，“不对，不是这样的。”她开始四面张望，一副局促不安的表情。车上的人开始大叫，她也慌张地对我说：地震了！是地震了！站立不稳的我赶紧拉紧她，心里想，我不会这么“幸运”吧？刚来就遇到地震。可我偏偏就是这么“幸运”，百年不遇的东日本大地震被我遇上了。

真正幸运的是，我俩都安然无恙。“不幸中的大幸”，好像是为我量身定制。

后来，我在中国大使馆的帮助下安全回国，她仍旧留在了福岛。我回来以后，一直密切关注着福岛的动态，关注她周遭的生存环境。我在想，要是没有核电站，福岛就不会是现在这个样子了。福岛的双叶镇距离第一核电站约19.3公里，在核泄漏事故发生之后，镇上的居民都已迁走避难。

现在，这里依然保持着灾难发生时的场景：儿童游乐场里空无一人，孤独的狗走过空旷的街道，鞋子等私人物品被丢弃……双叶镇变得与距离切尔诺贝利核电站最近的“鬼城”普里皮亚季镇十分相似。时间仿佛已经静止，只剩下孤独哀伤的气息仍在慢慢流淌。

人们有些谈核色变了。

既然核事故会带来这么大的破坏力，为什么不能舍弃不用呢？很多人都有这样的疑惑。我查找了一下有关核事故的资料，自从人类开始使用核电以来，迄今为止，出现过三次比较大的核泄露事故，一次是美国的三里岛核事故，一次是前苏联时期的切尔诺贝利核电站泄露事故，再有就是这次的日本福岛的核事故。在人类使用核能的50年历史中，发生的堆芯熔化严重事故只有这三次，总的看来出现事故的概率还是很低的。

另外还有重要的两点，一是核电是高效能源，消耗资源少。例如，一座百万千瓦级的煤电厂，每年要消耗约300万吨原煤；而一座同样功率的核电站，每年仅需补充约30吨核燃料，仅为前者的十万分之一。还有一点是，核电站是清洁能源，对环境的污染小。目前的环境污染问题大部分是因使用化石燃料引起的，化石燃料的燃烧排放大量的二氧化碳、二氧化硫、氮氧化物和飘尘，造成全球气温升高，酸雨频降并破坏臭氧层，对环境造成极大威胁和损害。而核电站不会造成这种环境污染，因为它不使用化石燃料。

日本地震海啸引发核电站事故后，多国政府表示，虽然日本核电站事故教训值得吸取，但此次事故不会影响本国发展核电的计划。意大利、西班牙等国表示不会减少对核能的依赖，强调不能“因噎废食”。

是的，我们不能因为曾经发生过飞机坠机事故，就因此不坐飞机了吧。世界正面临着能源的结构性短缺与能源市场供应的不确定性，即传统矿物能源的市场供求失衡，高效、洁净、廉价的能源供应短缺。在经济飞速发展的当今世界，人类对核电的依存度越来越高。

核电就像潘多拉的盒子，一旦打开了，就难以关闭。而我们要做的就是，更好的去掌控和驾驭它，让它为明天的世界提供更多的阳光雨露。

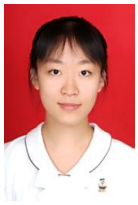
「笹川杯作文コンクール 2012」～日本語で応募～ 入賞作品

※日本語の原文を尊重し、一切手を加えておりません。

（1）優　勝

中日交流における感動的なエピソード

ハルピン工業大学　季佳琳



「もうすぐ帰国します。でも、皆さんと別れて、ちょっと寂しいと思います。ここで、皆さんと一緒に体験したことは私の宝物として、きっと一生忘れられない。これからもいつものように頑張ります。この間、お世話になって、本当にありがとうございました。」

私は送別パーティーで、そう言いながら、涙も溢れるほど感動していました。４ヶ月間の記憶は映画のように、私の目の前で流れていました。

去年の１０月、私は交換留学生として、佐賀大学へ留学しました。この一年間、違う分野の授業を受けたり、たくさんの交流活動に参加したり、良い友だちを作ったりして、とても有意義な一年間だったと思います。大学に入って、初めて日本語を勉強した時も機会があれば、日本へ行きたいなあといつも思っていました。せっかくのチャンスですから、日本にいる一年間は見たいことは見て、食べたいものは食べて、知りたいことは聞いて、日本という国についてのことはできるだけ詳しく知りたいと思いました。

日本での半年後、前輩から紹介してもらった LDA で中国語の講師を担当し始めました。LDA というのは佐賀県国際交流サポート協会という組織で、日本人と外国人との交流の支援センターとして、何年間も続いています。中国語だけでなく、英語、フランス語、ドイツ語、韓国語もやっています。中国語を勉強する日本人は少ないけど、みんな確かに中国語、さらに中国文化に深い興味を持っています。その中には、県庁の公務員もいるし、会社のサラリーマンもいます。一日の仕事が終わった後、みんな集まって、仕事の苦労やストレスなどは捨てて、中国語を勉強したり、中国の昔の伝説を聞いたりすることは一番楽しみなことだとみんなはそう言っています。そして、私も彼らから日本語を勉強できて、日本文化についてのことを聞けますから、だんだん異文化交流に関心を持ってきました。

定期的に、交流イベントもありました。４月の神野公園花見、６月の嬉野温泉旅行、８月のサマーパーティーなど、各国の人たちは自分が上手な手作り料理を持ってきたり、お互いに話し合ったりして、イベントは友達になるいいチャンスです。LDA のスタッフはボランティアで、みんなは外国人との交流活動に熱心だからこそ、自分も交流活動に力を入れました。彼らの異文化交流に対する純真な熱意は私を感動させました。中日文化の交流に何か貢献できることはあるのではないかと、私はずっと考えています。社交文化、お酒文化、お茶文化、服飾文化、音楽文化、礼儀文化など、たくさんの方面があります。文化を理解するために、身を持って体験したほうがいいのではないでしょうか。文化は人と人のコミュニケーションの絆だと言っても過言ではないと思います。特に、中国と日本は文化において、お互いに深く根を下ろしています。例えば、文字や祝日などは非常に似ています。中日は昔から文化交流があって、今も両国の国民はお互いに文化や習慣を尊重したり、理解したりして、さらに世界に広く伝えています。LDA のみんなの笑顔を見て、私は中日交流の役割がやっと分かりました。みんなは本音を言って、心は近くなって、中日両国の友情をこれからも長く続けます。心を込めて、みんなの力を合わせて、一緒に頑張ることは一番大切です。

「中国に帰っても、LDA を忘れないでね。メールで連絡してね。季さんがいたおかげで、私たちは中国についてのことをもっと知りました。ありがとう。」

LDA の中野さんの言葉は私にとって、最高のご褒美だと思います。

中日交流における感動的なエピソード―通訳として幸運なデビュー

天津外国語大学　李钰婧

去る夏休み、私は故郷の正定に帰りました。

正定は、歴史が長く古い町ですが、三国時代の趙雲廟、隋の時代の隆興寺のような名所旧跡でもあり、中国国家卓球訓練センター、国際的な日用雑貨卸売市場など代表的な現代化された建物もあります。私が日本の方たちに会ったのは、その国家卓球訓練センターでのことでした。

考えてみれば、少し決まりが悪く、五年間も日本語を習ってきたのに、私は通訳者として日本人と交流した経験が一度もありませんでした。また、いつも「自分は実力が弱すぎる。」と心配ばかりしていたため、日本人に会ったら、なんだか緊張して心細くなってしまいました。しかし、私は通訳という仕事に非常に憧れています。自分の夢に背きたくなく、私は試練を乗り越える覚悟を決めました。従って、面識のない人との付き合いが苦手な私は夏休みに、手伝いだけでもいい、経験をするだけでもいいと、外国人の選手達が集まる国家卓球訓練センターに通いました。

今年で丁度、中日友好四十周年という節目を迎えます。記念行事の一つとして、「中日友好都市中学生卓球交歓試合」が８月１７日から２０日まで北京で開催されました。各参加チームは、友好都市同士、男女混合の４人で構成されています。正定を統轄する石家庄市は長野市と姉妹都市で、８月１５日に長野市の選手一行６人を迎えました。

日中友好協会のメンバーで責任者の峰村さんは、一見厳しそうな顔でした。私が僅かな自信を持ち、また例の心配で不安に駆られました。

「こんにちは。」

と私が挨拶すると、峰村さんは優しい笑顔で、それも何と中国語で

「你好（こんにちは）。」

と返事をしてくれました。思ってもいなかったので私は驚きましたが、峰村さんが親しく感じて、とても嬉しく、気持ちも少し落ち着きました。

「峰村さん、中国語ができるんですか？」と私は聞きました。

「少しだけですよ。」と、眼鏡の奥から温かい眼差しで答えてくれました。

「少しだけ」とは言え、私は非常に安心しました。簡単な会話で心の距離を縮められることは、とても不思議でした。

日本側の選手二人は、中国側の選手二人と新しいチームを組み、四人で卓球交歓試合に出場しました。簡単な挨拶を交わした後、四人はさっそく練習試合を始めました。

穴山慧くん、負けず嫌いな１４歳の男の子です。最初は自信満々で試合に臨んでいましたが、結局、中国側の同年の耿くんにすっかり負けてしまいました。悔しくてたまらなかった穴山くんは、休憩時間に一人で体育館の隅へ行き、頭を壁にそっと叩き突けており、悲しそうな姿でした。その様子に気がついた中国側のコーチの陳さんは、穴山くんを慰めながら技の欠点を指摘していました。その会話を通訳した時、私は言葉遣いに気を付けながら、陳さんの気持ちを伝えました。ようやく明るい表情を見せた穴山くんは、微笑んで

「ありがとう。」

と答えてくれました。この瞬間、私は通訳者としての誇りをしみじみと実感しました。

午前中の試合を通じて、双方の選手たちは徐々に相手のコンビに慣れていきました。昼休みの後、四人は興味津々に鉛筆や紙を使ってコミュニケーションを取り始めました。意味が伝わらない所は私が通訳しました。友好的な雰囲気に包まれ、私も非常に嬉しかったです。

実のところ、日本側にも通訳の方が付き添っていました。その通訳の方は雑談をしていた際に私が今回初めて実際の現場で通訳をしたと分かると、

「そうですか、デビューおめでとう。」と言ってくれ、「じゃあ、これからは李さんが主役を務めましょう。私が補助しますから。」

その言葉を聞き、なんて優しい方なんだろうと感激しました。ベテランの彼女が私の気持ちを思いやってくれ、通訳を鍛える良いチャンスを与えてくれました。そのことに私はとても感動しました。

午後は観光でした。観光した場所は正定の人たちが誇りとする、八大寺の一つで最も悠久な歴史を持つ隆興寺でした。ガイドの案内に従って、私たちは神聖且つ閑寂な古刹を訪れました。途中私の通訳が行き詰まった時、峰村さんと日本側の通訳の方がいつも優しく助けてくれ、私の苦しい状態を打開してくれました。

穴山くんは、やっと負けた悔しさから立ち直り、本来の無邪気で明るい笑顔を見せていました。そこの庭には、樹齢五百年のアカシアの木が植えられ、その周りを三周すると幸せになるという言い伝えがあります。穴山くんが男の子らしく元気に駆け出し、楽しそうに木の周りを回り始めました。そこにいた全員が彼の可愛さを微笑ましく思い、和やかなムードが漂っていました。この時、中国側と日本側の絆がますます深まったなと私は感じました。

幸運なデビューでした。

楽しい観光が終わり、いよいよお別れの時間になりました。峰村さんが日中友好協会の記念バッジを私に贈ってくれ、握手をして別れを告げました。穴山くんも持っていた塩飴をくれました。私はとても感動し、自分で書いたカードを彼にあげました。

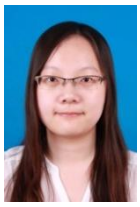
黄金の夕日を浴び、名残惜しい別れを思い出し私は少しだけ悲しくなりました。今回出合った方たちと、今後再び会うことはないかもしれません。しかし、この日深まった中日友好の絆は、きっと私の心に一生刻まれることでしょう。正にこの時、私は通訳者としての責任と誇りをしみじみと感じたのでした。それに、例の心配はもうなくなり、勇気も湧いてきました。

きっと明日はもっと晴れることでしょう。通訳をした経験も、中日両国の友好も。

（2）二等賞

中日交流における感動的なエピソード―吉住さん―

対外経済貿易大学　王子維



今年の夏休み、中国にある日系企業でインターンシップをやりました。ここで、部長の吉住さんを知りました。吉住部長と初めて会ったのは面接の日、座ったとたん、吉住さんは容赦なく私の履歴書の間違いを指摘しました。私はドキドキしながらも、さすが真面目な日本人だなあという印象を持ちました。

私はこんな吉住さんと一緒に仕事を始めました。部長ですので、毎日山ほど仕事があって、吉住さんはいつも非常に忙しそうです。ある日、私は初めて日本語に訳した資料を吉住さんに渡しました。すると午後、吉住さんは私の席に来て、私が訳した本文を机の上に広げ、鉛筆で不適切な表現を一つずつ直してくださいました。そして「配電」など、私がよく知らない専門用語を簡単な言葉で優しく説明してくださいました。「頑張ってくださいね」。吉住さんは最後にこう言いました。忙しいのに、いろいろ細かい指導をいただいた私は本当に感動しました。そして、その感動を力として勉強や仕事で頑張ろうと決心しました。

吉住さんはいつも部下に親切で、出張するたびにお土産を持って帰ります。退屈な打ち合わせも吉住さんのユーモアで面白くなります。みなさんに「おじいさん、おじいさん」と呼ばれていますが、吉住さんは自分に厳しい人です。毎朝６時、公園でジョギングをしてから、会社に行って仕事を始めます。毎日一番早く会社に来るのはいつも吉住さんです。吉住さんは環境保護に関心を持っていて、身のまわりの細かなことから実践しています。資料をできるだけ両面で印刷したり、新聞を包むビニール袋をゴミ袋として使ったりします。それはおおざっぱな性格の私が最も感服するところです。

吉住さんを通して、日本人特有の「真面目」「繊細」「礼儀正しい」などの長所が具体的に分かります。それほど偉い人ではなくても、偉いことをしなくても、ほんの細かなことで日本人の精神を私に伝えます。その精神は、人が真面目に生きていく真剣な態度や力だと私は思います。吉住さんのような、私とは異なったバックグラウンドをもった日本人に出会って新しい文化とぶつかり、私は人間的に成長したと思いました。これからも、この気持ちを忘れず、どんな環境で暮らしても、言葉や仕事の壁を越えて前向きに踏み出そうと思います。

留学生の存在は私の心を打つ

長安大学　叶微微

中日の交流において、感動した人物や出来事をあげるとすれば、最初に思い浮かぶのはやはり留学生のことである。それは具体的に誰かを指しているわけではない。留学生一般を指している。留学生は、日本あるいは中国に身を置き、より深くその国の人々、特に同じ若者同士と直接に触れ合って交流をするからである。

中日の国交正常化からすでに 40 年も経った。まだまだお互いに様々な誤解が残っているとはいえ、40 年前より経済や政治、特に文化などの面では、距離がかなり縮んだ。特に、留学生は、ここ数年、人数がどんどん増える一方である。統計によると、2011 年まで、中国人が日本に留学に行く人数は延べ 10 万人を超え、前年より 7000 人以上増えた。中国人の留学生は日本の外国人留学生の６割も占め、もはや日本での留学生の主流になっている。私のクラスは 21 人だけなのに、今４人も日本に留学している。中国では、日本に留学することは珍しい話ではなくなった。そして、中国での日本人の留学生は 2011 年に約 17961 人で、３番目に留学生の人数が多い国になっている。

昔と比べると、本当に留学しやすくなった。交通や通信などが発展したので、両国の距離はかなり近くなった。それに、近年中国の経済が急速に発展してきたから、留学生の経済負担も軽くなった。

しかし、留学生の不安感は、すべて消えたわけではない。なぜなら、今の留学生は、以前の交通や通信、経済面からの不安感と違い、中日関係などの面からストレスを受けている。戦争のせいで、多くの祖父母や父母の世代の人たちは日本に対して、偏見を持っている。だから、子供が日本に留学したいと言うと、一も二もなく反対する。しかも、今年、中日関係が一層悪くなりつつあり、親たちは子供の安全を心配する。それでも日本へ行った留学生は、中国人に誤解がある日本人に出会って戸惑ったり、生活習慣の面の大きな違いでカルチャーショックを受けたりして、日本での生活がうまくいかないこともあるだろう。

しかし、交流をするとき、摩擦を生じることは必ずある。摩擦を怖がって、交流をしないことは絶対にだめである。自分の考えや価値観を堂々と述べ、他人と論じ合い、お互いに理解しあうことこそ留学生のすべきことではないだろうか。そうすると、中日両国の人々は、お互いにもっと深く理解することができるだろう。

私が最も羨ましいと思うことは、留学生がただの教科書や噂による日本ではなく、写真や文章で描かれた日本ではなく、自分の目で見、耳で聞き、実際の日本に触れることができるなのである。なんといっても、教科書も噂も、それに写真も文章も、それらはあくまでも他人が見て日本を記録しているもので、自分の目と耳で触れたものではない。つまり、他人が見たことで偏見を持っていても、実際に日本と触れて自分で判断していなかったら、実際の話にならないだろう。例えば、今年の９月、中国のあちこちで反日運動が起こった。ちょうど日本に留学する準備をしているクラスメートが日本で悪い目に遭わないか私は心配でならなかった。だが、日本に着いたクラスメートから「心配はいらないよ。少なくとも、私の周りは穏やかだよ。」と知らされた。このことから、一方的に相手を悪く推測すれば、中日両国の交流はできない。真の日本に近づき、中日両国の間の誤解を解くためには、留学生の力が欠かせないと思った。

両国の若い世代がお互いに交流し、理解しあうことができるのは何よりも重要なことだと思う。この世界はいずれ私たち若い世代が作るものだからである。若い世代が偏見を捨て去り、理解しあえば、中日両国の未来はきっともっと明るい方向に向かっていくだろう。しかし、それは祖父母や父母の世代の間のことを放っておくというわけではなく、その面で努力し続ける一方で、若い世代に中日関係について違う角度から考えさせることが必要である。なんといっても、若い世代のほうが新たなものに対して、もっと受け取りやすいからである。

今日、留学生はその役に立っているのではないだろうか。留学すれば、必ず同じ若者同士が出会う。彼らが作るその小さな友情は、まさに両国の友好の未来を指しているのではないだろうか。それは政治家の美しそうな幻想より、確かに見える太陽への道ではないだろうか。留学生の存在は、感動をもって私の心を打つ。

（3）三等賞

中日交流について感動的なエピソード

大連工業大学　李蓬

中日両国は一衣帯水の関係にあります。この両国は昔から色々な分野で政治や文化、経済などの面で幅広く様々な交流や施策が行われてきました。近代になって特に中日両国国交正常化が実現されて以来両国は益々幅広く多くの分野で色々な協力と交流が行われています。異文化をお互いに交流するために、これからも日本と中国がうまく交流していかなければならないと思います。そして、中日交流について感動的なエピソードは常に私の脳裏に浮かんでいます．

大学に入ったばかりの時、私は日本人の先生と一緒に食事をすることがあります．勘定するとき、先生は「今日、私がおごります．」と言いました。その時の私は「日本人の割り勘のこと」がまだよくわかりませんでした。でも、先生がおごりすることは私に恥ずかしいと思います。その時勘定できなかった自分自身のことを残念に思っていた私は、ある日、日本人の先生にその話をしました。すると、先生は笑いながら、「日本では、清算するとき割り勘にすることが多いのよ。それは相手が負担を感じないようにするためです。しかし、中国では、交替に勘定するときが多いです。これは両国の異文化です．これから良く勉強してね．」とおっしゃったのです。先生の話を聞いて、私は感動しました。「なんと優しい先生ですね．」と思いました．日本人の先生は私の中国人の習慣を考えてくれて、いい気品を持っています．先生のやり方を私に粛然としてえりを正します．

私は日本語学科の三年生です。そして、私は卒業してから日本語を上手に使うことができて、日本人と交流する目的を持っています。日本語を勉強して、日本が好きになりました。だから、中日両国の間で異文化の誤解や問題が発生するたびに、私には何が出来るのか、どうすればいいのかと悩み、苦しくなってしまいます。その同時に、先生は私のことを考えるために、自分の国の習慣を気にしないことを私は感動しています．だから、私も勇気を持って、前進しようと思います．もし中日両国は異文化の交流することを重視し、両国文化の交流の範囲がますます広がっていけば、中国人は日本人のことをよく分かって、そうなれば中日両国国交正常化の道は益々順調に進むと思います。私はただ中国と日本がお互いに相手国の文化や習慣を尊重することを前提にして、中日友好を深めて、異文化んの交流することを重視したいと思います。

中国と日本が一衣帯水の隣国同士であることに変わりわないと思います。お互いにもっと理解を深めて、これからは仲の良い隣国同士としてもっと協力できるようになったらいいと思います。私もその中日友好の架け橋に慣れるように努力していきたいと思っています。

絆―中日交流における感動的なエピソード―

西南大学　金立

千穂さん、見渡す限りの東海を越えて、貴方と出会ったのはなんかの縁だ。この掛け替えない絆はきっと神様が与えただろう。

一年前の 10 月、私は有難い機会を得て、東京のある大学を 2 週間訪ねた。着いた日の夜、持て成してきた千穂さんという女性と巡り合った。彼女は太陽のように眩しかった。黒くてしなやかな髪や洗練された化粧、また温かい微笑みは私の心の琴線に触れた。「初めまして、四年生の千穂です。これからの 15 日間は皆さんと一緒に楽しく過ごしたいです。何かありましたら、いつでも相談に来てください」と言った。そしてその夜、私はベッドに入った後もずっと彼女のことを思っていた。

翌日の早朝、階段を降りていたところ、食卓のそばに座っていた千穂さんと目があった。なぜかわからないか私は忽ち頭を下げた。

「おはよう。金さんじゃない？」

「は、はい。金立です」。話したいことがいっぱいあったものの、日本語初心者の私にはやはり難しすぎ、うまく話すことができなかった。朝ご飯の後、私達は原宿、渋谷に行った。初めて日本の電車に乗り、窓から外の景色を見ていたところ、「金さんは何歳？」と千穂さんから不意に話しかられた。「私は…18 歳だ」「18 歳？すごいな」。いつの間にか、私は本当の自分を彼女の前に表したいという気持ちが湧いてきて、彼女と楽しくおしゃべりをした。たぶんあの時から、私達の友情は始まったのだと思う。

まだ覚えているのは、来日して 7 日目、日本の有名な富士電機に訪問した時のことだ。昼に会社の紹介を聞き、夜は立飲パーティーに参加した。これは当時一年生であったの私にとって、貴重な体験だったが、間違った日本語を使うことが怖くて、弱虫になってしまっていた。

「金さん、どうして黙っている」と貴方は突然私の肩を叩いた。

「でも弱いな、私。きっと無理だ」

「そんなことないよ。皆親切だよ。さあ、自信出して」と言ったとたんに彼女は私の手を引いて、ある社員のところに連れて行ってくれた。彼女に励ましてもらった私は、ようやく勇気が芽生え、社員たちといろいろな交流をした。その日は初めて言葉の美しさを実感した。言葉は道具ではなく、自分の本音を吐き、相手に伝えることこそは言葉の価値だと考えるようになった。そのことに気づかせてくれた千穂さんにありがとうと伝えたい。「千穂さん、日本語と私の絆を深くさせて、ありがとう。そして、私達を会わせてくれた運命に、ありがとう。」

日本を去る日、見送りにきた千穂さんは必死に手を振り、微笑んだ。これを見た私は、目からは何か真珠のようなものが流れていた。

学校に戻ってからの一か月間は、授業や試験、サークルなどで忙しかった。以前と同じ毎日を過ごした私は、ある日彼女からのメールを受け取った。「金さん、テストはできた？日本はとても寒くなってきたよ」と書いてある。簡単な挨拶なのに、なぜか堪え切れず涙が零れた。日本での千穂さんとの思い出達が目の前に浮かんだ。それは、甘美で花のような思い出だ。

しかし、ショックも受けた。高校の親友に千穂さんのことを話した。すると彼女は信じがたい顔をして、「まじ？」と言った。実は私もよく知っている、昔日本と中国の間に怨念があるのは確かだ。しかし、その怨念に囚われていたら、両方の恨みを買うだけで何も利益を得られない。そもそも中日両国は切っても切れない絆のある隣国だ。経済大国の日本には学ぶべき価値のあることがたくさんあると思う。その上、日本人も中国人も同じ世界で存在している人間だから、違った考え方と行動方式は両国の付き合いを妨げる障害になるわけにはいかない。2012 年ロンドオリンピックの際に、日本と中国の選手は何度も一緒に表彰台に立ったり、抱き合ったり、勝利の喜びを分かち合ったりした。こんな場面を見るたびに、胸が詰まった。日中の絆は永遠に否認

できないものだ。この絆を育むために、両国民は尊重し合い、共通の発展を追ってこそ、両国の信頼関係を結べるのではないか。

千穂さん、貴方はどう思う？私達はただ普通の民衆にすぎないとはいえ、中日の友好関係を心から真摯に願っている。毎年、中日両国の姉妹校は交換留学生を派遣することになっている。したがってこの機会を通じて、今後たくさんの日本人と中国人が私達二人のような友情を持つことが見通せる。私もこの機会を通して千穂さんが大好きになった。この気持ちは国境を越え、偏見を破る力があり、いつまでも変わらない。だから、私達の間の絆をもっと強く、もっと大切にしていきたい。

本学期、私は日本の大学に留学に行く予定だ。それで、千穂さんと再び会うことができれば、最高な幸せだと言っても過言ではない。その時はぜひ彼女の手を握り締めて、日本の美しさを思い切り味わいたい。千穂さん、いい？

中国に貢献した山崎宏さんと日本の友人

長春理工大学　史可

中国と日本は国交を回復して 40 年経ちます。この間に、多くの中日交流の感動的な話があります。最も印象的な一つは、日本人の山崎宏さんの物語です。

1937 年には、29 歳の山崎宏さんは一人の兵士として中国戦争に参加しました。半年後、中国にいた山崎さんは、日本軍の中国の人に対する略奪行為などの非人道的な行為に反発して、山東省の済南市で軍隊から逃亡しました。戦争が終わって、山崎さんは「中国の人々に謝罪をするために自分の人生を捧げたい」という強い信念を持って、診療所を作りました。山崎さんは決してゆとりのある生活ではありませんでしたが、貧しい人々を無料で診察しました。

医者になってから、ずっと山崎さんの給料は変わりませんでした。100 元以下でした。別の医者が山崎さんの娘さんに「給料が上がるチャンスがあるたびに、山崎さんは他の人にチャンスをあげてしまうのです。」と言いました。1976 年、戦争が終わってから 30 年経ちました。中国と日本は国交を回復しました。この時、故郷を 40 年も離れていた山崎宏さんは戦後始めて日本に戻りました。山崎さんの家族は給料が月に 30 万円の日本の病院での仕事を見つけできました。しかし、山崎さんはその仕事を断りました。彼は「私は中国に住んでいた時間が日本にいるより長い。だから、中国に帰りたい。」と言いました。そうして、７０歳の山崎さんはもう一度中国に来ました。

初めて山崎宏さんのことを知ったとき、私は平静でいることはできませんでした。山崎宏さんは自分の一生を無私の精神で中国の人々に尽くしました。日本人である山崎宏さんの行為に私は感動させられました。中国にした日本の行為を謝罪するために、中国のために自分のできることをする山崎宏さんの精神に心を動かされない人はいないと思います

もう一つ、中日交流の中で、私自身に起きたエピソードを話したいと思います。高校時代、私たちのクラスに花子さんという日本の交換留学生が入ってきました。花子さんは交換学習期間中、私の家に住んでいました。週末に花子さんは私に寿司の作り方を教えてくれました。私は日本文化をまだ十分に理解していなかったので、分からないことがたくさんありました。そんな時、花子さんは自発的に私に説明してくれました。花子さんは中国語があまり上手ではなかったから、彼女は紙に書いて、ゆっくり日本の文化を話してくれました。学校では休みの時間に、花子さんが授業中理解できなかったところを私と一緒にやりました。夜、帰宅すると、すぐ彼女は私の部屋を訪ねてきました。その 10 日間で、花子さんは私の家族のようになっていきました。もう５年経ちますが、花子さんの真面目な様子は今でも私の脳裏に浮かびます。

この夏休み、私は家族と一緒に日本観光に行きました。そして、短い時間でしたが、日本人の親切さと真摯な態度は私に深い印象を残しました。東京のあるレストランの前で列に並んでいる時、ウェイターは私たちが外国人と見て、優しく「どちらから来ましたか。」と私に尋ねました。

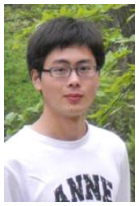
「北京から。」と私は答えました。

「いい町ですよね。東京はとても暑いでしょう。北京の天気はどうですか。」簡単な会話を通じて、日本人はとても親切で客好きだということが感じられました。食事が終わって、さっきのウェイターは私に贈り物をくれました。この贈り物は小さいものですが、中国人と日本人の友情を表しています。そして、日本人と中国人がとても近くなったような気がしました。東京の街で迷子になった時、私は見知らぬ人に道を聞きました。この日本人は一生懸命に携帯電話の Google マップで調べて、どうやって目的地に到着できるかを私に教えてくれました。

日本に滞在中、私は日本人が外国人に対してとても友好的であることを深く感じました。これは私自身の体験で、忘れることができません。最近、中日関係は敏感になっていますが、私は平和的に解決できる日が一日も早く来ることを願っています。さらに、中国と日本の友情が永遠に続いて行くことを願っています。

折り鶴とともに

合肥学院　王杰杰



勉強机の上にある小さな折り鶴を見るたびに、昨年のクラスでの出来事がいつも頭の中に浮かびます。今も、私の思いは折り鶴と共に中国と日本の友好にあります。

私のアルバムの中に一枚の写真が入っています。写真には 65 歳の日本人の先生とクラスメートが一緒に日本の東北地方の大地震の被害者の方々への丁寧に書いた寄せ書きと折り鶴と義捐金とが写っています。

昨年の三月十一日の東日本大震災、その後の原発事故のことを聞いて私たち日本語科の学生たちはいろいろ心配しました。班長としての私は何か日本のためにできることをしようと思い、先生や友達と相談した上で、寄せ書きと義捐金募金にしようと決めました。

そしてある日の午後、私は紙と水彩絵の具と筆を買い、クラス全員と先生と教室に集まり、気前よく自分の生活費からお金を募金しました。そして、日本に対する無限の心遣いと気配りをこめた寄せ書きの文章を紙に書いて持って来ました。

「世界唯一の核被爆国。大戦にも負けた。毎年台風がくる。地震だってくる。津波もくる。小さい島国だけど、それでも立ち上がってきた日本頑張れ！超頑張れ！」

「暗闇の中でこそ自分を信じよう。過去も未来も信じられない、信じられるのは今の自分だけだ。」と書いてきた友達もいました。

普段は遊んでばかりいる男子学生は真面目に「鉄腕アトム、日本人は勇気だ」と励ます言葉を書いたのです。それらを目にした先生は感激に堪えないようで、彼らと握手しました。すると、一人の男子学生はこのように言いました。「僕がこのようにしたのはすべて先生のお蔭です。先生のようなお年寄りでさえ、日中友好のために駆け回るんですから、僕も小さいことからやって日中友好に少しでも役に立てると思ったんです。」と。先生はじっとその学生の目を見ていましたが、何と言ったらいいのか分からない様子でただ微笑んでいました。

突然、二人の女子学生が、折り鶴が千羽入ったガラス瓶を抱えて教室に入って来ました。話を聞くと、彼女たちは一週間ものあいだ夜遅くまでかかってその一千羽の折り鶴を作ったそうです。中国では千羽の折り鶴を作ったら願いが一つ実現できるという言い伝えがあります。だから彼女達は苦労して作ったのです。その願いは被災された方たちへの祈りだと分かりました。それらの折り鶴はゆっくりと飛んで海を渡るでしょう。そして、私たちの祈りも日本に届くと信じています。

その日の午後のことは、学生が楽しそうに寄せ書きしていた様子や、先生が学生たちの寄せ書きをしていた姿を写真に収めていた様子や喜びや笑いとともに一生忘れないと思います。

その後、先生から「皆さんからの義捐金は４月 28 日に上海領事館に届けました。寄せ書きは、寄せ書きしていただいた様子の写真と共に、５月６日に大船渡市に送りました。」　とメールをいただきました。紹介されていたページをクリックしてみて大変驚かされました。写っていたのは、その午後の私達の寄せ書きと寄せ書きを書いている時の写真が日本の大船渡市の避難所に展示されていて、大勢の人が展示の前に立って見ていた場面でした。

私たちのこのごく小さな祈りが本当に日本人に届いたことに、どんな言葉でも伝えきれないほど心が打たれました。振り返ってみますと、中国と日本の国民が互いに助け合っていこうというその日本人の先生の志が私達の祈りを引き出してくれたと私は思っています。

中国では、「一方有难，八方支援。」という諺があります。日本語にすれば、「ひとつのところが困難にあったら、いろいろなところから支援が来る。」という意味になりますが、実は、助け合うことは日中友好の証というより、むしろ人間の本質というべきでしょう。2008 年、四川大震災が起きた時に、すぐ日本から救援隊が来て汗まみれになって働く姿を今でもよく覚えています。私達の大学の日本語学科は大きくはありませんが、今度は私たちの思いが日本に伝えられることに感激しました。

今も、私はあの日の午後のことは大切にしています。時々、折り鶴が大きく羽ばたいて飛んでいる夢を見ます。多くの先生方が、その折り鶴のように中国から日本へ、日本から中国へ友好の種を撒いています。私達の日本への祈りを引き出してくれた先生もその一人だと思います。クラスメートたちもその種を受け継いで、日本と中国に協力と愛と支援の翼を広げて行くでしょう。

私も先生の志をしっかりと受け継いで、中国と日本の友好に役立つ仕事をするつもりです。

（4）優秀賞

紫金草の思い出

鲁東大学　張姗

「花が咲いている　紫金の野の花　風にゆれる　やさしい花よ　海を越えた平和の種　想いをよせて　花が咲いたよ」（『平和の花　紫金草』より）と、軽く柔らかな合唱が耳に響いていました。

そうでした。先生と初めて会ったのは、大学一年生の日本語会話授業の時でした。「ねえねえ、聞いて。会話の授業を担当する先生のこと、知ってる？中国語がお上手だって」と周りに集まった女子学生がつぶやきました。しばらくして、先生がいらっしゃいました。にこにこして、とてもやさしそうでした。それが私の先生に対する初印象でした。また、確かに中国語がお上手です。

大学に入学した直後で、日本語が全然分からない私たちに対し、先生はまじめで親切にいろいろ教えてくださいました。単なる日本語ではなく、日本文化や風俗などのことも含んでいます。「若いうちに、できれば多くの知識を身につけて」とも丁寧に分かりやすく教え諭しました。いつも和やかな雰囲気で授業を行いましたから、みんなはとても熱心でした。ある日、先生は新出単語の書き取りをさせました。クラスの中に満点を取った人は一人しかいませんでした。勉学に勤しんでいた李さんでした。教壇に立っていた先生はその李さんを褒めました。「よくできましたね、李さん。すごーい」と。私は一つの間違いだけで 99 点を取りました。ふだん一生懸命勉強していたので、こんなささいなところで間違ってしまうなんてと、とても悔しい気持ちになったことがあります。正直言うと、私は人に負けたくないタイプです。先生に評価してもらいたくて、それから半年間ずっと日本語に打ち込んできました。ある日、先生に相談することがあり、事務室に行きました。タイミング悪く、先生は他の人と話をしていました。外で待っていたところ、

次のような話が耳に入りました。「張さんは、本当に真面目な子だ。いつもよく頑張ってるよ」と。その時、私は何もいえず、涙で目頭が熱くなりました。

教科書に書いていることだけを教えてくださったのではなく、先生は自らの経験を私たちと分かちあっていました。それらの中で私に一番強い印象を与えたのは紫金草のことでした。紫金草という花は、わが国の南京地方では「二月蘭」と呼ばれています。抗日戦争当時、日本人の薬学者で、陸軍衛生材料廠の廠長だった山口誠太郎さんが、昭和 14 年に南京でこの花に出合いました。彼は平和を呼びかける思いで「紫金草」と名づけ、種子を蒔き広めて行きました。後日、このことを題材に『平和の花　紫金草』という合唱曲が制作され、1998 年東京の足立区で初演されたということです。そして、2001 年３月には南京市でも日本から 200 人の合唱団が訪中し公演をしました。その後、ほとんど毎年中国に来たそうです。メンバーは全員退職者の方で、平均年齢は 60 歳を越えます。先生の奥様も合唱団の一員だそうで、2011 年３月、南京で公演をされました。

誰も知っている通り、折しも日本は東日本大震災に襲われ、未曾有の被害を被りました。白む空に立ち上る幾筋もの煙、横倒しの高速道路。ビルが倒れたり、人が生き埋めになったりして、にぎやかな町はあっという間に廃墟になってしまいました。テレビに見入った時のその惨状を今でも忘れません。それにもかかわらず、紫金草合唱団は活動を取り消さずに、予定通り訪中されました。新聞社の取材を受けた時、創立人の大門高子さんは「地震と津波が起きたせいで、家族を失ってしまったメンバーが何人もいます。延期するかどうか迷っていました。地震･津波は天災ですけれど、戦争は人災です。戦争はすべての生命を奪う恐れがあります。予定より人数は少ないですが、困難を乗り越えて南京にやって来ました。私たちは平和を祈求する人の集まりで、世界の平和を守ろうと望んでいますから」と語りました。

先生から伺った「紫金草の物語」です。先生と一緒に勉強してきましたが、いよいよお別れしなければならない時が来ました。先生はいつものように、ずっとにこにこしていました。しかし、その笑顔の中に少し悲しさが感じられました。その時、鬱々とした様子の私たちを見て、「最後じゃないから。また会えるからね」と、先生が慰めてくださいました。その言葉を聞き、私は少し落ち着きました。確かに、先生の言うとおり、たとえ離れていても、相手を思う気持ちがあれば、互いの絆が消え去ることはありません。

最後になりますが、私は中国で日本語教師として働き、長年中日交流に大きな貢献を果たされた先生に感謝の意を表したいです。いままで長い間ありがとうございました。

「花と生きる　広い空見上げて　風よ教えて心の絆を大地の友と共に生きる　誓いを胸に　花を咲かそう」

平和の花は、海を越え、そこにいる人々の心に咲き満ちる。それは私の祈りです

中国大学生 VS 日本大学生

蘇州大学　姜演華

比較から感知が生まれる、私はそう思う。

日本語を専攻にした以来、日本との繋がりが深まり、日本人と接触する中で、特に日本の大学生の職業についての考え方や大学生活の送り方などに驚いた経験は少なくない。

例えば、中国の学生の場合、学校の用事の合間に私的な約束を入れるのが通常の考えで、もし重なったとしても必ず学校を優先させるが、日本の学生は学校のことよりバイトなどの個人のことを優先することもあるようだ。

また、ある日本人の先輩の話を聞き、小学校、中学校からずっと一つの夢を追い続けていることを知り頭が下がる思いをしたこともある。中国での二十年あまりの日々を振り返ってみると、自分も含めて身近な同年代の知人にもそのような人は極めて少ない。なんとなく進学し、とりあ

えず卒業したら立派な仕事を見つけお金をたくさん稼ぎたいという考えが中国の若い世代の常識になっているのではないかと痛切に感じた。

数多くの異文化体験の中で一番印象深いのは、中日交流の一環として日本の小学生と交流をしたことだ。子供たちに将来何になりたいと聞いたところ、花屋さん、ケーキ屋さんなどの答えが飛び出して思わず驚いてしまった。なぜなら、中国の子供にこのような質問をすると、必ず科学者、数学者、会社の社長などと答えるからだ。

子供の憧れの職業にすらこのような違いがあることには実に考えさせられた。このような経験から、普段の生活で、日本の大学生の学校生活や私生活など、特に職業についての考えにさらに注意を払うようになった。

日本人の友達になぜ今の大学、そして学部に入ったのかと聞いたところ、驚いた顔で「興味があったからに決まっているでしょう」と返され、一瞬無言になったことがある。中国の若者は殆どが大学を選ぶとき、親・親戚・先生の意見や将来性の有無なども考慮に入れるからだ。

日本の大学生は、就職の際にも、収入や勤務時間・福利などを重視する中国の若者と正反対で、社風や人間関係、労働環境などのソフト面をより重視する傾向にある。大学院への進学を希望している学生も中国ほど多くなく、知っている同年代の日本人の友達の中に、大学院に入りたいと思っている人は一人もいなかった。

それだけでなく、学校生活の送り方にも中国といろいろ違うところがある。専門知識の修得に全力を傾ける中国の大学生に対し、日本の学生は部活動を非常に重視し、学校の授業を受けると同時にアルバイトや人脈作りなどの社会的勉強もよくしている。

中日大学生のそのような違いはその生きてきた時代の社会構造や周りの環境と無縁ではない。それらの経験から、私は両国の大学生と関わる情報を集めながらいろいろ考えた。

中国は若年層を中心として能力社会、学歴重視社会への傾斜傾向が強く見られる。大学院生の募集規模は、同募集が再開された 1978 年から、わずか 30 年あまりの期間に、50 倍以上に拡大したという。大学院に入って自分の専攻分野の知識を一層深め、理想職により近づきたいと考える大学生は多い。住宅問題や恋愛・結婚、競争社会へのプレッシャー、両親の介護、就職難なども、進学を後押ししているようだ。メンツを重んじる中国社会で、高収入の大手企業に就職し親孝行したいと考えている大学生も多いのだろう。

一方、日本社会では、グローバリゼーションの進行により、個人主義化が徐々に進みつつあるが、欧米ほど個人主義が強い社会ではないため、能力主義、業績主義の影響を受けつつも、「集団主義」が主流を保ち、年功序列制度も崩壊せずに存続している。日本の「ゆとり世代」と呼ばれる大学生は「ゆとり教育」の中で育っており、教科書の内容だけではなく、思考力や人間性も重視した教育を受け、学校活動や社会活動への参加度が比較的高いなどの特徴があると言われている。日本の大学生のほとんどは、4 年の間に様々な業種のアルバイトを経験し、社会に出るうえでの一般常識や、労働の大変さを経験している。家庭からのプレッシャーも中国ほど大きくなく、職業を選択するときには体裁などをあまり気にせず、精神面の充実をより考える。

両国の大学生が対照的な傾向を示しており、それぞれ問題点もあると思う。

中国の大学生は、勉強に集中しアルバイトをあまりしないため、「啃老族」のように金銭面で親に依存することが多いのだろう。

一方、日本の場合、「ゆとり教育」は歪みが出ており、学生の学力の低下が指摘されている。文部科学省はその問題を十分重視し、それまでの学習指導要領を改訂し、「ゆとり教育」からの脱却をはかった「脱ゆとり（教育）」を実施し始めた。

中国の学生は自立心を培い、日本の学生はもう少し勉強に力を入れる必要があると感じた。中国と日本は一衣帯水の隣国である。未来の責任を担っている若者たちがお互いに習い、相手の長所を取り入れ、自分の短所を補うことによって双方への理解を深められればと思う。

話がずいぶん逸れたが、日本を見ることで自分の国の特徴が見えてきたのは意外な収穫だった。逆に、自分の国の社会と文化の立場に立っているからこそ、日本社会と日本文化の特徴を一層しみじ

みと感知できた。中日交流の醍醐味と大切さはそこにもあるのではないだろうか。

中国にいる日本「鬼子」

蘇州大学　王瑩

中国ではこんな日本人がいる。いくつかの TV ドラマにエキストラ役で出演し始まり、中国で一位二位の人気を誇る湖南衛星テレビの国民的バラエティー番組「天天向上」の司会「天天兄弟」まで、彼は諦めずに必死に努力し、芸能界でついに自身の居場所を見つけたのだった…彼は俳優の矢野浩二さんである。中国で活躍している外国の俳優は多く、矢野浩二さんもその一人だ。芸能界で這い上がってきた道は簡単なものではなかったが、彼は今、中国で最も成功している外国人俳優であると言っても過言ではない。彼は中国に滞在した十年間では、事業がますます順調に進んだ。その間、重慶出身の素敵な中国人女性と結婚し、2010 年秋に女児が生まれている。今は家族と北京に住んでいる。

2007 年の元旦、実家に帰って、親族を訪ねていた矢野さんは、街頭で日本の過激派に殴られた。全身は怪我をしたことがたくさんあったけど、彼は俳優の顔が命だと思って、頭を保護した。その当時は非常に乱暴だったが、案外に落ち着いた矢野さんは、「中国を愛してることはだれもやめない。」と、大声の中国語で叫んだ。その後、浩二さんは日本から北京に戻った。実は、矢野さん自身も「自分は祖国である日本を愛しているし、中国も愛している。中国の文化も歴史も人々も、すべてが大好きだ」と言っている。現在、矢野さんには中国人の妻と娘があり、中国の地で自分の家庭を築いている。彼は「二つの国の愛が自分にはあり、この上なく幸せだと感じている」と話した。

『記憶の証明』の岡田監督と『小兵張嘎』の斎藤、『烈火金剛』の毛利隊長、『野火春風斗古城』の多田、『鉄道游擊隊』の岡村、『逐日英雄』の阿部健雄などに出演した矢野さんは、「鬼子専業家」となる。それなので、もし矢野は日本へ帰るとしたら、許さないという声が日本国内にある。つい事件が起こったのである。

中国抗日戦争をテーマーにした映画での「日本鬼子」役を出演してから、矢野さんは考えられないストレスに耐えている。もちろん、一番大きいストレスは日本国内からのである。テレビドラマ『記憶の証明』は中国で何度も放送されたとき、「読売新聞」と「朝日新聞」などのいくつかの日本有名新聞は、矢野さんが『記憶の証明』で岡田監督役に出演するニュースを報道して、一瞬にして物議を醸していた。「個人ウェブサイトも攻撃されたけど、家族の支持を持っている私は全然怖がなかった。ずっと反対者を取り合わなかった。」と矢野さんはこのように話した。

端正な顔立ちを持っている矢野さんは、現代劇において中国人役に出演してみる願いがずっと以前からあって、この機会を心から待っている。嬉しいことは、映画ファンが次第に多くなった彼は中国で少しも寂しい感じがない。今年の 1 月 21 日、上海で出演していた矢野さんは自分の誕生日を迎えた。彼は制作チームのバースデーケーキをもらっただけでなく、たくさんの映画ファンははるばる遠い所から彼の誕生日を祝った。非常に感激して涙があふれ出した矢野さんは頻りにお辞儀をした。

なぜこの日本の若い俳優は、中国抗日戦争をテーマーにした映画で罵られた日本人の軍人役を出演したか。日本では、中国侵略戦争に関わる映画は大変少ないので、矢野さんを含む多くの若者は前世紀三、四十代の戦争は詳しく知らないのである。彼も周りの北京の友達からこの戦争のことを聞いて、だんだん分かるようになった。それで、中国語で自分の出演する役を「坏蛋」と呼んだ。「人々はこの歴史をよく知るように、日本鬼子役を演じたのだ。」と、平和を希望している矢野さんは本心を言った。

中日間には払拭できない苦い歴史がある。しかし、それはあくまでも過去のことであり、矢野さんが責められる対象となってはいけない。彼は中国に俳優として生きていく道を探しに来たの

であって、侵略しに来たわけではないのだから、中国人の敵ではないのだ。日本人にとっても、彼は決して裏切り者ではない。矢野さんの国籍は日本のままだ。

昔から、中国では「和を以て尊しと為す」、「己の欲せざる所、人に施すなかれ」などのような諺がたくさんある。こういう諺からみても、人々の調和を追い求める精神があることが分かる。今日、平和と発展は世界の流れだとだれもが認めるところである。一世代には一世代なりの使命がある。我々若い人は自分の行いによって、世界平和の増進に役立ちたいと思っているので、中日両国は互いに交流し、優勢を補い合い、相互に促進し、共同発展を図れると信じるのである。

中日交流における感動的なエピソード

大連海事大学　孫志祥

1.私の祖母

「悲惨な戦争を生き抜いた人々の苦しみと戦火の中でも消えなかった、大地の人々の恩愛を永く心に刻み、日中友好の証しとして捧げます。」これは作家の山崎豊子が小説「大地の子」の序言で書いた言葉です。１９９５年、「大地の子」は中国のＣＣＴＶと日本のＮＨＫが協同して、ドラマ化しました。不惑の年を迎えた中日関係は再び釣魚島をめぐるトラブルで氷点に接近した時に、私はたまたまこのドラマを見ました、涙を禁じ得ないほど感動しました。同時に、私の頭の中に祖母の苦難にみちた生い立ちが浮かびました。

祖母は黒龍江省延壽県の軍人家庭の出身です。１９３１年日本軍は九一八事変を契機に中国東北地方を占領しました。祖母が１５歳のある日、ひと群れの日本兵が家に乱入し、祖母の母は急遽、祖母と７歳の弟を穴蔵に隠して、彼らに「どんな事があっても、絶対出て来ないで」と伝えました。深夜、祖母と弟は穴蔵から出てきて、母親を含めて家族八人全部が残酷にも殺されたことを発見しました。彼女は幼い弟を連れて２日間物乞いして歩いき、方正県付近の劉家屯についた時、ある一家の善良な農民が彼らを引き取りました。

１９４５年、日本の敗戦後、東北各地の満洲開拓団は関東軍に無情にも置き去りにされました。祖母は自分の目で当時の惨状を見ました。開拓民のなかで、１５歳から４５歳までの男子は全部兵隊に引き抜かれて、敗戦後次々に自殺しました。残ったのは婦女、児童と老人です。彼らは徒歩で数百キロを逃れてきました。川を渡る時、子供が力尽きて流されたが河岸での中国村民は誰もこの子供を救いませんでした。彼らは日本人を憎んでいるのです。しかし、祖母は少しも躊躇しないでその子供を救いました。そして、自分が持っている僅の食物を与えました。戦後の貧乏時期で食べ物は命をつなぐ貴重なものでした。おばあさんの行為は村民に理解されず、養父母も知った後、すぐに腹が立ちました。しかし、おばあさんはこの悲惨な光景を後で振り返えっても決して後悔しませんでした。祖母は言いました、「あの子供は確かに日本人だが、子供には罪がない、私はひとつ生命が目の前で失うことを見る事ができない」。

その話を聞いた数年後、私は祖母をやっと理解しました。満洲開拓団は、ただ貧困に苦しむ日本の農民です。中国東北部に送り込まれた後も同様に普通の農民です。終戦後、日本政府に放置された彼らも、戦争被害者であり、難民だったのです。大量の開拓団民が方正県に着いた後、飢えと寒さとが同時に迫る中でもう歩けない、現地でおばあさんのような善良な中国農民に救われ育てられました。長年にわたり、中国の養父母たちはどれほど苦しんだろうか、侵略者の子供を育てて、どんな圧力を受けただろうか、私は想像もできませんでした。

祖母は３年前亡くなりました。彼女は孤児になった後、貧しい農村で一生を過ごし、中日間の複雑な政治関係を理解できない。しかし、善良で寛容な祖母は愛によって恨みを解きました。愛と生命の前に、中日間の恨み、政治的利益の紛争が雲散霧消しました、これこそ両国人民の愛の力なのだと思います。

2.田中先生

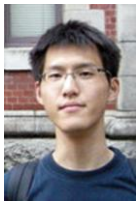
田中先生は２００１年、松下会社の総経理として大連に来て働きます。先生の母の家族は第二次世界大戦時、東京でアメリカ軍に爆死されました。先生も戦争の残酷さをよく知っています。そして、田中先生は創価学会の池田大作会長の弟子です。池田会長は周総理の友人として、中日人民の友好往来のために甚大な貢献をされました。先生は周総理と池田会長の“友誼の魂”を受け継ぎ、２００２年「小金橋」という組織を創設し、中日友好の事業に身を投じています。先生は自費で大連の大学生に奨学金を提供しています。奨学金を得る条件は中日友好の事業を熱愛して、積極的に「小金橋」のイベント（主に中日友好事業の紹介や、周総理と池田会長の意志を伝授）に参加する。先生の日常生活はとても質素です：携帯電話は無名なブランド、スクリーンにひび割れがあっても使用しています。カメラは少なくとも５年以上使用して、お出掛けはバスに乗って行く ....。しかし、中日友好の事業に対して、先生は何事でも手間と費用を惜しまずにやっています。現在まで、大連の８つの大学の学生に、毎年二千元、十年間、全部で４７０名の学生が奨学金を受け取りました、総額も２００万元に達しました。

十年間、ある学生は十年前の学生から大学の日本語先生に成長しました、家庭も持っていて、依然中日友好を自らの責任として、「小金橋」のイベントに心を込めて力を尽くしています。現在、田中先生はすでに退職して、６２歳の高齢でも大学で一生懸命に中国語を勉強しています。先生は「私は中日民間の友好交流を促進する非営利の会社を創設し、中日友好の後継者を養成しようと思います」と，目を輝かせました。田中先生は子供を持っていませんが、中国の学生たちを自分の子供ように真心で接し、父親のように穏やかで親しみやすく、生き甲斐と青年の使命を教える。

周総理は「水を飲むとき、井戸を掘った人を忘れるな」とおしゃいました。これは先生のように中日友好のために尽くしている中日の友人の貢献を称えていると思います。日本は中国にもっとも近い国と同時に、もっとも遠い国です。しかし、私の祖母と田中先生のように普通の人民の努力によって、どれだけ時が流れても、ひどい偏見があっても、両国の人民の心は繋がっていると私は信じます。

中日交流における感動的な人物や出来事

上海外国語大学　沈震乾



今年６月末、「第五回中国昆劇芸術祭」が江蘇省の昆山市で開かれた。そのなかで上演された特別な「牡丹亭」が観客を唸らせたという。昆劇の伝統演目が出されたことは何の変哲もない話だが、ヒロインの杜麗娘を演じた役者の名前を見て実に驚いた。歌舞伎俳優の坂東玉三郎、だった。

約 90 年前、坂東氏の祖父（十三代目勘弥）と父親（十四代目守田勘弥）は京劇女形として名高い梅蘭芳との間に交流をし始めた。坂東氏は幼い頃から、その影響を受けつつ中国の古典劇に興味を抱き、特に京劇「貴妃酔酒」の魅力に取りつかれていた。憧れあってのことか、二十歳の時、父親とこうしたエピソードがあった。「お前、新作物なら何がやりたいのだ」と父親から聞かれ、「楊貴妃をやりたい」と答えると、「お前、とんでもないことを言うもんじゃないよ。なかなかできるものではないんだよ」と諭されてしまった。しかし、京劇への強い思いと弛まぬ日々の研鑽により、当時語られた抱負は十余年後の 1987 年、舞台「玄宗と楊貴妃」の上演でようやく花開いた。

その後、京劇の源流に昆劇の存在があることと、「貴妃酔酒」も昆劇の「牡丹亭」の様式から影響を受けたことを知り、昆劇を演じるという新たな挑戦に踏み切るようになった。ところが、それは決して平坦な道のりではなかった。昆劇は約６百年前に蘇州の昆山地域から発祥したと言われている。その歌やセリフが昔の昆山方言を基礎にしたので、外国人どころか、一般の中国人でもすべて聴き取ることも至難の業であろう。それを越えるために、坂東氏は師匠の張継青のパフォーマンスをビデオでみることで、口のあけ方や発音を真似したり意味が解らない時にほとん

ど毎日国際電話で師匠に訊いたりして恐らく想像を絶するほど大きな努力を重ねた。2008 年、中日共演の昆劇「牡丹亭」がついに幕開きを迎え、大きな反響と好評を博した。

坂東玉三郎と昆劇「牡丹亭」。今年の中日共演を観てそれに関連する経緯を調べて知った。それは正しく感動の連続だった。

まずは、坂東氏の昆劇に対する真剣な姿である。坂東氏が杜麗嬢を演じることは、いくら歌舞伎の女形に共通しているにしても、容易なことではない。「言葉の壁」はともかく、肝心の文化的な背景を理解できないと芝居がよく伝わらないからだ。しかし、昆劇の真髄を究めるべく中国の古典を読んでセリフへの理解を深めたり資料を調べてしぐさの意味を咀嚼したりした坂東氏の姿に、思わずグッとした。同時に、何百年も前の中国のお嬢さんを生き生きと蘇らせることを日本人役者がこれほど完璧にやり遂げたことも頷けた。

次は、親子三代にわたって受け継がれる中国演劇への熱意である。坂東氏が蘇州ではじめて昆劇の美しさに惹きつけられた姿は、恐らく彼の祖父や父親が京劇から感動を得た時の姿とぴったりと重なってしまうのかも知れない。また張継青との交流と、その前の梅蘭芳らとの交流がある意味では一つの繰り返しであることも不思議な縁と思えてならない。何れにしても、坂東氏が楊貴妃と杜麗嬢を演じたことは、彼の祖父と父親がとうに他界してみる術もなかったが、その中国演劇への熱意を代々脈々と継承することができたに相違ない。

さらに、今でも謙虚な姿勢をもって中国文化に接することである。昔、日本が遣隋使と遣唐使を中国に派遣して中国の文化を教わった時代があった。いわば「生徒」と「先生」との関係だ。しかし、時代が変わり、日本漫画・アニメの流行、AKB48 を代表とするポップカルチャーの人気上昇、「武士道精神」の高揚など、周りをよく見渡せば、今は多くの文化を日本が世界に発信し続けている。そうした様々な「クールジャパン」が世界中で盛んになり文化も多元化していくなかで、依然として謙虚さをもって中国の伝統文化に目を向け、指導や意見に耳を傾けその文化の真髄を追い求めたことには、なぜか一種の感動が湧き起こった。国の文化が豊かになっているからといって、驕りを持つわけにもハングリー精神を捨てるわけにも行かず、多様な文化を吸収すればするほど独特な光彩を放つことを、今一度日本から学ぶべきではないだろうか。

日本人の暖かさ

長春理工大学　李暁琳

子供の頃から、私は日本人によい印象を持っていませんでした。それには三つの理由があります。

第一には、子供の私にとって、日本はどんな国か、日本人はどんな人か、よくわかりませんでした。一般的に、子供はただ自分に親しい人や物事に興味を持つものです。子供はただ自分の狭い世界に生きて、自分を世話してくれている人をよい人だと思っています。それでは、なぜある子はほかの人に抱かれると、すぐにわっと泣き出すのでしょう。私の狭い世界の中では、たまに家族の話の中に出てくる日本人は、私の全く知らない人でした。第二には、たまに出てくる日本と日本人はほとんどテレビからの情報です。小学校から中学校まで、私たちは一ヶ月に二回学校の講堂に集められて、映画を見ました。その映画の内容は様々で、雷鋒の優れた行いを説明するものや、迷信を打破するための宣伝や抗日戦争に関するものなどがありました。その中で、抗日戦争に関するものが一番多かったです。私自身が体験した苦難ではありませんでしたが、それでも、日本という国と日本人は嫌いだという感情が生まれました。第三には、うちのおじいさんは軍人でした。彼の幼年時代は日本人から受けた苦しみはとても大きかったです。彼の青春時代は日本人との戦いでした。おじいさんはそろそろ百歳になります。戦争のせいで、耳がだんだん不自由になつて、もう聞こえなくなってしまいました。私が一番愛しているおじいさんは私の先生だと言ってもよいです。以上の理由で、日本人によい印象を持てませんでした。

そんな私がなぜ日本語を専門にしたのでしょうか。たぶん天の意志だと思います。私はまもなく四年生になります。この三年間で日本という国や日本人が理解できるようになりました。それは、ただ言葉だけの交流ではなくて、心の交流ができた結果です。その中で、強く印象に残った二つの例をあげます。この二つの例のおかげで、私は日本人の暖かさを知ることができました。

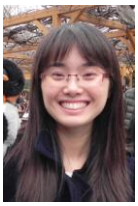
大学の二年生の時、私は「2011 中国吉林国際アニメとゲームフォーラム」のボランティアをしました。私たちボランティアの仕事は主に日本からの来賓に付き添って活動や会議に出席することです。それは私たちが一日中日本人と一緒に行動することを意味しました。こんなにも近くで日本人を見るのは初めての経験でした。私が担当する来賓は瀋陽の日本領事館の松本総領事でした。彼は中国に来てもう９年経ちます。その上、松本総領事は、中国と中国人のことについて、本当によくわかっていました。そして、松本総領事の中国語はとても流暢で、中国人のようでした。そんなことから、私と松本総領事との距離はすぐ縮まりました。そして、だんだん松本総領事の人柄に圧倒されていきました。自分はなぜ中国語の勉強をしたのか。自分はどうして中国に来たのか。自分は中日関係をどのように思っているか。総領事は何でも私に話してくれました。私の中日関係に対する一面的な物の見方を恥ずかしく思いました。別れる時、松本総領事は私に「琳ちゃん、自分が好きな道を選んで、最後まで頑張ってね。」と言いました。私はその言葉に大いに励まされて、自分の信念を貫くことを心に誓いました。日本人の暖かさに触れて、感激しました。

次は、友達に起きたことです。一緒にボランティアをした友達の王さんは日本の有名な漫画家のボランティアを担当しました。別れる時、その漫画家は「日本に戻ったら、王ちゃんに漫画を送るよ」と約束したそうです。その時、王さんは離れのつらさと共に、日本人の優しさに感動しました。寮に帰って、王さんはそのことを私たちにうれしそうに自慢しました。それなのに、一週間経っても、漫画は送られてきませんでした。その時、日本に大地震が起きて、みんなはそのことに気を取られ、王さんもだんだんその約束を忘れていきました。そんな、ある日、王さんに郵便小包が一つ送られてきました。その小包を開けると、王さんの目に涙が溢れました。小包は漫画家からの漫画でした。王さん自身も約束は約束で、ただの挨拶だと考えていました。だから、約束が果たされたことに感動しました。私たちも、日本人の暖かさを感じました。

小さい時の日本人に対する悪い印象が消えて、今、私は日本と日本人から暖かさを感じています。歴史は歴史として忘れることはありませんが、それは現在の中日友好の妨げにはなりません。重要なのは現在と未来です。もし、中国人と日本人がともに私のように、お互いに暖かさを感じることができたら、お互いに対する理解も深まっていくのではないでしょうか。今、中日関係に欠けているのは、中日両国民の暖かさではなくて、欠けているのは暖かさを感じる心だと思います。

福島の原発事故の後、原子力発電についてどのように考えるか

天津外国語大学　蘇霖坤



2050 年３月 12 日（土）　晴れ

久しぶりの青空で、今日は水族館へ行った！そして、あの話題の「国立水族館」だ！！三時間も並んで、やっと中に入った。入ってから、直接にあれを見に行ったの。本当に凄い！！！

あの魚はね、青色で、大きいマクロのような大きさで、でも、目がとても大きくて、うん、ピンポン玉のようだ。そして、口にはのこぎりのような歯があって、ワニの皮でも噛み切れるそうだ！そして、その自身の皮はナイフでも切れないそうだ。じゃ、海ではもう敵がないよね。本当に凄い！これは伝説の「海の覇者」だよね！！

そして、パンフレットでは、「この新魚種は、一ヶ月前漁師により日本海で発見され、二週間もかかって、やがて捕まえたのだ。非常に乱暴で、漁師の二人が怪我をしてしまった。肉食動物

で、人食い魚とは同系という説もある。平均寿命はまだ不明だが、天敵がないため、少なくとも20年だと見込める。正式の名前はまだないが、遺伝子の突然変異で生まれたものだと思われ、『変種魚Ⅰ』と呼んでいる。また、体中の遺伝子が安定していないため、次代では更なる変異がある恐れもある。」と書いてある。うん、つまり、遺伝子の変異でできたモンスターなの？？？

そういえば、確かに、授業で何十年前に日本海のところに原発事故があったということを勉強したことがあったよね。母も言ってくれた。確かに、あの時は津波でたくさんの人が死んでしまって、そして原子力発電所が壊れて、海も汚染されてしまっただって。まさか、それと何か関係あるの？？

うん、汚染で魚が異変して、そして『変種魚Ⅰ』が出てきて、変種魚Ⅰが『変種魚Ⅱ』を生んで、そして『変種魚Ⅲ』を生んで。。。怖い！！そして、もし、うっかりして、変種魚を食べてしまったら、私の体でも異変が起こるの？？私も変種魚のようになるの？嫌だ！！！！想像だけでも怖い！

私は明日から、もう魚を食べない！いや、水をやった野菜も危ない！お米も危ない！どうしよう？どうしよう？

電子力発電なんか、要らない！！！。。。でも、もしなかったら、電気がないでしょう？そうしたら、パソコンもできないし、テレビも見られないし。。。どうしよう。。。

よし！決めた！将来は、科学者になる！科学者！！そして、安全的に原子力が使える技術を研究するの！それなら、みんなは食べ物の心配も要らないし、電力不足の心配も要らない！やはり、科学が最高！！！

うん、今日はここまで～明日からは、苦手な数学をちゃんと勉強しよう～！！ファイト❤！

福島の放射能漏出事故を経て―原子力発電に思うこと―

華中科技大学　張玉玲

去年３月11日の東日本大震災により、福島第一原子力発電所に爆発事故が発生した。この史上例を見ないほど大きな原発事故は悪影響をもたらして、広い範囲に、高い線量の大気土壌及び海洋の放射能汚染が発生した。福島第一原発から半径20km圏内は一般市民の立入りが原則禁止されている。そして、その放射能汚染は風に乗って、ロシア、中国と台湾まで通過した。事故重大度としては、国際原子力事象評価度については最高レベル７と評価されている。つまり大変深刻な事故だったのだ。

実に、今回の事故は福島原子力発電所で初めてのことではなく、人間の原子力発電の開始から、このような壊滅的事故は発生しており、またこの事故は終わりでもない。

人間は自然を利用して、自然環境に住んでいる。自然に対抗する力というより、自然からの壊滅を防ぐことができる。今回の事故の発生は自然災害と人的原因とともに引き起ったものである。福島第一原子力発電所での設備や技術にも問題があった。今まで、世界各国に原子力エネルギーの利用は大いに発展している。これは持続可能な、清潔なエネルギーで、今それに取って代わるエネルギーの開発はまだはるか先だ。それと同時に、原子力エネルギのもたらす損害も少なくない。人間と自然の関係は対抗と屈服の歴史だ。原子力エネルギーの利用を廃棄するのことは目下、できない。新しいエネルギーの開発には時間がある。防災思想を変えなければならない。それで、もっと人間の生活を守ることができる。

中日交流における感動的なエピソード

済南外国語学校　杜雨萌

今年の９月に、私は初めて日本に行きました。「交流」というより、「勉強」のほうがこの旅のキーワードとなります。

先週の週末、友達と日本についてのアンケート調査をしました。通行人に「日本というと、どんなことを思い出しますか」と聞くのです。調査によると、「日本はきれいな国」という答えが一番多いです。その他、礼儀正しいという意見もありました。日本に行く前に、すでに４年間日本語を勉強したと言っても、私もみんなと同じ印象を持っていました。

でも、どんなことだって、自分で実際にやってみたり、体験しないしたりしないと、楽しみも苦しみも味わうことはできません。私は、今回、実際に日本に行って、いろいろ勉強して、日本人と日本社会に深く感動されました。

まず感じたのは日本人の生活に対する気持ちです。中国語では「人性化」という言葉があります。これは「人々がもっと心地良く生活するように」という願いを込めて、物を作ったり、制度を立てたりするという意味です。日本では、それを実現してデザインされたものがたくさんあります。例えば、トイレの中には「音姫」という物があります。これはボタンを押すと，水の流れる音がして、物音を消すことが出来る機械のことです。中国ではいつも面倒な事に遭います。そんな時，私は「あのようにデザインされたものがあるといいなぁ～」と思います。ですから、日本で本当に会った時はわくわくして、感動してたまらなかったです。今までなかった知己は見つかるような気持ちになりました。日本人が自分の生活をよく観察して、考えて、「もっと便利に生活できるように」という気持ちを込めて、製品を設計することに私はとても関心を寄せてるし、感動しました。だから、今でも日本の物を使うたびに、あの時の気持ちを思い出します。「製品は人がもっと便利に生活できるように作られた物」と、日本の物に教えられるのです。

日本の科学の発展は世界中でも認められています。それは日本の教育のおかげだと思います。日本に行けば、いつも地下鉄や電車で本を読む人が見られます。彼達はほとんど文庫本を持って、がらんとした地下鉄の中に座っていても、込み合っている車内に立っていても、何も話しないで、じっと本を見詰めています。でも、中国のバスでは本を読む人はめったに見られません。みんな大声で携帯をかけたり、大声でしゃべったりします。そういうことから見ると、日本人はなぜノーベル賞がもらえるか、なぜ国民の素養が高いか分かるでしょう。子供の時から、読書の大切さをよく教えられたのでしょう。だから、日本の教育は優れていると思います。教育は国の未来を握っている大切なことだと思います。これは中国で何度も勉強したことですが、日本で教育の大切さが分かるようになりました。私はこうした日本人の勉強への情熱、知識への情熱に大変感動しました。中国人もそうすればいいなぁと思いました。これが日本の電車で勉強したことです。

日本に行った３日目には中日交流活動が禁止になりました。いろんなことで、中日両国の関係は緊迫してきました。でも、日本人はみんな親切にしてくれました。中国の政府は秘密な所にありますので、誰でも東京都庁舎に入れることに私は驚きました。その中に、ボランティアとして私たちに案内してくれたおばあさんがいました。彼女は７８歳で、もう１０年間庁舎で働いていたそうです。彼女は毎日見物する人たちを案内してあげています。毎日同じ仕事をするのは大変だと思いますが、彼女は「いいえ、楽しいよ」と言ってくれました。その時中日関係は緊迫した状況で、「ここに来てどうなるのかなぁ」と実は心配していました。でも、おばあさんは「あれは政府のことだ。私たちの間では、交流などはまだ続けて欲しい。それに、私たちは今も友好関係があるじゃない。政府たちのことでこの感情を破りたくない。」と言ってくれました。実際、あの数日間、日本にいるうちはずっと中日のことをテレビや新聞を通して注目していました。そして、私は強い衝撃を受けて、本当に辛かったです。でも、彼女の話を聞いて、中日関係に再び自信を持つようになりました。この４０年間重ねた感情でそのことで破りたくないです。状況は

だんだん悪化していっても、私はできるだけ日本でお世話になったみんなに感謝の気持ちを伝えたいです。

帰国してもう一ヶ月になりました。私も今まで考えられなかったことについていろいろ考え込んでいます。感動という言葉はどんな意味だと思いますか。ただ涙を落としたりすることではなくて、心からあることを深く体験して、心の中にある一番やさしい物に触って、これからの人生に深い影響を与えることこそ、本当の感動だと思います。日本での旅から勉強したいろいろなこと、さまざまな日本人がくれた感動の気持ちは一生も忘れられないと思っています。これからは何か中日両国の人々に感動させることをしましょう。

日本交流における感動的なエピソード

西南民族大学　楊立萍

中国と日本は千年以上の交流があって、一衣帯水の国だと言われている、お互いに絆も深いし、感動的なエピソードも数え切れない程ある。この題を見て、「桜の旅は中国雲南省へ、桜を愛する民族との出会い」というドキュメンタリーが宛も自分の身を持って体験したことのように頭に浮んできた。

女優上野樹里がヒマラヤから桜前線の追跡を始め、雲南省の奥地,怒江リス族自治州に来た。ここに古くから住むリス族は中国に 55 いる少数民族の中で特に桜を愛し、独自の文化を築いてきた民族である。同じ愛情を持つ上野樹里はそんなリス族の人達に会いたくてたまらなかった。今か今かと待ち焦がれた日がやってきた、この日に李さんと言う女の子が親切に上野さんを自分の家に連れてきた。彼女は離婚後両親と一緒に住んで、自分の力で娘さんを育ててきた。上野さんがそこに滞在する間、李さんの農作業や料理の準備を手伝わせてもらったり。農作業に行く途中、彼女らは桜を見ながらゲームを楽しんだりしていた。桜祭りの前夜、李さんが上野さんを桜のよく見える場所に連れて行った、意味ありげな顔をして「私たちリス族は遠くの山に桜が咲いているのを見るが好きなの、とても心が落ち着くの」二人は自然と会話をした。母になって何か変わったかと上野さんは聞いた、「自由な時間がなくて、大変なことも多かったけど、娘の成長を見てると母になってよかったと思う」李さんは満足げに答えた。上野さんは「結婚は、人生は長いし，決めつけちゃいけない。一度散った桜もまたいつか咲く、人生も似たようなものではないか」と李さんを励ました、そのときの彼女の目には何か水晶のようなものがきらきら光り輝いていた。帰る途中、夕日の下、三人が手を繋いだ画面は心に刻まれていた。上野さんの出発の前に李さんはリス族の伝統的なカバンを上野さんに送って、「これを見てたまには私たちのことを思い出してくれたら嬉しい。もう同じ家族みたいなものだよ、だから、また桜の咲く頃ぜひ遊びに来るといい」、その時李さんは涙をもう抑えきれず、声も震えていた、上野さんは涙を流しながら皆さんに中国語で「谢谢」と何度も繰り返した。行く前娘さんに「キスしてくれる」と言ったが，幼い娘さんはキスできず、ただ泣き出した。それに、平日、子犬ですら大変恐がる彼女は、この時犬がいくら吠えても頑として母の袖を引きずって上野さんの足跡を追いかけた。彼女は何度も何度もふり返って、後ろにいる二人に中国語で「再见」と手を振りながら別れを告げた。上野さんは何も言えず、ただ名残を惜しんで先の道を歩き続けた。いつか、あの桜の木の下でと涙を拭きながら独り言を言った。そんな場面を見たら，誰でも感動せずにはいられないであろう。

このような日本の人気女優と中国の奥地の少数民族の人々にどんなつながりが出たのか、思いも寄らないであろう.だが、桜が絆になって、彼女らは出会った、自分の身分を忘れて、ただ桜好きな者同士として交流して、短い時間でも,お互い長い人生の中で忘れられない思い出になり、かけがえのない出会いになった、これは正に茶道でいう一期一会ではないであろうか。

上野樹里と李さんのことから、「絆」というものの大切さを深く感じた。中日国交正常化 40 年目の今年にあって、両国間に不愉快なことで、中日関係はうまく行かなくなってしまった。我々

はお互いに自己反省をすることで、今までの悪い関係を改めようとしなければいけないと思う。特に、大切なのは両国間にこれ以上誤解を招かないようにお互いに思い遣ることで、もっと多くの交流の架け橋となる絆を探すことである。日本語を勉強している私は、日本語の絆で、努めて自分の力を尽くして何か役に立ちたいと決心した。今、日本語をちゃんと身に付け、客観的に日本のことを中国人にちゃんと伝え、自分の国のことを日本人に紹介して、一人でも多くの両国人民を彼女らのような交流ができるようにするべきだと思う。例えば、今年の夏休みに、私は日本人の観光客を接待したことがある。その時、日本語を通じて私の知る限り四川事情を紹介して、取り分け、観光客に麻婆豆腐を代表とする四川料理の作り方、材料などを説明したら、彼らも喜んで日本のことを私に教えてくれた。日本語と四川料理の絆で、私たちは楽しく交流できるようになった。

上野樹里と李さんの言葉は今も頭に残っている。私はこれをきっかけとして、自分の夢を見続けることができた、だが、一生懸命に努めても、一人の力では限りがある。皆力を出しあって努力すれば、きっと明るい未来を迎えると信じている。